邊へ來り、一鍾を飲んで樂み給へ」と三藏の手を携りて扯立つる。三藏沒何女怪と俱に草亭の裡に出で給へば、女怪且鍾子を擧げて一杯を吃し、三藏に與へける。三藏止む事を得ず、鍾子を手に取揚げ、少時躊躇ひおはします。行者師父の耳の中に飛入り、「此酒は葡萄酒なり。一杯を喫み給ふとも苦しからず」と低語けば、三藏遂に此一鍾を喫終り、向の計策の如く、親手一鍾の酒を斟ぎ、杯中に喜花を斟起し給ふ時、行者早く蟭蟟虫と變じ、喜花の下に飛入りて妖精が飲乾すを待居たり。三藏則ち鐘子を妖精に送り給へば、女怪大いに懽喜び、急ぎ手を取つて三藏を拜し、却て酒を飲まず、且鍾子を下に指置きて、幾句の情話を訴べつ、少時して鍾子を取揚げける時、彼喜花已に消果てて、彼蟭蟟虫現れ見えければ、女怪小指を以て虫を挑げとり、地上に彈き捨てたりける。行者謀計の成らざるを見て口惜く思ひ、卽時一隻の大鷹と變じ、翅を掀べ爪を輪開し、酒肴卓席、盤碟の類を盡く打捽碎きすて、外面に向ひて飛去りけり。女怪是を見て大いに驚き、「這洞中に原這樣なる畜生なし。思ふに今日親事を做すに善からざる日にて、天より此災を下せるならん。我又更に良辰を擇み、改めて唐長老と親を做すべし」とて、亦三藏を東廊の裡に送り、推籠めおき、小妖的を呼んで筵宴の家伙を收めさせけり。却說行者は、草亭を飛出で、草花の裡に隱れて少時潛み居たりけるが、忽ち後邊の方より散亂と香の烟飜り出でけるにぞ、行者不審く思ひ、身を轉して打探看るに一座の石壇の上に一張の卓子を備け、卓子頭に香を焚き、正面に兩個の大金字の牌子あり。是を讀むに、一個は「尊父李天王之位」又一個は「尊兄哪吒三太子之位」と寫著けたり。行者是を看て滿心歡喜び、遂に彼牌子と香爐とを取つて直に洞外に出で、八戒沙僧等が等居たる處へ飛皈り、唏々哈々として笑ひ居たり。八戒沙僧是を見て問うて曰く、「長兄這樣に懽喜び給ふは、師父を救ひ出し給ふにや。然れども師父の見え給はざる事は奈何」行者、彼牌位と香爐を地に指置きて曰く、「我們師父を救ふに及ず。此牌位を以て玉帝に訴へ奉らば、師父は自然助かり給はん」沙僧が曰く、「此牌子那里に有りしや」行者曰く、「此牌子則ち彼女妖怪が供養する所の牌子なり。想ふに彼妖精は、李天王の女兒にして、三太子の娣なり。他凡氣を發して下界に到り、妖邪と成つて我が師父を拿へしものならん。我今より天上に昇り、此牌位香爐を証證と做し、玉帝に奏し奉り、李天王父子を呼び、下りて我が師父を救はしむべし」八戒が曰く、「玉帝に奏聞せんには、告文なくては協ふべからず。行者曰く、「我則ち告文を主張むべし」とて、頓て行李を開き、師父の紙筆を取出し、一張の狀子を認め、是を袖裡に推納れて、牌子香爐を手に取りて、觔斗雲に打駕りて急ぎ天上に昇りけり。

○心猿識得丹頭　姹女還歸本性

行者直に南天門の裡通明殿に到り、四大師を迎へ、禮を作して仔細を賴み、靈霄殿の下に入り、頓て玉帝を拜し、位牌と香爐を取出し、彼紙狀兒を呈上りければ、玉帝是を取揚げて讀下し給ふ。其文に曰く、

告狀人孫悟空。　年甲在牒。　係東土唐朝取經僧唐三藏徒弟告。　爲假妖攝陷人口事。　彼有托搭天王李靖。　同男哪吒太子。　閨門不謹。　走出親女。　在下方陷空山無底洞。　變化妖邪。　迷害多命。　今將師身。　攝陷曲邊之所。　渺無踪跡。　切思伊父子不仁故。　縱女氏成精害衆。　伏乞憐難行。　拘至案。　收邪救師。　明正其罪。　深爲恩。　便有此上告。

玉帝是を看畢りて驚き給ひ、「是全く李天王が過失たるべし」と、急ぎ狀子に批を居し、太白金星を宜して命じ給ひ、行者と同く、狀子を持せて托塔天王の住する處の雲樓宮に使し給ふ。金星旨を領し、行者を引將て李天王の宮宅に到れば、天王急ぎ出迎へ、禮畢りて後、彼狀子を受取り、讀も終らず大いに怒つて曰く、「這猴孫、我を悞ち告げたり。我怎生這樣の事有らんや」金星曰く、「天王怒を住め給へ。今牌位香爐御前に有りて證見とす」天王曰く、「我唯三個の男子、一個の女兒あり。大兒の名は金吒と呼び、今如來に侍奉へて前部護法となる。二兒の名は木吒、南海に在つて觀音菩薩の徒弟と爲れり。三兒は哪吒、常に我が身邊に在りて、朝に隨ひて駕を護る。一女の名は貞英と呼びて、今星僥に七歲、人事も尙知らず、怎生妖精と成らんや。這猴孫實に惡むべし。譬へば下界の小民すら、誣告の罪は三等を加ふるの法あり。況や我は天上の元勛なり、且斬つて後奏するの職を受く。我且他を斬つて後入朝せん」と、魚肚藥叉の諸將を呼び、遂に行者を綑縛めければ、金星の曰く、「我御前に在つて他と同く旨を領す。怎生他を縛め給ふや」天王曰く、「他が如きの反人、寔に免し難し。金星少時坐し給へ。我且他を斬つて後同く朝に入るべし」と砍妖刀を取出し、已に斬らんと爲る處に、忽ち一室に聲有つて、「父王少時待ち給へ」と呼つて、哪吒三太子立出で給ふ。天王是を看て、「爾何の故に我を住むるや」三太子の曰く、「父王忘れ給へる事あり。實に女兒下界に在り」天王曰く、「我唯爾們四個の兒弟のみなり。怎生又外に女兒あらんや」太子の曰く、「彼女兒は原一個の妖精にて、三百年以前、靈山に在りて如來の香花寶燭を偸み食ふ。如來我等に命じて他を捉へしめ給ふ。當時父王、如來に乞ひて他が命を救ひ給へり。他其恩を思ひて、遂に父王を拜して父と唱

へ、我を拜して兄と做し、後心を改めて、下界に在りて牌位を設けて香花を備ふと聞けり。他不期も又妖精と成つて唐僧を陷害れ、却て孫行者に我們を告へらる。他は則ち結拜の恩女にて、同胞の親妹にあらず」天王驚いて曰く、「我實に是を忘れたり。他が名は何とか云ひしぞ」太子の曰く、「他三箇の名あり。上首、金鼻白毛老鼠精と云へり。寶燭を偸むを以て攻めて半截觀音と號け、後下界に在つて亦地湧夫人と做づく」天王當下初て省悟し、親手行者が繩を解かんとするに、行者却て身を轉廻し、「誰か我が繩を解かんとするや。我此儘に玉帝に見えて、事の始末を奏すべし。金星疾く我を列れて皈り給へ。李天王と、御前に於て折辨せん」と口に任せて嚷ぎけり。天王沒奈何、金星を央みて方便を求む。金星再三行者を和め、漸々に綑の繩を解下し、殿上に坐せしめ、金星又行者に對ひ、謂て曰く、「今大聖御狀を告げて、妖精は天王の女兒なりと云ひ、天王は我が女兒にあらずと云ひて、兩個御前に在りて只管折辨し、理非速かに不分ときは、管ず兩三日を過すべし。天上の一日は下界の一年なれば、彼妖精强て師父と親事を做さば、忽ち一個の小和尚を生じ、遂に師父を洞中に住め置かば、却て爾が心一箇に一大事を過つにあらずや。今唯玉帝へ解狀を呈上て、李天王父子と俱に下界に至り、爾の師父を救ふに如かじ」行者是を聞きて打底頭、「老官兒の言實に理なり。我、然らば爾の面に愛て此官事を任すべし」と遂に一張の解狀を寫め、金星と俱に靈霄殿に到り、玉帝へ回奏したりける。天王父子大きに懽喜び、急ぎ天兵を引領れて行者と俱に南天門を立出て、少時の間に下界に降り、陷空山無底洞にぞ至りける。兼て待ちたる八戒沙僧、天王父子の來り給ふを看て、急ぎ禮を做して相見え、事の仔細を語りあひ、皆一齊に洞口に至り、且行者と太子と、天兵を領いて洞中に下りいる。彼女妖精は、此日亦筵宴を設け、三藏を草亭の裡に携へ出で、已に親事を做さんと欲する處に、乍ち許多の人音聞えけるにぞ、頓て外面に跳り出で、行者を見て大に怒り、忽ち兩口の劍を打振つて伐て掛り、看々後邊に哪吒太子の居給ふを見て、大いに驚き怕を做し、俄に地上に拜伏し倒れ臥しければ、太子則ち衆位の天兵に命じ、縛妖索を以て女妖精を綑めさせ、其外洞中の小妖們を盡く綑め取り、洞門外に引出しければ、行者は跡より、師父を尋ねて助け出し、洞を出て來りければ、八戒沙僧等大いに懽喜び、師徒四個天王父子に拜謝すれば、天王父子は妖精を牽領れて天上に歸り去り給ふ。三個の徒弟們は、三藏を扶けて又西方大路に出たりけり。

○難滅伽持圓大覺　法王成正體天然

話說三藏師徒は、又西に向ひて進みけるに、時正に仲夏梅雨の節に當り、雨に沾ひ日に嘆し、只管急ぎ行きける處に、忽ち前面に善財童子現れ出で、空中より高く叫んで曰く、「唐僧靜に來り給へ。此西五六里は則ち滅法國と呼べる土地にして、彼國王、此三年前より、羅天大愿を立て、一萬個の和尚を殺さんと誓ひ、這兩年に已に九千九百九十六個の僧を殺し、今四個の和尚を要め、殺して一萬の數を滿んとす。唐僧城に入り給はゞ、宜くその防を做し給へ。我今菩薩の旨を領して、是を告げん爲に來れるなり」とて南を差して飛去りけり。三藏是を聞いて、空に向ひて禮拜し、戰々兢々として行者を呼び、「怎麼して此國を過ぎんや」と曰へば、行者曰く、「師父憂ひ給ふ事なかれ。今天色既に晩んとす。若鄕民城に歸る者有つて我們を見ば惡かりなん。少時僻靜なる所に身を潛め、商議を做して行くべし」と、大路を避けて一個の坑坎の中に至り、行者、八戒悟淨に向ひ、「儞們爰に在りて能く師父を保守れ。老孫先動靜を打探ひ來るべし」とて身を聳かして城中に飛行き、また一個の撲燈蛾兒と變じ、街上に飛下り、六街三市の人家を伺ひ、簷を廻りて行くに、此時早黃昏を過ぎたれば、家毎に燈光を點じ、家裡の光景明かに見えわたる。爰に一簷の飯店あり。裡に入つて看れば、八九個の旅人、大家々々衣服頭巾を脫捨て、酒に醉ひて打臥し居たり。行者是を見て、一個の計策を思ひ附き、家裡を飛廻つて、燈光を盡く打消し、本相を現し、彼四五個の衣服頭巾を一集に抓取り、悄々に外面に跑り出で、又雲に飛駕りて師父の居給ふ處に皈り來り、三藏に向ひて曰く、「師父此處を過ぎんと思ひ給はゞ、和尚の模樣にては協ひ難し。我今飯店にて幾件の衣服頭巾を借來れり。我們今是を着て、俗人に打扮ち城に入り、賈人なりと云ひて飯店に一宿を要め、明朝五更の時打立ちて城を出ば、候令我們を見る者有りとも、和尚と悟る的あらんや」と云へば、三個是を聞いて、「都て理なり」と是に同じ、夫より個々俗人の衣服頭巾を着し、袈裟法衣の類は皆行李の裡に收め、行者又商議を定め、「列位、是一夜師父徒弟の字を云出す事なかれ。師父を指して唐大官と呼ぶべし。八戒を猪三官、悟淨を沙四官と呼び、老孫は孫二官と呼ぶべし。店中に至らば、列位都て口を開くべからず。只何幹も老孫一個に任せ置き給へ。飯店の主人、何の賣賈ぞと問はゞ、此馬を牽いて樣子と做し、我們馬を賣りて活業とす。十個の兄弟を夥伴へり、我們四個且前へ來りて爰に一宿を要む、六個の兄弟們は、一群の馬を牽いて明日爰に來るべし、と云はゞ、店の主人管ず懽喜びて欵待すべし」と云ひければ、三個も是を聞いて、「此謀策上

計なり」と一齊に愕ぴ、個々准備整ひければ、遂に白馬を牽いて大路に出で、不多時城門に到りける。此時泰平の境界、いまだ城門を關さず。四個直に城中に入り、街上に添ひて急ぎける が、嚮に行者が衣服を偸みたる飯店の前に至れば、彼旅人等家裡に在つて、或は衣服見えずと云ふ者も有り、或は頭巾を失ひたりと云ふ者も有りて、聲々に喚き襲ぎ居たり。行者心中含笑、然ども夜の事なれば、不知體にて疾足に過往ぎ、頓て一軒の飯店を見當け、行者前み依りて門を敲き、「這裡に宿すべき處や有る」と呼はれば、一個の婦人裡より答へて、「官人達、且這方へ入せ給へ」と云ふ。又一個の漢子出來て馬を牽入れ、急ぎ四個を樓上に導引ひいる。四個、燈籠の後の火陰處より、大家樓上に登る。一個の婢婦又一個の燈籠を携へ登るを、行者曰く、「今宵月亮えたれば、燈光を用ふるに及ばず」とて火を吹滅し、纔に座定りける時、二個の漢婦は樓を下りける。

此家の主人、五十有餘の婦人、一個の了鬟に四碗の茶を齎せて樓上に登り、三藏們四個に向ひ、「渚も列位は那里より來り給ふや。亦甚の賣買を做し給ふや」と問ひけるにぞ、行者曰く、「我們は北方より來れる的なり。馬を賣りて活業となす」婦人曰く、「官人の尊姓は何と唱し候や」行者曰く、「這一位は唐大官、彼は猪三官、這は沙四官、老孫は孫二官といふなり」婦人笑つて曰く、「何れも異なる尊姓なり」行者曰く、「世間に不多姓名なり。我們十個の兄弟を夥伴へり。六個は尚城外に在り、明日一群の馬を牽いて此處へ來るべし」婦人曰く、「一群に多少の馬を牽き給ふや」行者曰く、「大小百十疋餘り、都て皆我が牽きたる馬の若し。唯毛片は箇々不一」婦人曰く、「孫大官人は寔に大大の賈人なり。倖僥我家に宿り給ふ。若別人の家ならば、管ず官人達を住むる事能はず。我が家房室濶くして、飼草料も又乏しからず。幾百疋の馬を牽き給ふとも、都て皆能く養ひ得べし。我が家爰に住する事多年、我が夫は趙氏なりしが、不幸にして早く世を去り、我今寡婦にて此家を存つ。是故に世人我を喚んで趙寡婦と稱做せり。我家原來上中下三樣に客人を管待す。今小人を先にし君子を後にす。且房錢を定め候はん」行者曰く、「常言に、貨に高低三等の價有り、客は遠近一般に看る事無しといへり。府上、怎生三樣に客を管待すや。且是を語り給へ」趙寡婦が曰く、「彼上中下三樣とは、且上樣は五果五菜、小娘兒を請んで陪歇を爲しむ。一位毎銀五錢なり。中樣は三果三菜、小娘兒を請ばず。一位毎銀二錢なり。下樣は尊客に告るに及ばず、唯便ち飯を用ひ、幾文の飯錢を得るのみ」行者曰く、「我江湖上に在つて、那里五錢の銀を出さざらんや。然らば上樣を安排へ來れ」趙寡婦是を聞いて滿心勸喜び、樓上を下りんと做るとき、三藏行者に低語て曰く、「他猪羊の類を用

ふるにあらずや」と曰へば、行者是を聞いて急ぎ趙寡婦を呼びて曰く、「我們今日齋戒日なり、鮮きを用ふる事なかれ」趙寡婦訝りて曰く、「官人達は長齋を做し給ふや、月齋を做し給ふや」行者曰く、「我們庚申齋を做るなり。今日卽ち庚申なり。今宵且素食を安排へ給へ。飯錢は上樣に依つて奉上すべし」趙寡婦是を聞いて萬千懽喜、遂に樓上を下りけり。些時有つて許多の素飯を安排へ來りけるにぞ、師徒四個大いに愕び、個々是を吃しけるが、食し終る時に至りて、趙寡婦又樓上へ登り來り、行者に對ひ、「小娘兒は幾個呼ぶべきや」と問ひける。行者曰く、「我們既に齋戒日なり。又六個の兄弟們未だ來らず。明日他們が來りし時、個々一會に呼んで樂むべし」趙寡婦が曰く、「然らば明日十人を請んで待候はん」とて、了鬟を喚んで家伙を收めさせて下りけり。三藏また行者に悄々、「我忒だ辛苦的なり。我們若熟睡して頭巾を落し、家人們に頭を見られば、大いなる誤ちならずや。一室の黑き處を要めて睡らば可からん」行者聞いて「是理なり」と點頭き、急に又趙寡婦を呼んで曰く、「此猪三官濕氣あり。沙四官は痲氣有りて風を怕る。唐大官は黑き處に睡す毛病あり。我も又差明を好まず。一室の黑暗處あらば、我們を睡さしむべし」趙寡婦少時沈吟して曰く、「我家眺望を專にして造てたれば、黑き處一室もなく、亦涼きを好みて作したれば、風は殊に透すなり。風を忌ひ黑きを好み給はゞ、

下室に一張の大櫃の候が、裡に四五個睡すべき程の寬さあり。此裡風を通さず、亮を透かさず。爰に入りて睡し給はゞ奈何」行者曰く、「甚好。我們其櫃の裡に入りて睡すべし。快く前行せよ」と云ひければ、趙寡婦大いに打笑ひ、「然らば這方へ來り給へ」とて、前に立ちて樓上を下る。三藏師徒は、行囊を取りて跡に連きて樓上を下り、後房の一邊なる大櫃の裡に入り、行囊まで揵ぎ入れ、一齊に成つて睡したりける。趙寡婦上より蓋を鎖し、其身も臥房に退きけり。憐むべし這四個、仲夏暑氣の時節と云ひ、大櫃の裡に氣を閉ぢられ、些少の風さへ透かざれば、個々鬱氣に堪難く、彼方へ推し這邊へ押され、三更過る時刻に、纔に睡りに着きにけり。行者は獨却て眠らず、故意と搗鬼を云ひて曰く、「我們が本身五千兩、前日の馬三千兩、今兩塔聯裡に四千兩あり。這一群の馬を賣らば、又三千兩は有るべし。利足も又許多らん」と獨細言き居たりけり。

四編　卷之三

○前章之下

行者は、寔の賈人と思はせ和尚と悟られぬ爲に斯く云ひしを、豈計らんや、這家の裡に偸賊在りて、今暗に行者が說言を聞き、急ぎ門外に走出で、二十餘個の强偸を引卒れ來り、門扉を破り、一齊に動と打入りければ、家内の男女叫び兢き、四方に散りて逃迷ふ。彼强偸們、却て家裡の財寶を奪はず、個々後房の一邊なる大櫃の處に至り、彼櫃を繩にて堅く結び住め、八九個の偸賊是を擔ひ、亦一個の偸夫白馬を牽出し、一齊に此家を走り出で、直に城東に向ひて跑行き、守門の軍兵を斬殺し、城門を出んと做す處へ、巡城總兵官と東城兵馬司と、人馬を領し城を巡りて歸り來かより、偸賊と見るよりも、「夫遁すな」と指揮しけるにぞ、偸賊們は大いに驚き、多勢に敵する事能はず、四散に成つて逃去りけり。官兵們は、偸賊們が捨置きて去りたる彼大櫃を見て、是何等の物なるを知らず、「且明旦朝に奏聞して、後に此櫃を開くべし」と兵士輩に分付けて、白馬を牽かせ、大櫃を總兵府の裡に捷ぎ入れさせ置き、其夜は大家安歇

みけり。此時三藏櫃の裡に在つて是を聞き大いに驚き、悄々に行者に云ひけるは、「明旦、官兵們此大櫃を擔ひて國王の前に至り是を開かば、我們都て僧の身なり。管ずしも一萬の數に加へて殺さるべし。今怎麽して是を遁んや」と悲み給へば、行者師父を諫めて曰く、「師父氣遣し給ふな。我一個の計策あり」とて、頓て耳の裡より金箍棒を把出し、變じて鋼鑽と做し、彼大櫃の底に孔を揉穿け、身を搖かして蟻と變じ、這孔より爬出て、總兵府の戸の透間より外面に出で、本相を現はし、雲に駕りて飛行き、皇宮殿の裡に下り、大分身晉會神法を使ひ、左の臂上の毫を盡く拔下し、口より仙氣を吹蒐け、幾千の瞌睡虫と變じさせ、唵字眞言を念へて當方の土地神を呼出し、這般師父の難を語り、「爾們我が助力せよ」と、彼瞌睡虫を殿中に放たしむ。土地神命を受けて、行者と俱に彼瞌睡虫を、皇宮内院、五府六部、各衞門、大小官員の宅内、都て品職在る者の顏に盡く一隻づゝ放たしむ。原來夜陰の事と云ひ、彼瞌睡虫顏に住りたる者ども、前後も知らず熟睡して、奈何なる事をも覺えずあり。行者又右の臂上の毫を若干拔取り、數千の小行者と變じさせ、鐵棒を出し、幾千口の剃頭刀と變じさせ、一個の小行者毎に、剃頭刀一口づつ持たせ、皇宮内院五府六部、各々臥室に入りて、國王を上首、后妃宮女、大小の官員們が髮を盡く剃落さしむ。數千の小行者、數千人の髮を剃落し、殿中若干の比丘尼

と和尚を作做へおき、行者忽ち身を揺つて、小行者も瞌睡虫も、皆原の毫に返し、左右の臂上に收め、剃刀兒を原の鐵棒と做し、耳の中に藏し納れ、土地神を返し、雲に駕りて總兵府に飛皈り、又螻蟻と變じ、扉の縫兒より裡に入り、彼大櫃の底の穴より這入りて、師父に此由を說話り、八戒沙僧も是を聞いて暗に笑ひ居たりけり。

却說翌旦に至り、內院の宮妃睡を覺し、平生よりは頭冷く覺えけるにぞ、手を轉りて頭上を撫て見れば是奈何、忽ち髮を失ひ、一個の比丘尼と成り居たりけるにぞ、大いに驚き哭き、急に了鬘を呼びければ、「阿」と應へて出來る了鬘を見れば、是も同く頭髮を亡ひ、圓き頭を抱へ、涙ながらに出來る。偖はと驚き、又外の了鬘を呼ぶに、是も猶髮を亡ひ出來る。是唯妖怪狐狸の處爲ならんと、外の宮女輩を問聞くに、那個も皆髮なくて、出來るも出來るも、殘らず尼僧の姿なり。大家驚き且悲み、急に官員們を呼びければ、出來る官員又是禿子なり。是はと怕き外のを呼べば、那個も〳〵皆禿子。看々、皇宮內院、五府六部の裡の男女、一個として頭髮有るはなく、都て皆和尚と成りけるにぞ、許多の官員驚き狼狽へ、「抑奈何なる妖怪の處爲ならん。快く君王に奏聞すべし」と、個々急ぎ入朝しけるが、國王未だ起出で給はず。衆官寢宮に近き呼醒し奉れば、國王驚き、何幹にやと出御あれば、是亦一個の和尚皇帝なり。衆官是を看て增々呆掙呆て、唯泪を流し、都て五府六部、各衞門、大小の官員們、俱に皆表章を奉り、昨宵殿裡の男女、總て皆髮を亡ひたる由を奏聞すれば、國王又自己の頭上を撫で、更に恐懼を做し給ひ、少時兩手を拱き頭を低れ、嘆息して曰ふやう、「是朕當時許多の僧を殺したる報にて、天より我を戒め給ふなるべし。朕此後不都に和尚を殺す事を停止るべし。能く此旨を國中へ觸下すべし」と命じ給ひける。衆官此旨を領承し、已に退朝せんと爲る處に、巡城總兵官と東城兵馬司と、連忙しく入朝し、昨宵城東にて許多の偸賊に出遇し、一五一什、仔細奏聞し、彼白馬と大櫃を朝庭に牽居ゐける。國王是を逐一に聽き給ひ、衆官に命じて彼大櫃を開かしめ給へば、裡より四個の和尚現れ出たり。國王はじめ衆位の官員輩、行者八戒等が異形なる形勢を見て、心中深く怕れをなし、「抑和尚們は那國より來れる者ぞ」と問ひければ、三藏合掌して曰く、「貧僧は、東土大唐王の旨を奉じ、西天大雷音寺に至り、佛を拜し經を求むる の僧なり。昨宵玉城に到りし處に、國王一萬人の和尚を殺し給ふの由を承解り、斯の如く俗人の模樣に打扮ちて飯店に宿り、大櫃の裡に隱れ睡し候を、計らずも、偸賊の爲に大櫃を盜み出され、官兵士の手に度り、今又庭上に至る事を得たり。萬望は君王、我們四個を免して西方に赴かしめ給はゞ大恩ならん」國王是を聞いて、俄に衆官に命じて三藏を殿上に登らしめ、龍

滅法國王
三藏師徒
不逢

床を下りて三藏を拜し、「儲も老師父は、天晴上國の高僧なり。朕却て失迎の罪あり。曾て此國の和尚、朕が行政を誹謗りたるを以て、朕就ち誓を發し、一萬僧を殺さん事を要め、既に九千九百九十六個の和尚を殺したり。不期も昨宵、宮中の后妃君臣皆盡く髮を亡ひ、僧形となれり。是則ち天より朕が罪を咎め給ふ處なりと首て悟り、當下佛門に皈依せんと爲るの處なり。萬望は老師父、朕君臣們を門下と做し給はゞ、國中の財寶を以て獻じ奉らん」行者曰く、「我們は德を積むの僧なり。些一も財寶を要めず。唯處持するの關文あり。萬望は陛下是を倒換め、寶印を用ひ給ひ、我們を西方に送り出し給はらば、管ず其德に依つて、國家安全、萬民快樂を保ち候はん。唯此國、滅法國と唱る事、忒不祥なり。今より欽法國と號し給ひなば可ならん」國王是を聞いて大いに懽喜び、急ぎ衆位の官員們に命じ、國中に令を下し、欽法國とぞ改め給ひける。三藏師徒も少時殿を辭し下り、別室に入りて法衣を更め、行者私に一根の毛を拔き、一個の行者と變じさせ、三藏の身邊に置き、本身は昨夜取來りし彼旅客們が衣服頭巾を搔抱き、隱身の法を使ひ、空中を飛行き、昨宵の飯店の簷端に衣服頭巾を投落し、又殿中に飛返り、一根の毛を身に返し、師父と俱にぞ居たりける。國王は三藏師徒を兩日住め、萬般の素筵を設け、丁寧に是を管待し、遂に關文を倒換了、欽法國の印を用ひ、君臣個々列を正し、唐僧四衆を城外に送り出し、七八里を過ぎて別れけり。

○心猿妬ニ木母一　魔王計呑レ禪

三藏師徒は、欽法國を跡になし、西に向ひて急ぎける。一時亦一座の高山に登り、前面遙に望み給へば、忽ち山崖の間より一陣の風登り、怪みて看る處に、亦一陣の霧を發し、直に半空を罩ひ昇る。行者是を看て、且師父を少時待たせ置き、雲に駕りて空中に立つて、山崖の間を打探看るに、一個の妖精石上に座し、左右に三四十個の小妖圍繞せり。行者心裡に思ふやう、我今是を師父に告げば、師父亦管ず怕れ給はん。且八戒を欺きて那里へ遣はし、彼妖精們と戰はせ、他們怎麼計の手段あるや見るべし、と頓て雲を下り、三藏の前に至り、打笑つて曰く、「我生平は能千里の間を打探見ると雖も、今日却て大いに看錯りたり。彼風霧は是妖精にあらず。這前面に一村あり。鄕中の人家善根を好み、一家一家に乾飯を蒸して僧に施すにて候。霧と看えしは人家の蒸籠の湯氣なり」八戒是を聞き、私に行者を一邊に引き往き、「長兄今那里の人家に至り、齋を吃ひて來りしや」と低語き問ふ。行者曰く、「我今非時を吃ひて來りたり。那菜蔬太だ鹹くして多く吃難し。儞去きて吃ん事を思ふや」八戒曰く、「我既に飢ゑたり。快く

去きて彼非時を吃せんと思ふなり。長兄師父に云ふ事なかれ」行者曰く、「我師父に云はど、儞一個怎麼して去くや」八戒曰く、「我些一主張あり」と云ひて、頓て三藏の前に到り、「師兄今前村の人家齋を就して僧に施すと云ふ。我們那里に去つて齋を領はんと思へども、此馬却て草料を要め、人家の墻を打攪さば可からず。倖僥に今風霧霽れたれば、大家且爰に在つて待ち給へ。我去つて些の嫩草を取來り、馬に飼ひて後一齊に人家に去きて齋を吃し候はん」三藏大いに懽愔んで曰く、「儞生平と替りて、今日能く心を用ふ。快く草を把來れ。飼卒りて後那里に行くべし」八戒是を聞いて、計成したりと愔び、釘鈀を腰に揵け、山の凹に跑り行き、一個の矮胖和尚と變じ、他原經を念ふる事を知らざれば、口裡に上大人を細言き、木魚を敲き前み行く。爰に彼妖怪は、小妖們に命じて、大路に出て往來の人を待たせける處へ、不多時八戒前面より來りけるにぞ、小妖們是を見て一齊に把圍み、衣を扯き腰を推し、山崖に扯去かんとす。八戒其手を捻ぢて曰く、「儞們扯住くに及ばず。今我儞們が家に去きて、個々の齋を領せんと欲す」小妖們が曰く、「我が大王、儞を拿て蒸熟して吃んとし給ふに、儞却て齋を領せんと云ふや」八戒是を聞いて大いに驚き、偖は他等は一夥の妖精にて有りけるを、彼弱馬溫我を欺き、齋を施す家有りと僞りて爰に遣はしたり、と心裡頗る怒を生じ、忽ち本相を現はし、腰より釘鈀を把出し、散々に突立てければ、小妖們狼狼廻り、後をも不顧して逃返り、老妖大王に斯と報ず。老妖怒つて、急ぎ一條の鐵杵を取つて跑來り、八戒を見て喝つて曰く、「儞何的なれば、爰に來り我が小妖的を惱すや。速かに姓氏を名乘れ」と呼はりけり。八戒答へて曰く、「我は是、東土大唐より西天に至り經を取る唐三藏の徒弟、猪八戒と云ふ者なり。儞却て我を知らざるや」老妖是を聞き答へて曰く、「偖は儞は唐僧の徒弟なるか。我這處に在つて儞們を待つ事久し。怎麼饒し返さんや」と、鐵杵を擧げて打て係る。八戒釘鈀を輪して是に當り、兩個勇を奮ひて戰ひけり。

此時行者は、師父の後邊に在て乍ち吃々と笑ひければ、沙僧問うて曰く、「長兄何を思ひて獨笑ふや」行者低語いて曰く、「八戒は眞に獸子なり。我に欺かれて那里に行き、未だ皈り來らざるは、極めて妖精們と戰ひて在るならん。我快く往て看來るべし。師父に告ぐる事なかれ」と一根の毫毛を抜き、一個の假行者と變じ做し、沙僧と並ばせ置き、其身は空中に飛昇り、山崖の一邊に到り看れば、八戒は許多の妖怪に圍繞れ、前に防ぎ後に支へ、沒命的と戰ひ居たり。行者是を看て聲を勵まし、「八戒不要忙なかれ。老孫來れり」と呼はりければ、八戒大いに力を得、又更に勇を奮ひて働きける程に、遂に妖精を盡く赶散しけり。行者是を得と見屆け、急

ぎ原の處に飛皈り、假行者を身に收め、不然體にて師父の後邊に坐し居たり。不多時、八戒一身に汗を流し、喘氣嘩的跑回りければ、三藏驚きて曰く、「儞飼料草は要めず、怎生這樣に連忙く回り來りしぞ」八戒身を振はして曰く、「師父に是を語るは甚面目なき事ながら、我が師兄に哄欺かれ、假に馬飼料を要むるを名とし、那里に去きて齋を吃せんと思ひしに、却て一夥の妖怪に圍繞まれ、命も危ふかりしを、亦師兄の助力を得て、漸々に脫れ歸りたり」といふ。三藏大いに怪みて、「悟空向より爰に在りて、那里にも出でず。怎生儞に助力せんや」行者大いに打笑ひ、遂に以實に仔細を語りければ、三藏も沙僧も大いに笑ひを催しけり。行者亦曰く、「八戒、儞今開路將軍と做りて、師父を保守りて爰を過ぎば、此地第一の大功と做すべし」と云へば、八戒聞いて、向に妖精が手段は知りたり、遂に是を領掌し、「然らば我師父を保守りて此地方を過るべし」と、前に進みて山中に分入りけり。

却說彼老妖大王は、洞中に立歸り、默然として不言坐し居たり。洞中の小妖們問うて曰く、「大王生平に那里より歸り給へば愷びの色あり。今日怎生這樣に樂み給はざるぞ」老妖曰く、「我久しく、東土より來る唐僧の肉を吃ふ者は長生を得ると聞き、日毎那里に出て待受けたるに、不測も今日他が徒弟八戒と云へる者に出遇ひ、斯の如く敗陣して逃還れり。他が麾下已に這樣の徒弟あり。我唐僧の肉を吃はん事協はず。今是を憂ふるなり」と。當下一個の妖怪前み出でて曰く、「我向に獅駝洞大王の處に在りし故、他等が事を能く知れり。他が麾下に三個の徒弟あり。一の徒弟を孫行者と呼び、三の徒弟は沙和尚といふ。彼八戒は二徒弟なり。唯怕るべきは彼孫行者なり。他神通廣大にして能く變化を做す。五百年前大に天宮を鬧せし時も、普天の神他を降す事能はず。大王唯他們を無事に過し給ふに如かじ。若唐僧を拿へんとせば、怕らくは却て害を引出し給ふべし」老妖大王是を聞いて大いに驚き、「彼猪八戒すら今日の手段あり。若孫行者に遇はば、奈何して是を防がんや」と愈色を失ひける。當下亦一妖前み出て曰く、「大王那ぞ這樣に怕れ給ふや。我一個の計策を設けて、管ず唐僧を拿へ候はん」老妖曰く、「儞怎麼なる計策を用ひて唐僧を拿ふるや」彼一妖の曰く、「且生平に變化に能く熟たる小妖を三個出し、皆俱に老大王の模樣に變じさせ、三處に伏埋させ置き、一個は孫行者と戰はせ、一個は猪八戒と戰はせ、一個は沙和尚と戰はせ置き、其間に大王空中より手を伸して唐僧を捉へ給はば、囊裡を探つて物を取が若くならん。是を號けて分辨梅花の謀計とは云ふなり」老妖是を聞いて滿心歡喜、頓て變化に熟れたる小妖を三個見出し、三個の假大王を執做へ、山路の一邊に出張りて唐僧の來るを待居たり。三藏那ぞ是を知らん、馬を前めて山深く入り給ふ處に、

忽ち路傍の樹間より一個の妖精現れ出で、三藏を捉へんとす。八戒是を看て怒つて曰く、「儞鬻の手段にも尙懲りずや」と釘鈀を擧げて突いて蒐る。妖怪は鐵杵を把つて是に當り、兩個大いに戰ひながら、麓の方へ下りけり。亦も那邊の樹蔭より、一個の妖精現れ出で、行者を眼的て打て懸る。行者心得たりと、鐵棒を把つて是を支へ、只管に戰ひながら、遙那里へ隔りけり。亦一個の老妖怪、木立の茂みを跳り出で、悟淨を白眼的打て係る。沙和尙寶杖を把て相敵し。三個三方に離散れて、沒命的と戰ひ居たり。眞の老妖大王は、半空より是を打探ひ、三藏一個馬上に在すを看定し、頓て虛空より手を伸ばし、唐僧を扯抓み、飛ぶが如くに洞中に歸りけり。

○木母助ノ威征ニ怪物一　金公施ノ法滅ニ妖邪一

三個の徒弟們は、遂に妖精を赶退け、三方より立歸り來り、師父を尋ぬれども見え給はず。行者大いに嘆息して曰く、「是管ず他が分辨梅花の謀計に中りたるならん。我們快く師父を尋ねて救ふべし」と三個一齊に走りけるに、這方の山の溪峽に、果然一座の洞府あり。石門の上に「陰霧山折岳連環洞」と云へる八個の大字を記したり。行者是を見て、「是妖精が巢穴なり。師父管ず這裡に在すべし」と云へば、八戒急に釘鈀を擧げて、力に儘て突破りければ、彼石門に

一個の大窟窿を開きたり。守門的の小妖、此窟より外面を覗き、行者を見て、忽ち赶り入つて大王に報ず。老妖大いに驚き、「他今爰に追來る。怎麼して是を防がんや」先鋒の小妖曰く、「我亦一個の計策を設けて、他を哄欺き還すべし」他等若歸り去らば、寛々と唐僧を蒸熟し、受用し給へ」とて兼て拿吃ひし人の死骸の中より、似合しき頭を一個尋出し、髮を剃落し、和尙の頭と做し、顏に鮮血を塗汚し、盤に盛りて門口に持行き高く嚆つて曰く、「大聖爺々、怒を止めて我告す幹を聞き給へ。我が大王唐師父を帶歸り給ひし處に、洞中の小妖們、何の道理も辨へず、互に是を奪ひ合ひて、儞一口吾一口と、遂に唐師父を喰盡し、唯一個の頭を吃餘したり。今大聖に是を皈し奉る。取還りて葬送を活業み給へ」と、八戒が突破りたる石門の窟の中より、彼頭を投出しければ、行者是を看るよりも、「儞は師父已に亡び給ひしか」と、聲を放ちて哭きければ、八戒沙僧も一齊に哭倒れ、少時前後も知らざりけるが、八戒泪を著へて曰く、「長兄、我們且師父の頭を埋み供養を做し、然して後哭すべし」行者曰く、「儞賢くも說得たり。然れども那里にか葬らん」八戒曰く、「我に儘せ給へ」とて、穢汚をも嫌はず、彼の頭を懷裡に抱き、山崖に跑登り、釘鈀を把つて坑を穿ち、師父の頭を埋み、上に一個の塚を築き、幾條の楊柳を折つて墳塚の左右に挿し、亦幾塊の卵石を拾ひて塚の前に積み、「此柳を權

の松柏と做し、師父の墳の頂を遮り覆ひ、此卵石を權に點心と做して供養を爲べし」と亦雨々と居哭たり。行者曰く、「哭くは却て小事なり。沙僧は爰に在つて、墳と行李と白馬を看守れよ。我と八戒と、今より洞府を打破り、妖精を拿へて屍を裂き、師父の讐を報ずべし」と兩個一齊に洞門に跑り到る。守門的の小妖們、是を看て大王に斯と報ず。老妖是を聞いて、急ぎ許多の小妖們を引領れ、喊の聲を擧げて打出けるを、行者は鐵棒を輪し、八戒は釘鈀を揮ひ、些少も猶豫はず、直に羣妖の中へ跑入り、四角八面に打て廻る。許多の小妖們、少時は拒み戰ひけれども、兩個が必死の勇猛に、何かは以て敵し難く、打殺さるゝ的數を知らず、遂に四方に散亂して、老妖を上首として、去方知らず逃散つたり。行者八戒、洞も洞門に進みけるに、偖も這石門、彌が上に大石を疊重ね、入るべき透間も有らざりければ、行者曰く、「偖は他們、今戰ひ在し間に、斯まで石を積みにけん。一旦墳の處に歸りて商議を做すべきなり」と兩個打列れ、悟淨が待居る處に立歸りしが、行者亦云ふやう、「他們前門を塞ぎながら那里へか逃散りたるは、極めて後門有りて洞中に入りたるに疑なし。儞們兩個爰に在つて少時等つべし。我且洞の後邊を打探來らん」と、頓て身を轉じて赶り去り、山の後邊に輪り過れば、果的一帶の澗水滔々と流れて、澗の岸邊に一座の門有り。門の一邊に一個の暗溝あり。溝の中より紅の水流れ出でたり。行者則ち一個の水鼠と變じ、溝中に潛り入り、裡の消息を打探ひけるに、爰に幾個の小妖們、人の肉を斬みて哂ひ居たり。這故に血流れて紅の水となれり。行者是を見て、彼肉の中には、我が師父居給ふならんと、漫に涙を催しつゝ、亦身を變じて飛蟻となり、中堂に飛去きければ、彼老妖床の上に座し、默然として在りけるが、乍ち一個の小妖入來り、跪下いて曰く、「大王千萬の懽喜あり。必憂ひ給ふ事なかれ」老妖曰く、「懽喜とは怎麼なる事ぞ」小妖曰く、「我當下、後門の外の澗の一邊にて人の哭く聲を聞き、急に山上に登りて打探ひ看るに、唐僧の徒弟們、一個の墳の前に拜して痛哭して居たり。想ふに他們、向の頭を眞の唐僧と思ひ、是を埋みて墳を築きたる者ならん」行者是を聞いて思ふやう、今小妖が云ふ處を思へば、嚮のは正しく假首にて、師父は還て這洞中に匿し置きて、末だ吃はざると覺えたり、我且師父を尋ねて見ん、と中堂を飛出で、爰彌處尋廻れば、爰に一個の小門あり、緊く關して隱々たり。行者則ち透間より潛り入て飛行けば、一叢の大樹の下に兩個の人を綑縛め置きたり。一個は果的唐僧なり。行者是を看て、懽愷の餘り忽ち本相を現し、「師父」と一聲呼びければ、三藏夢の醒めたる如く、「悟空快く我を救へ」と曰ふを、行者住めて曰く、「師父聲を潛め給へ。身邊に人あり。若這消息を漏さば、或は師父を救ひ難からん」三藏曰く、「苦からず。這人は

此山下の樵夫なり。唯母と娘と、他三個住すと云へり。他我より向に妖精に捉へられて爰に在り。爾他をも一齊に救ふべし」行者曰く、「師父少時待ち給へ。我再び妖精が動靜を打探來るべし」と、亦飛蟻と變じて中堂に飛至り打探ひければ、此時許多の小妖輩、紛々嚷々として堂上に在り〻或は唐僧を煑んと云ふもあり、或は鹽に醃けんと云ふも有りて、萬般と商議最中なり。行者是を聞いて心裡に怒り、我が師父他們と何の仇もなし、怎麽這樣に師父を吃はんと爲るやと、頓て堂中に飛入り、暗に一把の毛を拔き、許多の瞌睡虫と變じさせ、妖精輩が面に放ち遣れば、許多の小妖乍ち一齊に睡を催し、眼を摺り欠を做し、個々瞌睡り倒れける。行者又一個の瞌睡虫を老妖が臉に放ち遣れば、不多時老妖も亦臥倒れ、鼾を發し、前後も知らず熟睡りたり。行者急ぎ師父の處に飛行き、本相を現はし、開鎖の法を行ひて小門を排き、三藏の綑縛を解きて援け下し、彼樵夫も俱に繩を脫下し、悄々に後門へ導引ひ出で、山を轉りて舊の處に歸りければ、八戒驚いて曰く、「沙僧、儞看よ、師父魂を現し、迷ひて我們を尋來り給へり」行者曰く、「獸子亂說を云ふ事なかれ。師父曾て死し給はず。那ぞ魂を現はし給はん」沙僧急ぎ師父の前に跪下いて曰く、一師父那里に捉はれて居給ひしや。長兄怎麽して救ひ來りたるぞ」行者則ち、洞中の動靜亦樵夫が事まで、仔細說話りければ、八戒聞きも敢ず立上り、釘鈀を取つて彼墳を突崩し、頭を穿出し、微塵に碎きて捨てけり。行者則ち師父を安座せおき、「我亦去きて妖精を拿へ來らん」とて、頓て亦後門に轉り到り、直ち中堂に入りけるに、妖怪一個も眼覺めし的なく、皆熟睡して居たりけり。行者一條の繩を要め、老妖を綑縛め、鐵棒に扯掛けて、肩に負ひて石崖の下に皈りける。八戒見るより飛蒐り、散々に突殺す。老妖纔に目は開けども、手足を綁られ、身を搖かす事能はず、遂に八戒に殺されて、一個の豹子精と成りにけり。行者亦彼樵夫に分付けて、數束の柴を取來らせ、八戒に命じて後門を埋み塞ぎ、行者身を搖揮ひて瞌睡虫を毛に返し、身の裡に收め、火を放つて柴を焚立つれば、一齊に燃昇り、洞中の小妖們睡を醒し脫れ出んとするに、前門は石にて埋み有り、後門は猛火盛んに燃立ち、一個も脫るゝ的なく、不殘叫びて死したりける。三藏は再三徒弟們が苦辛を謝し、馬に乘りて出で給へば、彼樵夫前行し、且我が矮屋に導引入れ、老母を呼んで這故由を話談り、「此四位の老佛菩薩は、我が爲の再生の父なり」と云ひければ、老嫗も娘兒も立出て、個々四衆を禮拜し、「是より西天極樂まで千里の遠きに過ぎず。少時茆舍に足を安歇めて往き給ふべし」と慇懃に介抱し、素飯を安排へて管待し、然して後四衆を大路に開路し、五六十里送り來り、泪を押へて別れ去りぬ。

四編　卷之四

○鳳仙郡冐天致旱　孫大聖勸善施霖

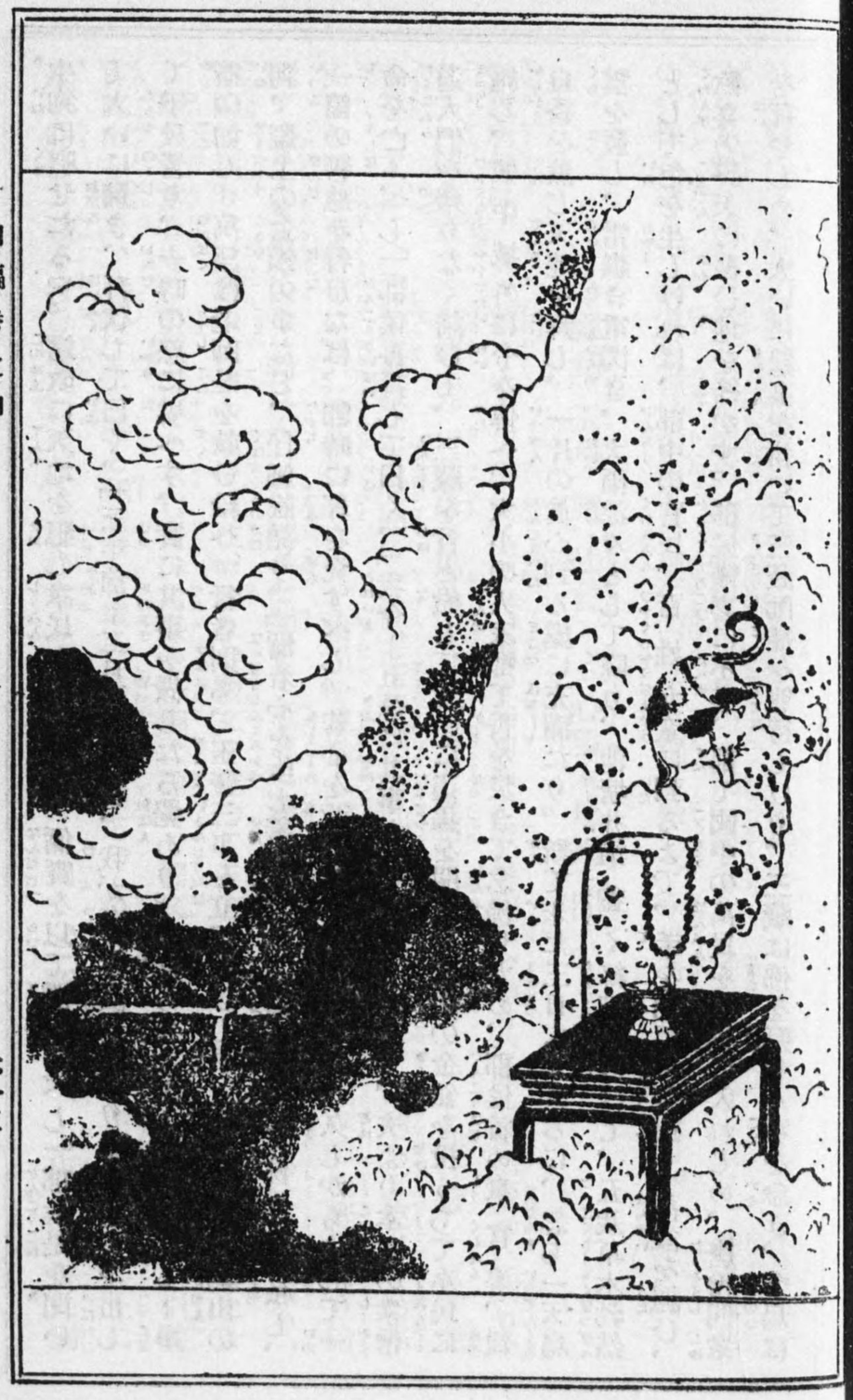
斯て三藏師徒は、亦西に向ひて行く事數日にして、爰に一座の城地あり。城中の光景忒た零落して、前面の房の簷の下に、許多冠帶の人集り居て、這徒弟們が模樣を見て、個々驚き、「抑是は妖精なるか、人なるか」と、太怪氣に眺め居たり。三藏則ち進み倚りて衆人に對ひ、「貧道は、東土大唐王の旨を奉じ、大雷音寺に至り、佛を拜し經を求むるの僧なり。貴方の開路を不知、列公に無禮を犯したり。萬望は罪を免恕し給へ」と云ひければ、一個の官人躬を鞠めて曰く、「此處は、天竺の外郡、鳳仙郡と號す處なり。近來連年亢旱に因りて、五栽不實。郡侯爰に榜文を出して、明僧を得て雨を祈らしめんとし給ふ。我們は其榜札を保守る官人にて候へば、敢て長老を咎むるに非ず」三藏是を聞いて一邊を顧み給へば、一張の榜札あり。其文に曰く、

大天竺國鳳仙郡郡侯上官。爲榜聘明師。招求大法事。茲因連年亢旱。田畝無收。富室聊以偸生。窮民難以活命。斗粟百金之價。束薪五兩之資。十歲女易米三升。五歲男隨人帶去。城中懼法。典衣當物。以存身。鄉下欺公。打劫喫人而顧命。爲此出給榜文。仰望十方賢哲。禱雨救民。願以千金奉謝。決不虛言。須至榜者。

三藏行者を顧みて曰く、「儞常に能く雨を祈る。今以處の爲に一場の雨を要め、民を救ひ國を安んぜば、豈萬善の事ならずや」行者答へて曰く、「雨を喚び風を招くの如きは、那の難き事か有ん」衆官行者が言を聞き、大いに懽喜び、人を馳せて郡侯に這由を報じければ、郡侯上官是を聞いて滿心歡び、急ぎ衣冠を整へ街上に出來り、三藏四衆を禮拜し、親自開路して四個を府中に導引ひ往き、正堂に請じ入れ、衆官大家禮畢りて後、郡侯三藏に對ひて曰く、「下官這郡を司りてより以來、一連三載の乾荒に遇ひ、草木枯盡し、五栽實らず、大小の人民盡く餓死に到らんとす。倖僥に今神僧爰に來り給ふ。若一場の雨を賜ひ、衆民を救ひ給はゞ、千金を以て德に報い奉らん」三藏行者を指して答へて曰く、「我が大徒弟孫悟空、常に能く雨を要む。萬望は他に央み給へ」行者笑つて曰く、「若千金を以て報はんと有らば、却て半點の雨も得べからず。但功を積み德を累ねば、自然と甘雨降るべし。我今一場の雨を要めて儞に送

り候はん」と、頓て堂下に立つて眞言を念動へければ、卽時東方より一朶の烏雲現れ、漸々に落し來り、雲頭に聲有つて曰く、「東海龍王敖廣來れり。今孫大聖老龍を呼び給ふ。何の命令有るや」行者曰く、「別に甚しき事に非ず。此處鳳仙郡の地、連年の旱荒に依つて五穀實らず。我今龍王を央み、雨を施し民を濟はん爲なり」龍王の曰く、「大聖の央み止事なしと雖も、我等原玉帝の命を請けざれば漫りに行雨神將を動かす事能はず。大聖已に民を拔濟ふの心あらば、當下より快く天宮に到りて、此旨を准奏し給ひ、既に玉帝の命あらば、老龍卽時に水官行雨神將を呼んで一道の雨を降らし候はん」行者是を聞いて、「然らば爾且歸り去れ。我玉帝に奏聞すべし」と且龍王を歸らしめ、直に雲に打跨りて空中に飛去りけり。郡侯衆官是を見て驚き、十分恭敬を加へ、急ぎ滿城に令を傳へ、家々に香を焚かせ、天に向ひて拜せしめ、俄に素莚を安排して、三藏們三個を管待しけり。斯て行者は、雲を縱ちて一直に西天門に到り、護國天王に見えて是を央み、鳳仙郡の爲に雨を要めたき由を奏しければ、玉帝是を聞宣して、則ち行者を殿前に宣させ給ひ、「爾今雨を要めん事を願ふ。三年前十二月二十五日、朕出行して萬天を浮遊し、三界を監觀んと思ふ時、彼鳳仙郡の郡侯、齋天の供物を推倒ふし、狗に喂せ、穢言を出して詈り、罪を犯したり。這故に他に三等の罪を與へ、三事を立てて今披香殿の裡に有り。若三事已に滿らば、卽時に雨を與ふべし。三事未だ終らずんば、爾も速に立去るべし」と曰ひて、頓て四大天師に命じ給ひ、行者を領いて披香殿に入れて、彼三事を見せしめ給ふ。行者急ぎ、四大天師に從ひ披香殿裡に至れば、殿內に一座の米山十丈計りの高さ有り。亦一座の麪山二十丈の高さあり。一隻の小鷄ありて彼米の山を喙み、亦一隻の小狗在りて麪の山を吃ひ居たり。亦一邊に一座の鐵架あり。架の上に一盞の燈光を點し、其上に長さ一尺四五寸、粗さ指程の金の鎖を掛けて、燈火の上に垂れたり。行者何の故と云ふ事を知らず、四大天師に是を問へば、天師の曰く、「那郡侯上天に罪を犯したる科に因つて、玉帝此三の事を立て給ひ、鷄米の山を喙盡し、狗麪の山を餂盡し、燈火金鎖を燒斷りたる時、始めて彼地に雨を降すべしとの旨なり」行者是を聞いて呆掙呆、此金鎖何の時にか燒斷れん。此米麪何の世にか吃盡さんや」と滿面憂の色を含み、鬱々として殿を退かんとす。天師笑つて曰く、「大聖憂ひ給ふ事なかれ。這事唯一念の善慈を做さば卽時赦すべし。大聖今より下界に下り、他を諫めて一念の善慈を行はせ給へ。卽時吾們米山麪山を推倒し、金鎖も俱に燒斷りて、三事滿れりと奏聞せば、雨自然降るべし」行者是を聞いて大いに懽喜、遂に天師に別を告げて下界に下り、鳳仙郡の城中に飛皈り、郡侯に見え、大いに喝つて曰く、「爾、三年前十二月二十五日、齋天の供物を推倒し、怎

國王の罪ゝ
ありて悟空
米山麪山
を看る



生狗に喂せたるや。這故に天地を犯し衆民を苦ましむ。爾實を以て懺悔すべし」郡侯是を聞いて大いに驚き、拜伏して曰く、「三年前十二月二十五日、我が妻の不賢に因りて、惡言を出して爭ひ詈り、一時の怒に堪へず、實に其事を做したる覺あり。不期も今上天より罪せらるゝ事斯の如し。萬望は老師是を救ひ給へ」行者則ち、玉帝三事を立て給ひし事、米山の雞、麪山の狗、燈上の金鎖の事など、仔細說語り、「爾若心を皈し善に向ひ、念佛看經して佛天に皈依し、一箇の善慈を行ひなば、卽時に罪を免すべし。若心を改むる事能はざれば、久しからずして一命を亡ふべし」郡侯再拜して曰く、「我今より急に其事を行ふべし」とて、夫より本處の衆僧道人們を殘りなく請ひて、三藏を首と做して大いに道場を開き、倉中の金銀を投うちて小民に施し、城中城外に令を傳へ、大小の人家都て香を焚きて念佛せしめ、郡侯首め衆官等、親自香を薰じ天地を拜し、一片の眞心到る處に充滿たり。斯て未だ三日ならざるに、忽ち一天烏雲を發し、雷轟き電閃き、大雨淙々として降り、池塘井溝盡く綠波を現はし、五栽草木勃然として色を生じければ、郡中の官民、百姓女童に到るまで、手を拍て皆舞躍り、萬歲を諷ひ、歡喜の聲天に振ひ地を搖かす。郡侯懽喜に不堪、都て國中の萬民を城裡に入れしめ、唐僧四衆を拜せしめ、大いに筵宴を排いて三藏師徒を管待しけり。三藏は佛を拜せん事を急ぎ、翌烏は

袖を別つて立出で給ふ。郡侯郡官等は、數人をして、鼓樂を奏し、旗幢を飜へし、三十餘里を送りて別れけり。然して後郡侯は、郡中に一座の寺院を建立し、甘霖普濟寺と號け、師徒四個の肖像を造り、祠堂の裡に安置し、連年四時の祭祠を做し、永世香火を傳へけり。

○禪到玉華施法會　心猿木母授門人

話說唐僧は、喜々歡々として郡侯に別れ、馬を向而めて數里の路を過り、亦一座の城地に到り、忽ち一個の老者に出遇ふ。三藏急ぎ馬を下り、「當方は何と云へる地方ぞ」と問ひ給へば、老者答へて曰く、「此土地は、天竺國の下郡、玉華州と呼べり。城中の主王は則ち天竺皇帝の宗室なり。此玉華王は忒だ賢德の人なり、僧道を尊敬し、黎民を愛し給ふ。老禪師城裡に入り給はゞ、管ず尊敬を受け給はん」三藏是を聞いて老者に謝し別れ、徒弟輩を帶し城中に上前入り、客館に到り、三個の徒弟を館中に住め置き、關文を把つて王府に到り、引禮官に見え、東土より西天大雷音寺に至りて經を求むるの由緣を仔細に語り、關文を換へん事を央みければ、引禮官此由を聞て、朝に入て斯と報ず。當城の主王是を聞て、急に旨を傳へて唐僧を宣し殿上に座を賜ひ、禮を行ひ關文に花字を押ひ畢り、然後問うて曰く、「國師長老、大唐より爰に到

る、幾許の年月を經給ひたるや」三藏答へて曰く、「貧僧路に在る事已に久し。十四遍の寒暑を經たり」玉華王笑つて曰く、「然らば十四年なり。想ふに途中に躭閣有りし成ん」三藏曰く、「途中の事一言に盡し難し。千萬の艱難を受け、纔に今這上郡に到れり」玉華王十分懽喜び、「已に遠方より來り給ふに、一個の高徒も在らざるや」三藏曰く、「貧僧三個の小徒弟あり。客館中に住め置き、敢て府中へ帶來らず」王華王是を聞いて、急ぎ當殿官を呼び、「唐僧の徒弟們を宣し、長老と同く齋を進めよ」と命じ給ひければ、當殿官急ぎ客館に到り、行者輩三個を導引ひて殿前に皈り來る。玉華王は他們が異形なる像を見て大いに驚き、色を失ひ立んと爲るを、三藏上前出で、住めて曰く、「千歲爺々、怕れ給ふ事なかれ。他們貌は醜しと雖も、心は却て忠良なり。都て山野の出生なれば、禮を行ふ事を不會。萬望は不敬を赦し給へ」是を聞て主王纔に心を定め、頓て典膳官を呼て四衆を暴紗亭に送りて齋を賜ひて、萬般と管待けり。元來這玉華王に三個の王子あり、皆俱に武藝を好み、大王子は一條の齊眉棍を使ひ、二王子は一杷の九齒釘鈀を使ひ、三王子は一根の烏油黑棒を使ひけるが、今日異形なる和尚們、大雷音寺に到り經を求る由にて此に來り、父王是を見て驚き怕れ給ひし事を聞いて、「他們極めて妖精の人に粧けて來れる成るべし。我們他を捉へて、虛實を糺し、若妖精ならば打殺さん」と個

個兵器を扯提げて、暴紗亭に跑來り、師徒四衆を見て呼つて曰く、「儞們は人か妖精か。實を以て來歷を語り、我輩が手を動かすを脫れよ」と罵りければ、三藏飯碗を丟下き、躬を鞠めて答へて曰く、「貧僧は、唐朝より來れる者にて、實に妖精にあらず」大王子の曰く、「儞則ち人に似たり。彼二個は、極めて妖精に疑あらじ」行者沙僧頭を擧げて曰く、「我輩都て貌は妖精に似たりと雖も、心は却て良善なり。儞三個何人なれば、這樣に吾輩を罵るや」典膳官一邊に在つて是を看て曰く、「長老惱み給ふ事なかれ。是這三位は、卽ち我が國王の小殿下なり」八戒は只管齋を食して在りけるが、此時漸々吃畢り、這方を顧みて曰く、「小殿下個々兵器を把り給ふは、吾們と手段を爭はんと思ひ給ふにや」と云へば、二王子是を聞いて、則ち釘鈀を打振つて勢を見せ給へば、八戒嘻々と笑ひ出し、「儲は小殿下も釘鈀を使ひ給ふ。我も亦同き釘鈀を持てり。今儞に見せ候はん」と、腰より小き釘鈀を取出し、一振ふれば忽ちに大太となり、金光爛熳として萬道を輝し、瑞氣千條にあり。二王子大いに怕れを做し、不期後邊へ退きけり。行者も亦大王子が齊眉棍を拿りたるを見て、耳の裡より金箍棒を取出し、一振打搖つて、椀ほどの粗細一丈二三尺の長さと做し、地上に突立て、「我這一棍、小殿下に獻進らん」と云ひければ、大王子卽ち跪り倚つて是を拿らんと爲るに、分毫も動かす事能はず。大王

子且驚き且忙れ、臉を紅染めて退きけり。三王子は原來撒起莽性なれば、是を看て憤怒に堪へず、烏油棒を廻して沙僧を打たんとす。沙僧手を以て打開き、亦降妖杖を取出せば、忽ち瑞光艶々として滿城を照し、霞亮紛々として亭中を輝かす。衆位の典膳官是を看て、個々呆々掙々て詞なし。三個の王子輩も、是を看て遂に心を返し、一齊に拜して曰く、「我等凡眼にして神師の降臨を識らず。不敬の罪を赦し給へ。萬望は一場の武藝を使ひて我輩に好拜せさせ給へ」行者是を聞いて、就ち鐵棒を拿り將つて、「這處窄挾して手を展ぶるに好しからず。空中に在つて一場の武藝を見せ候はん」と、忽ち五色の祥雲を縱ち、吻哨と一聲、乍ちに半空に飛昇り、金箍棒を打振りて、一上一下、右に廻り左に轉じ、黃龍轉身の勢を使ひ、初は人と棒と錦上に花を添るが如く、後には人の影を見ず、唯一天棒のみ働く若くなり。八戒沙僧下に在りて少時望み居たりけるが、堪へかねて、兩個とも亦空中に飛昇り、釘鈀を使ひ寶杖を輪し、上三下四、左五右六、前七後八、丹鳳朝陽、餓虎撲食の勢を做し、滿天中に瑞氣氤氳と飜へり、金光縹渺と靉靆きて、諸天神兵一時に武を演るかと疑ふ。此時王府の主王を首め、大小の官員、滿城中の人民們、都て遙に虛空を拜し、大家奇異の思を做しぬ。悟空們三個、漸多時有りて空中より飛下り、俱に師父を拜して坐しければ、三個の王子等、急ぎ宮裡に跑歸り、父王の前に跪下き、「我們首め他們三個を妖精と疑ひしに、却て是寔の神僧にて、我們忒だ紅顏りたり。今より他們を師と做して武藝を學ばん事を要む。萬望は父王是を免し給へ」玉華王是を聞いて曰く、「儞們既に他を師と爲ん事を要めば、我親自往きて是を迎へ央むべし」と遂に皇宮を立出で、鳳車に坐せず、繖蓋を張らず、父子四個步行して暴沙亭に來り、三藏四衆を大座に正し、老王座を辭りて曰く、「唐老師父に、孤一事の要あり。三位の高徒是を容き給はんや」三藏答拜して曰く、「千歲の尊命、小徒等何の異議か在らん。速に是を命じ給へ」玉華王曰く、「朕肉眼凡胎にして、向には許多の不敬を做したり。當下三位の高徒空中に在つて旋展を現はし給ふを見て、初て仙佛の臨凡を知りぬ。孤三個の犬子在り、個々武藝を學ばん事を要む。萬望は老師、開天地の心傳を小兒們に度へ給はらば、傾城の資を以て謝し奉らん」行者笑つて曰く、「我們出家人、快く幾個の徒弟に傳へん事を要む。小殿下既に這心あらば、分毫も財利の事を云ふべからず。唯眞を以て學ばゝ足れり」玉華王是を聞いて十分懽喜び、四衆を亭中に欵留せしめ、翌烏三個の王子悟空輩三個を拜し、師弟の禮を做し、他等が兵器を要めて看るに、原來他輩が兵器は、造化自然の寶貝なれば、凡體の力にて一毫も動搖す事能はず。行者是を見て、「且儞等に神力を授けて後、武藝を敎示ふべし」と、三個の

王子を一個の靜室に坐せしめ、眼を瞑がせ、眞言を念へて、仙氣を腹中に噴入るれば、三個忽ち精神俄に百倍し、進退常と大に替れり。三個の王子大いに懽喜び、頓て立出て、彼兵器を取擧げ見るに、心の儘に運し用ふ。然ども此兵器は、悟空們隨身の寶貝といひ、且斤數重くして、些少手に餘る處あれば、此三個の兵器を式樣と做し、個々斤數を減じて造らしむるに如かじと、俄に許多の鐵匠を宣入れて、王府内院に一箇の蓬殿を構へ、大王子は悟空が鐵棒を式樣とし、二王子は八戒が釘鈀を摸し、三王子は悟淨が寶杖を鑄させける。鐵匠は王子の命を受けて、蓬殿の裡に悟空們が鐵棒釘鈀寶杖を住置き、是を見て晝夜精神を籠めて鑄造しけり。

却說此玉華城より北七十里に、豹頭山と云へる山あり。山中に虎口洞と號べる處あり。這虎口洞中に三個の妖怪住めり。這妖精、一夜洞門に出でて見に、玉華城の方に當り、一道の金光赫然と發り、天を遮り地を罩ふ。妖怪是を見て怪み、雲に駕りて空中を飛行き、玉華城に到り打探ひ看るに、一箇の蓬殿の裡に三般の兵器あり。一個は鐵棒、一個は釘鈀、一個は寶杖、這三般の兵器、金光を縱つにぞ有りける。妖精是を見て大いに驚き且喜び、「是何人の寶貝なるを不知。然れども當今我眼に中りたるは、我に緣有る寶貝なり」とて、遂に三般の兵器を奪ひ取り、又雲に打駕りて豹頭山に歸りけり。

○黃獅精虛設釘鈀會　金木土計鬧豹頭山

却說幾個の鐵匠の輩、連日の苦辛に因りて、前後も覺らず熟睡し、天明に及んで起出で、蓬下に入りて看れば、彼三般の兵器を見ず。個々驚き慌得、斯と王子に報じければ、三個の王子も亦驚き出來りて、彼處爰尋ぬれども、亦更に有る事なし。萬一師父たちの收取り給ふにはあらずやと、急ぎ人を遣つて問せければ、悟空們三個も同く驚き、諸俱に出來れば、父王も是を聞いて急ぎ立出給ひ、都て皆蓬下に集りて曰く、「原來凡人の能く動すべき兵器にあらず。殊に這内院、外人の入來る處にあらず。怎麼夜中に失ひたるならん」と區々に議論して果てず。行者少時沈吟して曰く、「儞は這近き一邊に妖怪の住む處ありと覺えたり。殿下此議怎何」玉華王曰く、「神師の問甚妙なり。原此洲城の北に、豹頭山と云へる山あり。山中に虎口洞あり。洞中に一個の神仙、亦虎狼妖怪有り、と云傳へたり。孤是を訪はざれば、未何者なる事を知らず」行者曰く、「然らば、彼兵器は其妖怪が偸みたるに疑なし。我今去つて其消息を打探ひ來るべし」と云ふかと思へば、忽ちに半空に飛上り、形影は見えず成りにけり。斯て行者は、北に向ひて七十里余り飛行き、一座の山頭に住り、四方を望み居る處に、忽ち山の後邊より、兩

個の狼頭妖精たち出て、話說をしつゝ跑りける。行者是を看て、急に身を胡蝶と變じ、翩々翻々と飛行き、一個の妖精が頭に住り、他們が行くに從ひけるに、彼妖精只管說話して曰く、「昨夜大王の得給ひし三件の兵器は、世間無類の寶貝なり。明旦釘鈀會を做し給ふなれば、我輩も管す受用あらん。我輩今這二十兩の銀子を兩三兩分ち取り、且幾杯の酒を買ひ、また一件の衣服を買ひて、我們が得と做し、其後猪羊を買ひ、花帳を作りて歸るべし」と、列笑大路を上りて急ぎける。行者樣子を聽得し、偖は洞中の妖精が偸みたるに極まりたりと、心裡暗に懽喜び、今這兩個の妖精を打殺んと欲要へども、鐵棒を偸れたれば手に物なし。遂に飛下りて本相を現し、妖精に向ひて一口の唾を噴下け、定身の眞言を念へければ、兩個の妖精身を搖す事能はず、手脚を直定めて站住りけり。行者則ち他を扯倒し、衣服を揭げ看れば、果的二十兩の銀子あり。亦腰に粉き牌兒を掛けたり。一者は「刁鑽古怪」、一個は「古怪刁鑽」と寫著けたり。行者遂に銀子と牌兒とを奪取り、急ぎ雲に駕りて玉華州に飛歸り、王府に到り、主老王亦三個の王子に見え、動靜を仔細語り、「今八戒沙僧を同伴ひ、再度那里に到り、寶貝を拿返し來るべし。附ては許多の猪羊を買要めたし」と告ひければ、玉華王是を聞いて急き下官に命じて幾件の猪羊を買得め、行者に遞與へければ、行者是を手に把りて、八戒沙僧と諸俱に、再び雲に打乘りて空中に飛去りけり。

斯て三個北に向ひ、豹頭山に飛行き、嚮に定身に做置きたる兩個の妖怪の處に到り、八戒に這妖怪が像を看せ、則ち刁鑽古怪に變じさせ、行者は古怪刁鑽に變じ、彼牌兒を腰に著け、沙僧は商客に變じさせ、山の後邊に到り、凹なる處に出けるに、亦一個の青臉紅毛の小妖、手に書匣を携へ、東南に向ひて出來り、行者を看て、「古怪刁鑽歸りたるか。爾幾口の猪羊を買來りたるや」行者曰く、「猪羊合せて十五口あり。爾は那里に去くや」小妖曰く、「我竹節山に行きて、老大王を請ひて明日の釘鈀會に赴かしめんす」行者曰く、「爾其請帖を我に看せよ」と、扯拿りて、書匣を開きて看れば、一張の紙に寫著めて曰く、

明晨敬治二餚酌一慶釘鈀嘉會。　屈二尊車從一。　過山一叙。　幸勿レ外至感。

右啓二

祖翁九靈元聖老大人尊前一

門下孫黃獅頓首百拜

行者看畢りて仍ち小妖に遞與しければ、小妖急ぎ受把りて竹節山に赴きけり。行者兩個に謂て曰く、「黃獅は管ず金毛の獅なるべし。彼九靈元聖とは何者ならん」と語りつゝ、只管大路を行く處に、不多時一個の洞門を看る。是則ち虎口洞なり。大小の小妖們、刁鑽兩個が皈り來る

を見て、門を排く。行者等三個前み入れば、亦一個の小妖是を見て、大王に斯と報ずれば、妖王出來り、「刁鑽兩個皈りたるか。爾多少の猪羊を要め來りしぞ。亦那處に帶來りしは何的なるぞ」行者曰く、「猪八口、羊七口。猪の價十六兩、羊の銀九兩なり。向の銀子二十兩を邊與し、則ち五兩の不足あり。這個は是則ち猪羊を賣りたる客人なり。彼銀子を乞はん爲、且大王の得給ひし寶貝を拜看の爲に來りたり」妖王是を聞いて詈つて曰く、「彼寶貝は玉華州城中より得たる兵器なれば、若這商客彼城中に到り人に語らば惡かりなん。爾無要の事を語りたり」行者曰く、「這商客原他鄉の個、決して彼城裡に到る事なし。大王且他を許して裏に入らしめ、銀子と飯を與へて歸し給へ」妖王曰く、「既に斯の如んば、酒飯を與へて歸らせよ」と遂に三個を堂中に入しめけり。悟空們三個、堂上に登りて兩邊を打控ひ見れば、一個の廳上に彼釘鈀を置き、鐵棒と寶杖を兩邊に倚掛けたり。八戒是を見るより直に本相を現し、跑入つて釘鈀を取る。爰に及んで、行者沙僧も本相を現し、彼廳上に飛上り、鐵棒と寶杖を推把展べ、一齊に外面に討て出る。妖王是を看て大に驚き、「爾們是甚麼的なれば、我が寶貝を偸むや」と罵りければ、行者怒つて曰く、「爾賊毛團、我輩を知らざるや。我は是東土の聖僧唐三藏の徒弟輩なり。玉華州の三個の王子、我們を師として武藝を學び、我們が寶貝を模樣と做し、他輩が兵器を造鑄たしめんと、內院蓬殿に放在きたるを、爾夜陰に偸把り、却て我們を虛頭騙と云ふや。爾今我們が兵器を試看よ」と三個一齊に打て掛れば、妖王是を看て、四明鏟を打振つて跳り出で、少時支へ戰ひけれども、那ぞ三個に敵すべけんや、遂に力衰へ、東南に向ひて、風を發して逃去りけり。三個更に是を追はず、洞中を跑廻り、小的の妖精們を盡く打殺し、火を放つて洞を燒拂ひ、遂に三個雲に打乘り、玉華城に飛歸り、三件の兵器を三個の王子に遞與しければ、王子の輩を上首として衆部の官員們大いに懽喜び、虎口洞の光景を逐件に問聞き、悟空們三個が神通を稱しけり。然れども、玉華王一個、大いに憂の色有つて曰く、「彼妖精逃去つて今往方を知らず。怕らくは再般來つて讐を做さんか」行者是を聞いて曰く、「殿下管ず愁ひ給ふ事勿れ。我明旦他們を降伏し候はん」玉華王是を聞いて心安堵、筵宴を開いて只管に管待し、師徒四個遂に其日は園中に安歇みけり。

却說那妖王は、東南を指して飛去り、其夜遂に竹節山九曲盤桓洞に到り、洞中に跑入りて祖翁老妖に見え、昨宵玉華洲にて三般の兵器を拿返り、今日亦、東土唐僧の徒弟と云へる輩の爲に大いに洞中を鬧がせ、今敗北して逃來れる由を語り、「萬望は祖翁の援兵を請ひて、讐を報ぜん事を要め候」と云ひければ、老妖是を聞いて曰く、「渚は爾、他輩が事を知らず、錯惹ちて

他を犯したり。彼輩們は是原尋常の者にあらず。嘴長く耳大いなる的は猪八戒、晦氣色臉なる的は沙悟淨なり。這兩個は尙苦しからず、其毛臉雷公の若き和尙は、名を孫悟空と呼び、神通廣大なる事太甚し。是に仇を報ぜんと思はゞ、儞が手段に行べからず。我親自去きて他們を拿へ、儞が恨を霽さしめん」と、頓て猻獅、雪獅、狻猊獅、白澤獅、伏狸獅、博象獅の輩、其外諸孫を不殘引領し、個々兵器を挈提げて、一陣の狂風を發し、彼黃獅精を前に進め、徑に豹頭山に到り見れば、洞府洞門皆一堆の灰燼と變じ、六小の群妖們盡く地上に横倒りて、一個も息有る的なし。妖王是を看て大いに驚き且つ怒り、「他們怎生這般なる惡を作すや。我今洞府を燒かれ家子們を殺され、何れの處に身を倚せん」と、涙を流して悲しみければ、老妖是を諫勸て曰く、「既に爰に到りて哭泣くとも益なし。今より徑に玉華城に推倚せ、唐僧も國王も一齊に拿へ得て、儞が仇を雪むべし」と、亦一齊に引領れて、玉華州にぞ飛去りける。斯て翌旦、玉華城裡の人大家起出でて看る處に、忽ち一群の妖精、沙を飛し石を降らし、城頭に向ひ推倚せ來る。國王衆官を首め、城裡の老若男女の輩、是を看て大いに驚き、打戰兢ひてぞ居たりける。行者打笑ひ、「大家怕るゝ事なかれ。是彼の黃獅精が、祖翁九靈元聖を請ひて、昨日の仇を報んとして來れるなり。我輩三個馳向ひて、他們を拿得來るべし」と、八戒悟淨を引領れて、忽ち雲に飛跨つて城外に趂り出でて、半空に有て待受けたり。

四編　卷之五

○師獅授受同歸一　盜道纏禪靜九靈

不多時、一羣の妖精城外に倚來れば、八戒當頭に上前出でて言つて曰く、「寶貝を偸める賊怪、這般に幾個の毛團と同く爰に來るは何幹ぞや」黃獅精牙を咬んで怒つて曰く、「向日我一個、爾們三個に敵し難く、爾們に勝を讓りて退きしは、爾們が僥倖なり。然るに爾們、我が洞府を燒き我が券屬を殺し、十分の狠惡を做す。此恨大海より深し。我今爾們を饒さんや」と、忽ち四明鏟を擧げて跑り罹り、八戒を斬らんとす。八戒釘鈀を拿展べて是に敵し、兩個陣前に在つて大に戰ふ。彼の猱獅、雪獅、狡猊獅們の六妖の輩是を看て、一齊に兵器を輪して跪來る。行者沙僧も、鐵棒を振ひ寶杖を閃かし、彼六妖に相敵し、七個の妖精三個の和尚、力量を盡し勇を奮ひ、沒命的戰ひけり。彼老妖は、陣後に在つて他們が戰の透間を打探ひ、遂に烏雲に打乘りて城裡に飛入りけるが、這老妖、原九箇の頭有りけるが。唐僧と玉華王父子、都て五個を五箇の口に扯啣へ、城外に飛出で、亦八戒が後身より一個の口を開き、他が襟を啗

住め、餘りの口にて大音に、「孫兒來れ。我は且洞中に歸るなり」と云捨て、東南を指して飛去りけり。行者是を看て、儲は他が計策に中りけるよとて、急に身外身の法を使ひ、一把の毛を拔把りて數百の小行者と變じさせ、妖精們を取圍み、遂に黃獅精を打殺し、六個の妖獅們を生捉りて城中に牽入りければ、衆位の文武の官人一齊に、行者沙僧を拜して曰く、「殿下父子雙に唐僧、都て皆妖精に拿得られ給ふ。萬望は神師快く是を救ひ給へ」行者曰く、「列位官人憂ひ給ふ事なかれ。我們今亦他が六個の妖精を捉得て質とす。他管ず殿下を傷る事なし。明朝我們那里に到り、老大妖を拿得、殿下父子を救ふべし」と、且六個の妖獅們を鐵牢に推籠め置きけり。翌旦疾く起いで、行者沙僧と俱に雲に打駕り、少時の間に竹節山に到り、雲を下りて尋行くに、一個の小妖山下に在りて、兩個を看て大に驚き、後邊をも見ずして逃行きける。行者沙僧急ぎ後に着きて追行きけるに、直に一座の洞府に到りける。洞門上に「萬靈竹節山九曲盤桓洞」と云へる十個の大字を彫住けたり。小妖急に門內に逃入りて、老妖に斯と報じければ、老妖問うて曰く、「我が六個の兒孫們は來らざるや」小妖曰く、「唯兩個の和尚のみ來れり。大王輩は見え給はず」老妖王是を聞いて淚を瀧の如く流し、「儲は我兒孫們は都て他に捉得られたるなり。這恨我怎生報ぜざらんや」と、遂に洞門に跳り出る。行者沙僧是を看て、一齊に打

て罹る。老妖却て戰ふ事をせず、左右八個の頭を差伸し、大いなる口を張開き、難なく行者沙僧を啣へ住め、洞裡に飛歸り、許多の小妖們に命じ、繩を取つて兩個を堅く綑縛めさせ、老妖頓て柳棍を取て行者が頭を大太に打ちけれども、行者一向に疼む景色もなくて居たりけるにぞ、老妖驚き、「這猴が頭の堅き事、抑怎麼なる事ならん。我且今日は捨置き、明旦漫々懲治すべし」とて、兩三個の小妖們に、行者們兩個を保守らせおき、老妖は其身の臥房錦雲窩に入て安歇みけり。

其夜行者亦遁法の咒を念へ、身を些小なして繩を脱出て、衆人を扶け出さんと爲る處に小妖們是を看著け、大いに叫びて逃迷ふ。行者鐵棒を把て走廻りて打殺す。此物音に驚きて、老妖臥房の裡より飛出でける。行者急に身を縱つて洞外に脱れ出で、空中に飛昇りける時、忽ち看六甲揭諦們の神將、一個の土地神を扯帶れて雲頭に在つて行者を迎へて曰く、「大聖、是は竹節山の土地神なり。彼の妖精が來歷を知らしめん爲に、今呼來つて大聖を拜せしむ」行者大いに懽喜び、則ち土地神に向ひ、妖精が來歷を尋ねければ、土地神答へて曰く、「彼妖精は、這三年前より竹節山に來りぬ。彼九曲盤桓洞は、原六個の妖獅の住處なれども、六獅却て老妖を拜して祖翁とし、洞中の主と做せり。他は則ち九頭獅子の精。名は九靈元聖と號す。若他を降さんと思ひ給はゞ、東極妙巖宮に到り、他が主公を請來らば、纔に降伏すべし。他の人は能是を降す事能ふべからず」行者是を聞いて曰く、「東極妙巖宮は、太乙救苦天尊の住する處なり。寔に座下に九頭獅在りしを看たり。偖は彼獅獸降つて斯る妖怪と成りしや。我快く去つて天尊に是を告訴へ奉らん」と、且土地神を皈らしめ、乍ち觔斗雲を縱つて連夜に飛去き、寅の剋計りに東天門に到り、直に妙巖宮の門に入り、仙童を央み、具に事の動搖を通じ、天尊に見え奉らん事を告しけり。仙童這由を報じければ、天尊則ち行者を宣入れ給ひ、蓮座を下りて相見え給ふ。行者謹んで、九頭獅下界に降りて妖怪と成り、唐僧及び王華王父子を捉得て困苦ましむる由を訟訴へければ、天尊是を聞き、頓て仙將に命じて、獅房に往しめて彼獅を尋ね給ふに、九頭獅果して房に在らず。獅奴は却て前後も知らず睡り居たり。仙將是を看て、且獅奴を打起し、扯立てて歸り、天尊の前に引居ゑ、獅は那里にか走りて房に在らず、却て獅奴は睡り居たる由を報じければ、獅奴は只管泪を流し、「一命を饒し給へ〳〵」と叫びけり。天尊曰く、「今大聖爰に在るを以て、我且爾を打たず。爾何故に獅を走らしめ、亦何の故に然樣に睡り居たるぞ」獅奴大に驚いて曰く、「我前日、甘露殿に在りて一瓶の酒を偸みて吃し、不期沈醉を做し、獅房の鎖を忘却て熟睡致し候ひき。偖は其間に、彼獅走り去りたると覺え候。萬望は我が過

を饒し給へ」天尊曰く、「彼酒は、太上老君より贈り給りし處の名酒にして、輪廻瓊液と喚
做す。是を吃する時は三日醉醒めず。天宮の一日は下界の一年なれば、彼獅下界に在る事已に
三年成るべし。我今大聖と倶に下界竹節山に降り、他を降伏すべし」と曰ひて、夫より彼獅奴
を領跟へ、行者と倶に東天門を立出て、頓て下界に降り給ふ。不多時竹節山頭に到り、天尊祥
雲を住め給へば、行者曰く、「我且他を偽引出し來るべし」と急ぎ鐵棒を打振つて盤桓洞門に
到り、忽ち門を打破り、「潑怪的快く師父を返せ。王子を還せ」と呼りけり。老妖是を聞いて
大いに怒り、門外に跑り出で、忽ち口を張開き、行者を御へんと爲る處に、天尊聲を勵まし、
「元聖兒我來れるを知らずや」と呼り給へば、老妖是を看て驚き、忽ち四足を屈め、地上に伏
して立上らず。其時師奴拳を揚げて跑り羅り、「這畜生、怎麼して走去り、我に罪を受けさし
むるや」と、他が額を連けて打ち、頓て錦韉を他が背上に打掩けければ、天尊閃りと飛跨り給
ひ、亦綵雲を飜し、大聖に別を告げ、妙巖宮に還り去り給ふ。行者空に向ひて禮拜し、頓て
洞中に跑り入り、玉華王父子を首として、三藏悟淨八戒們が綑縛を脫き、助け出しければ、八
戒沙僧駈廻つて、小妖們を盡く打殺し、忽ち一把の火を放つて盤桓洞を燒盡し、八戒沙僧は
二王子父子を背負ひ、行者は師父を扶けて、個々神通を使ひ、直に玉華州に飛皈り、城裡に下

りければ、城中大小の文武の官人們、都て皆出迎へて禮拜し、且歡喜の筵宴を開き、皆萬歳を
諷ひ、唐僧師徒們を暴沙亭に安歇せけり。次烏に至りて、王華王旨を傳へて、盡く大小の官員
を宣集め、大いに素筵を列ね、師徒四衆を上座に請じ、君臣個々恩を謝し、萬般と管待しけり。
斯て行者が勸進に隨ひ、六個の獅の皮を剝ぎ、彼黃獅も倶に七個の肉を斬分けて、王府の官員
より城中の百姓に到るまで、盡く賦り與へければ、城中衆位の官士百姓們も、其厚德を感
ぜざるは無かりけり、

是より三個の王子、悟空輩三個の兵器を借りて模樣と做し、鐵匠を逼迫て鑄せける程に、幾日
を經て三般の兵器全く成就しければ、行者頓て大王子に棒の術を傳へ、八戒二王子に釘鈀の術
を傳へ、沙僧三王子に寶杖の術を傳へける。三個の王子、一個には信心堅く、二個には行者が
神力を受け、不日に個々精熟せるを看て、三藏遂に老王父子に別を告げ給へば、玉華王再三是
を住めけれども、三藏一向に承諾かず、徒弟們を催促して遂に別れて立出で給ふ。玉華王父子
は只管に別を惜み、車駕を准備へて遙に送る。滿城内外の衆人們、這四位の聖僧は實に活佛の
下界し給ふ處なりとて、街に盈ひ路を塞ぎ、盡く香を焚きてぞ拜しける。玉華王父子は、十四
五里餘り送り行きて、遂に袖をぞ別ちける。

○金平府元夜觀燈　佐英洞唐僧供狀

話表三藏師徒は、玉華州を離れてより亦五六日を經て、一座の城地に至る。幾條の巷街を過行くに、還て未だ城に到らず。忽看、一座の山門有り、門上の額に「慈雲寺」の三字あり。三藏是を看て、「我們今這寺に入り、少時馬を安歇めて行くべし」とて、四衆一齊に門に入りければ、裡より幾個の和尚出來る。三藏則ち、東土より西方靈山に到り佛を拜し經を要むるの來由を仔細說話り給へば、衆僧是を聞いて、或は三藏の威儀を懽愷び、或は徒弟們三個が醜きを怕れつゝ、且方丈に請待し、寺中の衆僧都て出來りて相見え、急ぎ茶飯を備へ、三藏の說話を具に聞き、個々賞贊したりける。三藏則ち衆僧に對して、這地方の地名を問ひ給へば、衆僧曰く、「此地は金平府と呼びて、則ち天竺の外郡なり。靈山の地は、我們未だ赴かずと雖も、思ふに路程忒だ遠からじ。倖僥に今元宵に近ければ、老師一兩日滯留し、這地の燈火を觀て去き給へ」三藏驚いて曰く、「貧僧路に在つて大いに光陰を錯ち過せり。今已に元宵に近きや」衆僧曰く、「今日は正月十三日なり。晩に到りて燈を試み、後日十五は卽ち上元、十八日に到つて燈火を謝す。這地本府の太守民を愛し、人家都て善を好み、今宵より燈を張り、終夜群集を做す。また金燈橋といふ橋あり。往古より名を住め、今に及んで盛んなり。老爺輩且荒山に住り、是を看て後西方に趣き給へ」と慇懃に住めけるにぞ、三藏止む事を得ず、遂に慈雲寺に宿し給ひけり。

其夜早、城中の衆人都て燈を送り來りて佛に獻じ、佛殿上に鐘鼓の聲喧しく、熱鬧なる光景は中華の元宵に異ならず。次の夜三藏亦街上の燈火を看歩行き、遂に十五夜の節に到り、本寺の衆僧に誘引れ、行者が輩三個も領列立ちて街上を遊覽し、彼金燈橋上に到れば、果して三盞の金燈あり。其燈籠の上を、金絲を以て華麗に編み、兩層の樓閣を罩ひ、琉璃を以て裡を張り、其晃月光の如く、香氣有つて紛々と數里に散ず。三藏是を見て、「此燈火何の油を用ひて這樣に香氣有るや」と問ひ給へば、衆僧答へて曰く、「老師父是を知り給はず。此油は尋常の油にあらず。是皆酥合香油なり。此金平府の後邊に旻天縣と云へる處あり。此縣に二百四十家の燈油の大戸あり。此大戸一家毎に二百餘兩の銀子を費し、大なる煩勞あり。此油一斤の價銀子三十二兩、三盞の燈火一釭毎に油五百斤、三釭俱に合せて一千五百斤、銀子合せて四萬八千兩に該る。亦雜項の使用を加へて、五萬餘兩を以て唯三夜の燈火を照す」行者曰く、「其許若の油、怎生只三夜に用ひ盡すや」衆僧曰く、「一釭毎に四十九條の燈草を扎り的け、絲棉に

裏み用ふるに、半夜の頃佛爺像を現し給へば、則ち燈火闇くなり、油都て乾き失せぬ」八戒笑つて曰く、「偖は佛爺油を収め歸り給ふならん」衆僧曰く、「實に長老の曰ふ如し。往古より佛爺油を收め給ふと云傳へたり。若亦此燈籠を獻げざる年は、五栽實らず荒旱なり。這故に、年々斯の如く燈籠を揚ぐるなり」と未だ云ひも終らざるに、忽ち半空に一陣の風吹發り、物醜しき形勢なれば、數萬の觀燈的狼狽跑り「偖早佛爺の來り給ふなり」と喚き嚷ぎ、皆我前にと四方に逃散り、一個も在らず成りにけり。衆僧們も三藏を扯きて、「佛爺降り給ふ。快く爰を避け給へ」と諫勸めければ、三藏曰く、「我は原來佛を拜せんと要むる者なり。果して諸佛降臨あらば、我は爰に在て拜すべし。那ぞ佛爺を看て逃走る事有らんや」と云ひて、却て橋上に前み出で給ふ時、風は增々盛んに吹き、風の裡より三尊の佛體現はれ出で給ふ。三藏尙も橋上に登りて是を拜し給ふを、行者身後より呼つて、「師父快く歸り給へ。他們は皆妖精なり」と、急に師父を救はんと爲る間に、三盞の燈火一時に暗くなり、空中より彼佛怪、手を指延して三藏を扯摑み、雲を縱つて飛去りけり。八戒悟淨大いに驚き、是怎麽と呆掙居るを、行者曰く、「儞輩且衆僧と俱に寺に歸り、行李と白馬を保守るべし。我今這風に從ひて追去くべし」と云捨て、急ぎ觔斗雲に飛駕りて、彼腥風を慕ひ、東北を指して追往き、天明に及んで一座の險山に下り、少時彷徨窺ふ處に、忽ち四値功曹像を現し出來り、行者を迎へ拜し、「大聖今妖怪を尋ね給ふに、路を覺り給はざるを怕れ、我們來つて傳報す」と呼りければ、行者急ぎ問うて曰く、「這山は何と云へる山ぞ。然而妖怪は那里に隱れ住むや」功曹曰く、「此山は靑龍山と號して、山中に一座の位英洞あり。洞中に三個の妖怪あり。其大的を辟寒大王と呼ぶ。第二を辟暑大王と呼び、第三を辟塵大王と號く。他等爰に在る事千年に及ぶ。常に酥合香油を食する事を愛し、假に佛像に粧けて金平府の人民を欺惑し、毎年正月元宵、那里に往きて若干の油を收めて歸り、一年の食に交ふ。今年唐師父を看るに依て遂に攝て洞中に歸り、今彼香油に煎じて吃はんとす。大聖快く是を救ひ給へ。他が巢穴は是より五六里、這石崖を廻りて往き給へ」と敎へけるにぞ、是を聞いて行者、急ぎ石崖の下を廻りて、五六里餘り過行き看れば、果して一座の洞府有り。石門の一邊に一個の石碣あり、「靑龍山位英洞」の六字あり。行者門外に立つて、「妖怪快く師父を返せ」と呼はれば、門裡より幾個の牛頭の小妖精走り出で、行者を看て詈つて曰く、「儞は是那里より來りたる的にて、怎麽門前を鬧がすや」行者曰く、「我は大唐聖僧の徒弟なり。儞が家の魔頭、昨宵金平府に來つて我師父を拿歸れり。今快く師父を還さば、儞們が一命を助くべし」小妖們是を聞いて、急ぎ裡に入りて三個の妖怪に斯と報じける。彼妖怪們

青龍山の
妖怪
三藏を
搦去

は、金平府より唐僧を拿へ歸り、油に煎んとして、萬般商議して在りける處に、小妖が斯る事を告來るにぞ、大いに驚き、且這和尚が姓名來歷を問ふべしと、三藏を前頭に扯居ゑ、三妖怪異口同音に問うて曰く、「爾は那國より來れる者にて、奈何なれば佛像を看て避退かず、却て我輩が前に進み出でたるぞ」三藏答へて曰く、「貧道は東土大唐皇帝の勅を蒙りて、西方大雷音寺に到り、佛を拜し經を求むるの僧なり。昨宵金燈橋に在りて大王の佛像を現じ給ふを看るに、貧僧肉眼凡胎なれば、只管佛爺を拜する事とのみ心得、却て大王を犯し奉れり。萬望は這罪を饒し、雷音寺に到らしめ給へ」老妖曰く、「爾が東土より爰に到るは、路大太遠し。爾尚同行あるや。亦爾が姓名は奈何。爾實を以て是を告げば、性命を饒し歸すべし」三藏曰く、「貧僧が法名は陳玄奘、亦三藏と號す。尚三個の徒弟あり。一個は孫悟空行者、則齊天大聖の歸正なり」三妖驚いて曰く、「其齊天大聖は、五百年前大いに天宮を鬧がせし者にあらずや」三藏曰く、「則ち其天宮を鬧がせし的なり。亦第二個は猪悟能八戒、則ち天蓬元帥の轉世、第三個は沙悟淨和尚、則ち捲簾大將の臨凡なり」三個の妖怪是を聞いて互に面を看合せ、「我輩僥倖にいまだ他を吃はず。一旦他を後園に綁め置き、彼三個の徒弟們を拿へてのち、一齊に煎て是を吃ふべし」と云ひける處に、亦一個の小妖走り來り、「彼和尚當下門を破り候」と報じければ、三妖怪急ぎ一群の牛精小妖們を扯領れて、個々器械を扯提げつゝ、門外に跳り出で、行者を看て罵つて曰く、「爾は天宮を鬧せし孫悟空なるよな。元來這程の小猴、却て此虚名あり。爾今爰に來り、我輩を怎麽せんと思ふや」行者大いに怒つて曰く、「爾油を偸む大賊怪、多言する事勿れ。快く我が師父を送り來れ。然なくば爾們を麐に做すべきなり」と鐵棒を把つて打て罹る。三個の妖怪、一個は鉞斧を使ひ、一個は大刀を閃かし、一個は長鎗を打振つて、行者一個に相敵し、百四五十合戰ひけり。身後に控へし若干の牛精の小妖們、一堆に跑集り、行者を中に取圍み、一齊に責立つる。行者多勢に敵し難く、遂に空中に飛昇り、雲を縱つて脱れ去り、急に慈雲寺に飛歸り、這動搖を仔細語り、八戒沙僧を引領れて、又一齊に雲に駕り、青龍山へぞ飛行きける。

四編　卷之六

○三僧大戰二青龍山一　四星挾捉二犀牛怪一

斯て三個の妖精、行者を追退け、小妖們と倶に門裡に引入り、少時歇息みて在りける處に、不多時行者、八戒沙僧を從へ、亦門外に責來り、八戒且前に進み、釘鈀を擧げて石門を突碎き、「油を偸む大賊怪、快く師父を返せ」と呼りければ、三個の妖怪大いに怒り、亦小妖們を牽領れ打て出で、更に一言をも交へず、三妖怪と三僧と、千變萬化の術を盡し、時移るまで戰ひける。數千の小妖、前後より指挾み、主に力を添へける程に、八戒沙僧力疲へ、多勢に敵する事能はず、兩個とも遂に大勢の爲に生擒られける。行者是を看て、斯ては不當と思ひければ、急に圍を脫れ出て、空中に昇つて嘆息し、「今は我一個にて救ひがたし。快く天上に去きて加勢を請ふべし」と急に亦觔斗雲に打跨り、少時の間に西天門に飛到る。此時太白金星那里に在して、行者が慌忙く來るを看て、迎住めて曰く、「大聖、今何等の幹有つて、斯く周章く來り給ふや」行者則ち昨日よりの光景を仔細と說話り、「萬望彼妖怪を亡し、師徒三個を救ひ出さん爲、今天宮に來つて加勢を請はんと做るなり」と云ひければ、金星呵々と笑つて曰く、「彼三妖は犀牛の精なり。累年修行して、能く雲に駕り霧に步み、江海の中に在つて水道を開き、三個ともに大神通あり。若他を捉へんと思はゞ、四木禽星に請ひ給はゞ、忽ち他們を降伏すべし」行者問うて曰く、「四木禽星とは誰なるぞや。萬望はその在室を敎へ給へ」金星曰く、「四木星官は斗牛宮外に在り。大聖快く玉帝に奏聞し給はゞ、分明に知れ候はん」行者則ち金星に拜謝し別れ、徑に通明殿に到り、四大天師に見えて央み、彼の四木星官を央みて三藏師徒を救はん事を奏聞しける。四大天師這由を奏しければ、玉帝此由を聞き給ひ、遂に奏に准じて、角木蛟、斗木獬、奎木狼、井木犴の四星を宣し給ひ、行者に加勢すべき由を命じ給ひければ、四星官命を畏みて、急ぎ准備を做し、則ち行者と打列れて、頓て下界に降られけり。行者心裡に打笑ひ、「四木星官を何人ぞと思ひしに、是原來二十八宿中の四木星にて在りけるなり。彼長庚老子、明かに我に告げざりしは何事にや」と獨言きながら四星官を導引きて、遂に青龍山にぞ下りける。行者曰く、「星官少時待ち給へ。我且他們を僞引出し候はん」と忽ち洞門に臨んで、大音に呼つて、「大賊怪、快く師父を出せ」と叫びければ、三個の妖怪此聲を聞著け、「彼猴、亦來つて門外を鬧がす。疾く打拿れよ」と呼つて、亦許多の小妖を牽領れ門外に跑り出で、行者に向ひ

て戰はんとして、後邊に立つたる四星官を看て大いに驚き、「我輩が大敵來れり」とて狼狽襲ぎ、衆妖個々本相を現し、許多の小妖們は、山牛水牛黄牛們の精となり、思ひ〳〵に逃去り行く。彼三個の妖怪は三隻の犀牛と現じ、東北に向ひて脫れけるを、行者是を看て、井木犴、角木蛟と諸俱に、彼三妖に從ひて追行きける。斗木獬と奎木狼は、小妖們を山谷の間に追入れ、許多の牛精を盡く打殺し、佫英洞に尋入り、三藏と八戒沙僧們が綁を脫出せば、沙僧原來二星官を能く認得たれば、再三恩を謝して曰く、「二星官奈何して、爰に來り我輩を救ひ給はりしぞ」と問ひければ、星官答へて曰く、行者則ち玉帝に奏し、援兵を要し事を語り、「今已に洞中の小妖は殘なく亡びたり。捲簾大將と天蓬元帥と、且師父を守護して歸り給へ。大聖と井角二星は、三妖怪を追行たり。我輩も亦那里に追行き、大聖に力を合せて妖怪を拿へ來るべし」と云畢りて、奎斗二星雲を縱つて東北を指て飛去り給ふ。三藏は再三二星官に稱謝し給ふ。八戒沙僧は、輪番師父を背負ひ、互に神通を使ひ、空中を走つて慈雲寺に歸りける。斗木獬奎木狼の二星官は、雲に打乘りて東北に往きしが、亦西洋大海に轉じ、不多時海上に到り、行者が海上に在つて叫び詈るを見著け、「大聖、我輩來れり」と呼りければ、行者懽喜んで曰く、「三個の妖精、今這海中に潛り入り、井角二星是を跟ひて入り給へり。二星官少時爰に待ち給へ。我水中に入りて打探來るべし」と、頓て辟水訣の法を念へ、波濤を開き、直に海底に分入りければ、彼三妖、水底に在つて井角二星を相敵とし、沒命的と戰ひ居たりしが、行者亦爰に赶來るを看て、不當とや思ひけん、再般崖上に向ひ逃登りけるを、待設けたる奎斗の二星飛跑つて、遂に辟塵犀を打殺す。辟寒辟暑の二妖怪是を看て、亦水中に逃入らんとする處を、井木犴跳り出て、辟暑犀を打殺す。角木蛟飛羅つて辟寒犀を打殺し、三個の妖怪皆一齊に亡びければ、行者大いに懽喜び、則ち三個の犀牛を取集め、四星官と俱に、皮を剝ぎ角を取り、「また洞中に到りて師父を救ひ出さん」と云ひけるを、奎斗二星是を住めて、「我輩向に師徒三個を助け出し、慈雲寺に歸し候ひき。今の程は疾那里に到り著きしならん」と云ひければ、行者愈懽び、遂に四星官を同伴ひ、雲を縱つて金平府に飛歸り、慈雲寺に到り、三藏首め衆僧們に此事を仔細說話り聞すれば、三藏深く感歎し、慈雲寺の衆僧們は一向驚き、「此四個の和尙輩は、俱に活佛の降臨し給へるなり」と、個々香を焚き華を備へて禮拜す。行者此時四木星官に拜謝し、四隻の犀角を四星官に與へて、玉帝に奉上らん事を願ひければ、四星官大いに歡喜び、遂に三藏師徒に辭し別れ、天上に還り給ひけり。行者亦一隻の犀角を慈雲寺に納め、一隻の犀角を本府の官府君に呈上し、「彼の假佛の妖怪を收めたれば、此後元宵金燈に許多の油

若干の黄金を費す事有るべからず」と告觸しける程に、此事既に金平府中に隱れなく、聞傳へ云傳へ、金平府の刺史佐貳郎官等の官員、盡く慈雲寺に詣來り、其外大小の人家の老弱男女、都て寺中に來り、唐僧師徒を拜し、亦天を仰いで四星を拜し、歡喜稱讃の聲天上地下に震ひけり。慈雲寺を首として、本府大小の官員輩、個々感激に堪へず、師徒四衆を府正殿中に請じ、大いに素筵を安排し、萬般と管待しけり。亦旻天縣二百四十家の賣油大戸の輩は、「我們活佛の力に依て數萬金の費を省き、這大恩怎麽して報じ奉らんや」と、一家毎に一席の宴を設けて、三藏師徒を請じて供養し、二百四十家の大戸、毎日輪番供養すべしと誓住せ、三藏師徒を堅く住めて放たざりければ、三藏沒奈何慈雲寺に滯留し、毎日一家の供養を受け給ひ、不期一月餘りを過しけるが、三藏一夜暗に行者を呼びて、「我輩樂を貪り無益の日數を費さば、何れの時か經を求むるの業を果さんや。却て佛祖に罪せられて、禍を生ずべし。我思ふに、賣油大戸の輩を欺き、今夜明けざる間に這寺を忍び出で、急ぎ西方に向はんと思ふなり。此事奈何」と曰へば、行者是を聞いて點頭き、「這事大いに好し。我も疾より斯思ひ在りしなり。然ば私に准備を做すべし」と半夜悄々と行李を整へ、五更の時剋八戒を呼びて、「馬を准備せよ」と云ひければ、八戒眼を摺つて曰く、「未だ夜の明けざるに、馬を准備して何に爲るや」行者曰く、「爾疾く起來れ。師父路に赴き給ふなり」八戒曰く、「這那の事ぞ。二百四十家の大戸の者ども、都て我輩を請待す。今纔に三十家ばかりの齋を受け、怎麽却て路に出て飢を忍ぶや」三藏是を聞いて、「獸子快く起來れ。若再び亂說を吐さば、悟空に棒を以て令爲打」と詈り給へば、八戒慌忙驚き、急ぎ起出で來りて曰く、「師父奈何なれば這樣に心を變じ給ふ。常には我を愛し給ふに、今日却て我を打しめんと曰ふや」行者曰く、「師父、爾が嘴を貪り路を悞過ん事を怪み給ふ。快く馬を備へて路に赴き、打るゝ事を脫れよ」と。亦沙僧を呼起し、行李を擔はせ馬を牽せ、悄々に山門を開き、遂に這寺を忍び出で、師徒四個路を急ぎ、暗きを厭はず走りけり。

○給孤園問古談　天竺國朝王遇偶

斯て唐僧四衆は、慈雲寺を出てより、風に喰し水に宿し、路上平安に半月餘りを過ぎ、一座の高山を度り、山の那邊に到れば、路傍に一宇の大寺あり、山門の額に「布金禪寺」と寫したり。三藏是を看て沈吟し、「是舍衞國の界にあらずや」と曰へば、八戒手を拍て驚いて曰く、「我が師父、此幾年路を識り給ふ事を見ず。今日却て此地を識り給ふや」三藏曰く、「路を識りたる

にあらず。我曾て經典の中に於て見し事有り。佛舍衞國の祇樹給孤園に在せし時、給孤獨長者、滿地に黃金を布滿して、太子の祇園を買得し事あり。想に這寺布金寺と號けしは這故事に因てならんか。然ば舍衞國の界にあらずやとは云ひしなり。我輩今此寺に入つて一泊を央むべし」と、遂に個々山門に前み入れば、金剛殿の後邊に一個の禪僧立出て、「長老は那里より來り給ふぞ」と問ふ。三藏答へて曰く、「貧僧は陳玄奘、則ち東土大唐皇帝の旨を奉じ、西天大雷音寺に到り、佛を拜し經を求むるの僧なり。今日已に天晩に及ぶ。今寶刹を過るに依つて、一宿を要めん事を思ふ。萬望は是を惠み給へ」禪僧の曰く、「荒山は十方常住の寺にして、個々便宜に隨ひて居住を做す。況や長老は東土の神僧なり。我が寺の供養を受け給はゞ是荒山の僥倖なり」と、遂に三藏四衆を方丈に導引入れ、個々座定りける。此時東土大唐の聖僧來りし事を聞傳へ、常住掛搨を問はず、長老行童都て來りて相見え、個々三藏の威儀を羨み、亦徒弟們が異形なるを怪みけり。既にして行童膳を備來り、師徒個々齋を食し畢り、三藏寺僧に對ひ、布金寺の來因を問ひ給へば、寺僧答へて曰く、「這寺は原舍衞國の界にして、給孤獨園寺と云ひしなり。給孤獨長者、佛を請ひて經を講じ給しめん爲に、若干の黃金を地に布滿して要め得たる地なる故に、布金寺と改めたり。此寺の前面は則ち舍衞國にして、此地は長者の祇園なり。寺の後邊は祇園の基趾なり。若雨滂々に遇ふ時は、或は金銀珠玉を淋ぎ出す。時々是を拾ふ者あり」三藏是を聞いて、佛經の言葉寔に僞ならずと、遂に行者を扯列れて、堂を下りて閑行し、爰那里と徘徊し看歩き給ふ處に、一個の老僧出來りて、三藏に對ひ禮拜す。三藏急ぎ身を轉して彼老僧を看給ふに、年齡百歲に余りたる光景にて、眉には八字の霜を双べ、手に竹杖を携へ、三藏と行者に相見え、深く道心の堅きを稱贊し、彌多時說話を做し、三藏を道引いて祇園の基趾に到り、左右する間に、既に初更の空近く、月明かに風淸く、三藏往時を思ひ今を憐み、座に感涙を催し給ふ處に、不思議や、這時那里ともなく、人の哭悲む聲風に從ひて聞えたり。三藏是を聞いて更に哀歎に堪へず、「他は那個にて、何の故に哭くにや」と問ひ給へば、彼老僧是を答へず、且一邊に在りし道人行童們に命じて、「儞們快く茶を准備へて來れ」と云ひて、大家寺に歸し遣り、一邊に人無きを看て、俄に又三藏を拜しければ、三藏是を住めて曰く、「老院主何の故に這禮を做し給ふや。幹有らば速に語り給へ」老僧則ち三藏行者に對して曰く、「弟子齡已に百餘歲、今まで無量の人物を看ると雖も、曾て兩長老の如きを看ず。弟子既に長老輩は尋常の凡僧にあらざる事を悟れり。當下の哭聲の事、長老師徒にあらずんば管ず辨明を得難し。今仔細に其故を語り候はん。舊年の今日、弟子月に對し心を澄し在ける時

節、忽ち一陣の風响き、人の哭聲有るをきく。我這祇園の基趾に尋ね來れば、則ち一個の美貌女子爰に在り。何個ぞと尋ぬれば、答ていふ、我は天竺國王の公主なり、今宵月下に有りて花を看んとして、風の爲に刮れて爰に來りし、と云へり。我則ち他を一個の空房の裡に入れて、堅く鎖し、門上に孔を穿ち、其孔中より食を送り、衆僧們を瞞きて、他は一個の妖邪なり、我法力を以て他を鎖し、毎日兩般の茶飯を與へて命を繋がしむ、と云傳へ置き、彼女兒も亦聰明くて、衆僧們に汚されん事を怕れ、白晝には亂心の若く萬般の亂言を吐き、夜靜り人無き時は、時々父母の事を思ひ出して、今の如く啼哭す。我また幾番か城中に進み入り、皇宮公主の消息を打探見るに、城中の公主も亦更に恙なく御座在し、些少の騷ぎもなし。亦還つて彼女子を打探ふに、是亦何の怪氣もなく、皇宮に在りし時の事を問へば、何事も速に答をなす。我奈何しても此虛實を明白に做すこと能はず。今僥倖に老師爰に來り給ふ。萬望は國中に法力を廣く施し、此虛實を辨明し、何れの公主が眞なるや妖なるや、一個には良善を救ひ、二個には神通を露し給へ」三藏行者是を聞いて、「老僧の央み定耳に領諾したり。吾們不遠是を明白に爲すべきなり」と、遂に老僧に別れ去りて、寺中に歸りて安歇みけり。

次の旦疾く起出で、齋を吃し、頓て寺僧に辭し別れ、三藏師徒は大路に出で、巳の剋頃に金城

の中に前み入り、會同館に到り、驛丞に相見え、東土大唐より來りし由を仔細說話りければ、驛丞驚き、且正堂に請じければ、四衆一齊に館驛に前み入る。三藏亦驛丞に向ひ、本國の歷年を問ひ給へば、驛丞曰く、「這地は則ち天竺國、大祖太宗より今に至り五百餘年、當今皇帝山水花木を愛し給ひ、怡宗皇帝と號し奉り、年號を靖安と改元あり、今已に二十八年なり」三藏曰く、「今日貧僧入朝して關文を換へん事を願ふ。萬歲爺々今尙朝に在座し候はんや」驛丞曰く、「皇帝一位の公主娘々あり。年已に二十歲なり。今天婚に因りて、十字街上に高綵樓を結び、綉毬を抛打つて駙馬を招き給ふ。今日正に其日に當る。思ふに我王、此消息を聞ん爲に、未だ朝を罷き給ふべからず。關文を換へんと思ひ給はゞ、快く入朝し給ふべし」三藏曰く、「天婚とは奈何なる事ぞ」驛丞曰く、「公主娘々今年二十歲に成り給ふに因て、駙馬を要め給へども、未だ無し。這故に、十字街頭の賑しき地方に高樓を結び、公主此樓上より今日綉毬を投下し、其毬に中りたる人を昇して駙馬と定め給はんとなり。是を名けて天婚とは號すなり。長老今日朝に入り給はゞ其處を通り給ふべし。宜しく看住して去き給へ」三藏是を聞き、且午齋を吃し畢り、袈裟僧帽を更めて、行者を列れて立出で給へば、八戒も同じく去かんと爲るを、沙僧扯住めて、「二兄且住れ。爾の嘴臉を城中の人に看せば、管ず許多の男女を驚し、或は事を

引出さん。長兄一個遣して、吾們二個は爰に在りて待つべし」と云ひければ、八戒も沒奈何遂に驛中に住りけり。三藏は行者を引領れ、朝門に望んで急ぎけるに、果して前面の十字街上に一座の高綵樓あり。其四方に、士農工商の輩、都て街上に立集り、公主の毬に中りて己國王の駙馬と爲るべしと、數萬の若冠綵樓の下に集り、公主の毬を抛るを待居たり。三藏是を看て、「我輩が服色便ならず。這處を過るに宜しからじ」と曰へば、行者曰く、「師父、布金寺の老僧が央みし事を忘れ給ふや。我們一個には綵樓を見、二個には若公主を看ば、其虛實を辨ずべし」三藏是を聞いて、亦行者と俱に前み去き給ふ。原來此公主一個の妖邪にて、前年本國の公主御花園に月を賞して居給ひしを、這妖邪攝拿きて他處に移し、自己却つて假に公主と變じ、唐僧の今年今月今日今時此處に到るを知り、他を招きて配合し、元陽の氣を取つて太乙上仙と成らんと計り、綵樓を准備へて待ちける處に、午の三剋に當り、果然唐僧綵樓の下に進み來る。公主は香を焚きて天地を拜し、左右に七八十個の官女を從へ、手親綉毬を取つて樓上より抛下し給ふに、直に唐僧の毘盧帽子に打當てたり。當下樓上樓下一齊に呼り襲ぎ、綵女宮娥大小の太監們、都て樓を下りて三藏を拜し、「貴人快く朝に入つて賀し給へ」と襲ぎ合へば、三藏驚き慌忙、急ぎ行者を扯て、「此事怎麽すべき」と曰へば、行者低語きて曰く、「憂ひ給ふ事勿れ。

我は今より驛館に返り、八戒沙僧と共に、萬般の准備を做して待ち候はん。師父且朝に入り、若し公主師父を招かずんば、快く關文を倒換て出で給へ。若亦公主師父を招いて婚姻せんと要めば、國王に求めて快く我輩を朝中に呼び給へ。其時我們入朝し、彼公主の眞假を辨じ、計策を設けて師父を援けて放ち出すべし」三藏是を聞いて點頭き、卽ち行者と引分れ、宮女衆官輩に導引かれ、綵樓の前に到り給へば、公主樓を下りて親しく三藏の手を携へ、同く寶輦に登り、儀從を廻轉して朝門に入り、公主三藏を相挽ひて金鸞殿に登り、父君皇帝を拜し、則ち今日綉毬を一個の和尙に打當てたる由を奏しければ、國王公主の和尙に毬を當てたる由を聞いて、心中一向に懼ばず、且三藏を宣して問うて曰く、「爾が模樣此國の者に非ず。且爾那國の僧にて、亦何の幹有つて此處に來りたるや」三藏拜伏して曰く、「貧僧は、南贍部洲大唐皇帝の旨を領し、西天大雷音寺に到り、佛を拜し經を求むるの僧なり。關文を倒換んと欲して十字街綵樓の下を過り、不期も公主娘々の玉綉毬貧僧が頭上に當り候なり。然れども貧僧は出家と云ひ、亦異鄉の人、怎麽敢て玉葉金枝と配偶を做さんや。萬望は貧僧が死罪を赦し、關文を倒換へて快く靈山に赴かしめ給へ」國王曰く、「爾は乃ち東土の聖僧、正に是千里婚姻使を牽くと云ふものなり。今日公主良辰を擇んで佳偶を求め、綉毬を以て爾に中つ。是天緣有るに似たり。唯

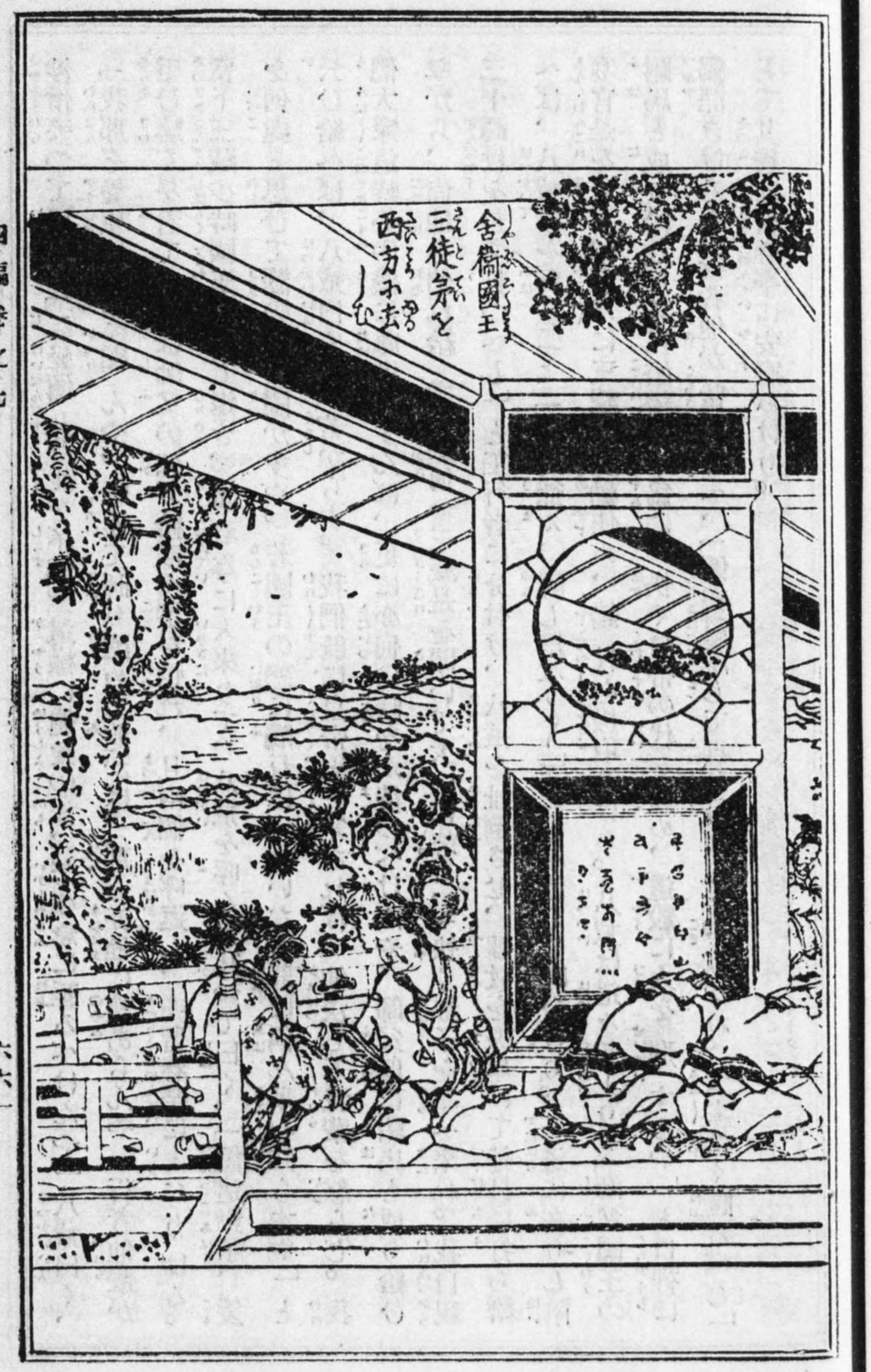
不知公主の意奈何」公主前み出て答へて曰く、「常言に、鷄に嫁すれば鷄を逐ひ、犬に嫁すれば犬を逐ふ、と云へり。妾今天地に祈誓を做し、今日僥倖に聖僧を得たるは、是則ち前世の緣なり。萬望は他を招きて駙馬と做し候はん」國王是を聞き、始めて歡喜の色を發し、急ぎ欽天監を宣して日を擇み、旨を傳へて天下に曉諭しめける。三藏是を看て敢て恩を謝せず、一向哭きて、「赦し給へ赦し給へ」と計り云ひけるにぞ、國王大いに怒つて曰く、「這和尚甚もつて理に通ぜず。朕一國の富貴を以て爾を招いて駙馬と做す。何の爲に同心せざるぞ。再び辭せば錦衣官を呼來り、立地に爾を斬らん」三藏大いに驚き謊得、魂一向に身に不附、戰ひ兢いて曰く、「貧僧今天恩を蒙り、那ぞ敢て否み奉らんや。但貧僧に三個の徒弟あり、今驛館に居れり。萬望は他輩を朝中に宣し給ひ、關文を換へて靈山に遣し、佛を拜し經文を取らしめ給へ」國王是を聞いて、急ぎ官員を宣して旨を傳へ、驛館に遣はし、唐僧の徒弟們を呼ばしめ給ふ。却説、行者は綵樓の下にて三藏と引別れ、一足歩きては打笑ひ、二歩去きては打笑ひ、口を也住めず笑ひながら、驛中に歸りければ、八戒沙僧問うて曰く、「長兄何を然までに懽喜び笑ふや。師父は怎麼して歸り給はざるぞ」行者曰く、「師父は十字街綵樓の下にて公主娘々の綉毬に打當てられ、許多の官女太監們、師父を圍繞み、公主と同車にて朝に入り給ひ、頓て駙馬と成り給はんとす。這般の好笑事我曾て看たる事なし」八戒是を聞き、胸を拍て後悔して曰く、「快く這般の事を知らば、我管ず往くべきに、却て沙僧が阻し故、此好事を失ひたり。我若綵樓の下に到り、綉毬を老猪が頭に打中てられ、彼公主我を招いて駙馬と做さば、一對相應の夫婦、世間更に比なく、當に爾輩大家造化ならん」沙僧則ち八戒が臉を撫て曰く、「爾が這嘴臉を以て綉毬に打中てられなば、他輩驚き、一齊に棒を以て追出さん。爾が公主の駙馬思ひも依らず」八戒曰く、「此黑子更に趣を知らず。我像は醜しと雖も、却て大いに風味あり」行者曰く、「獸子亂說を云ふ事なかれ。快く行李を取收めよ。師父我們を呼び給はゞ、快く朝に入りて守護すべし」八戒曰く、「長兄尚悞てり。師父駙馬と成り給はゞ、皇帝の女兒と宮裡に在つて歡樂み給ふ。亦山水を渡り妖精に偶ひ我輩が守護を要め給ふに非ず。師父已に四十餘歲、公主も亦二十歲なり。俱に夫婦の事情を知らば、那ぞ我輩が帮扶を要め給はんや」と、這們三個、同口哄喧居る處へ、忽ち一備の官員子入來り、國王の旨を傳へ、「徒弟們を宣し給ふなり」と呼りけるにぞ、行者們三個は、宣に從ひ、官員輩と打列立ち、遂に三個一齊に朝中に赴きけり。

四編　卷之七

○四僧宴樂御花園　一怪空懷情慾喜

話表行者が輩三個、已に午門外に到れば、黄門官出來りて導引入れ、斯と傳奏しければ、國王急ぎ三個を朝前に到らしめ給ふ。悟空們三個階下に立定つて敢て拜を爲さず。國王三個が異形なる像に驚き、心裡に恐怖を做し、且他們三個が姓名出生を問ひ給へば、行者答へて曰く、「老孫は、東勝神州傲來國花果山石中出生、名は孫行者悟空と呼び、齊天大聖の歸正なり。二徒弟は猪八戒、法名悟能、是天蓬元帥の轉世なり。三徒弟は沙和尚、法名悟淨、是捲簾大將の臨凡なり。個々昔は妖邪なり。當下佛門に歸依し、唐僧の徒弟となり、都て法名法號を受け、師父を守護して路上妖を降し、魔を伏し、今日爰に到れるなり」と述べければ、國王是を聞き、或は公主の活佛三藏を招きたるを懽喜び、或は行者が輩三個が妖相なるを驚き怕れ、默然として居給ふ處へ、忽ち正臺陰陽官上前出て、「本月十二日壬子、婚姻の良辰なり」と奏聞す。國王大いに懽び、「今日已に初八日。然すれば佳期近きに在り。且駙馬と三位の高徒を休

息せしむべし」と、當駕官に命じ給ひ、師徒四衆を、御花園の裡に於て筵宴を催し、萬般と管待しけり。其夜深更に人靜りて後、三藏悄々に行者を呼び、「國王今我を招きて駙馬と做さんとす。我奈何なる計策を以て爰を脱れ出んや」と曰へば、行者曰く、「我國王の面を看るに、些しの妖氣あり。布金寺の老僧の言を以て想合すれば、彼公主却て妖怪ならんも計り難し。十二日會親の時至らば、公主極めて出來りて父母を拜すべし。其時我們身邊に在つて其眞假を辨ずべし。他果して眞の女人ならば、師父則ち駙馬となり、一國の榮華を請け給へ」三藏大いに怒つて曰く、「儞這猴頭、尚我を嘲弄にするや。我們が功業已に七八分に到り、今更邪念を欲さんや。再び是を云はゞ、我緊箍咒を念へて儞に身の居處無らしめん」行者驚き慌忙跪き、「師父且念じ給ふ事なかれ。必ず會親の時に至らば、我輩一齊に皇宮を鬧し、師父を領れて脱れ出で候はん。心を安んじて十二日を待ち給へ」とて和めけるにぞ、三藏も心を易め懽喜びつゝ、遂に其夜は安寢みけり。明日國王亦四衆を朝に宣し、國王と三藏と鎭花閣に登りて飲宴し、師徒の座次は便宜からずとて、三個の徒弟は留春亭にて宴を給ひ、終日の歡樂をいさしめ給ふ。天晩に及んで、徒弟們師父を尋ねて鎭花閣の一邊に來り、師父と國王と閣中に座して在するを看て、八戒醉に乘じて、「今日終日の飽食をしながら、夜に入つて尚睡らざるや」と呼れば、


舍衛國王
三徒弟を
西方へ去

高綵樓

沙僧笑つて曰く、「二兄爾養生を不知。這樣に飽食の後、怎生急に睡るべけんや」八戒曰く、「我那ぞ養生不養を顧んや。唯飽て睡り醒めて飽かば、那ぞ亦他に望あらんや」行者他輩が爭ひ嚷ぐを看て、或は師父の怒り給はん事を怕れ、且兩個を呼返し、亦留春亭に入たりける。

當下三藏少時國王に辭し退き、留春亭に入來りて、八戒を呼んで叱つて曰く、「爾這獸子、爰を何處と思ひて鬻の如く鬧がすや。若國王の怒に觸れば、大いなる罪に偶ん事を知らずや」と云ひ給へば、八戒曰く、「苦からず。我們既に皇帝と一宗なれば、他決して我輩を怒らじ。我們大家這時心の儘に戲遊れずんば、更に亦何の時をか待つべけんや。師父既に駙馬と成り給ひながら、尙他を怕れ給ふは奈何」三藏是を聞いて大いに怒り、「快く獸子を拿へ來れ。我自親二十禪杖をむち打つべし」とて行者に分付け、八戒を扯倒させ、鐵杖を振舉げて連打に打ち給へば、八戒掌を拜せて、「駙馬爺々、饒し給へ〳〵」と泪を流して叫びけり。一邊に在りし陪宴官是を看て、漸々に三藏を諫勸住め、錫杖を扱取りけり。八戒は這々起上り、「師父國王の駙馬と成り給ひ、未だ婚禮も不爲に、快く皇帝の代を勤め、這般に人を刑するや」と口裡に獨語きけるを、行者他が嵴を押へ、「爾亦亂說して再び打たるゝ事なかれ。大家快く睡るべし」とて其夜は留春亭に安寢みけり。

是より兩三日、國王日々筵宴を安排いて、師徒四個を只管待し、不期已に十二日の佳辰に到り、光錄寺大部等の官員、會親筵席の准備盡く整備ひたりし由奏聞しける。國王滿心歡喜、旨を傳へて駙馬を宣し、筵席に赴かしめんと爲給ふ處に、忽ち內宮官、國王の尊前に來り、正宮公主娘々の請あり、と奏しければ、國王遂に請に任せて內宮に入り、直に昭陽宮に到り、三五皇后六院の妃嬪、都て公主に扶持、花を園ね錦を聚めたる如きを看、國王心裡歡喜に堪へず、公主に對ひて曰く、「賢女今僥倖に聖僧と配偶を做す。思ふに心願足りぬべし。今萬般已に整備へり。今烏正に佳期に當れば、快く合巹宴に赴き、親事を成就すべし」公主當下近く上前、身を倒して父王を拜して曰く、「父王、萬望は小女が罪を赦し、一言の啓奏を聽き給へ。這幾日、宮官輩が云傳ふるを聞くに、唐聖僧に三個の徒弟ありて、甚獰猛像なりと云へり。萬望は父王且他輩を城外へ送り出し給はらば、小女驚き怕の憂なく、安堵いて宴に赴き候はん」國王の曰く、「三個の徒弟們、像醜惡きこと類なし。他輩今御花園の裡に在り。朕已に他們を見る事を好まず。思ふに今日、他が關文を換へ城外へ送り出し、大雷音寺に赴かしめ、然後會親の宴を做さん」公主是を聞いて大いに愷び、深く父王の恩を謝す。國王夫より亦殿上に立還り、急ぎ唐僧四衆を宣入れ給ふ。三藏師徒は、御花園の裡に在りて、「今日正に十二日良辰

なれば、管ず會親の宴を做すならん。快く計策を定めて脱れ出づべし」とて、個々商議を做居る處へ、當駕官儀制司來り、「國王唐僧四衆を請じ給ふなり」と有りけるにぞ、是を聞て師徒四個、一齊朝に入りて丹墀の下に立双びける時、國王三個の徒弟を呼んで曰く、「朕今關文に花押を用ひて爾們三個に遞與し、今より爾們を送り出すべし。快く靈山に登りて佛を拜し、經を求めて歸り來れ。然らば我重く恩賞を與へん。駙馬は住めて爰に在り。管ず氣遣事勿れ」行者們三個一齊に拜して曰く、「萬望は萬歲爺々、快く我們を送り給へ」國王頓て關文に寶印を居ゑて行者に遞與し、亦黄金十錠と白金十錠を贈りて路費と爲さしむ。行者輩三個遂に國王に拜辭し、身を轉して出でんと爲るを、三藏驚き色を失ひ、「爾們實に爰を去るや」と、扯住めんと做し給ふを、行者弄个眼色を做し、「師父、心を安んじて住り給へ。我們管ず經を取り、忽ち再び爰に來り候はん」と云ひければ三藏行者が詞を悟り、唯點頭いて在座しける。行者們三個は遂に殿を辭し下りて、一齊に朝門を出で驛館に返り入り、行者則ち八戒悟淨に向ひ、低言きて曰く、「爾們兩個爰に座して少時待て。若驛丞に對するとも、唯能き程に應を做し、我と說話爲る事なかれ。我は今より去きて師父を保守るべし」と、一根の毛を拔きて、假に行者の模樣と變じ做し、驛館に住置き、眞身は蜜蜂兒と變じ、直に朝中に飛去り、師父の耳の一邊に住り、「師父我來れり、管ず氣遣し給ふべからず」と云ひて、亦翅を展べて檐の瓦上に住り、殿中の光景を私に打探居たりける。

○假合形骸搗玉兎　眞陰歸正會靈元

却說、不多時内宮官殿上に來り、合巹の宴已に鵁鶄宮中に排せる由を奏聞す。國王三藏を同伴ひて後宮に入りければ、行者亦翅を展べて、師父に跟ひ、後宮に入り、宮裡を打探見るに、鼓樂天に喧しく、異香鼻を撲つ。兩班の綵女宮娥、整々と排列し、寔に是蕊宮仙府を看る如く、多時有りて、皇后嬪妃公主を圍繞し、鵁鶄宮中に出來り、三藏を迎へ拜し、「我王萬歲萬萬歲」と一齊に唱へける。三藏は心裡驚き、戰々兢々として魂一向に身に添はず、呆臉呆てぞ在します。行者、師父の富貴色慾に心を搖さゞるを看て、心裡に賞贊し、亦公主の容貌を打探ふに、果而頭上に一點の妖氣有りけるにぞ、偖はと思ひ、急ぎ師父の耳根に飛行き、悄々に告げて曰く、「師父、公主は果して妖精なり。我今他を捉へ候はん。管ず驚き給ふな」と云置きて、其儘公主の前に飛到り、忽ち本相を現はし、公主を扯住めて曰く、「爾這妖精、這裡に在つて斯の如く榮花を受け、何の不足有りてか亦我が師父を哄き、眞陽を奪はんと爲るや。快

く正體を顯すべし」と聲を勵まして詈りけり。許多の后妃を首として、衆位の官員是を看て、胆を亡ひ魂を飛し、宮娥綵女の輩東西に逃迷ふ。國王も座を立つて逃んと爲給ふを、三藏抱き住め、「君怕れ給ふ事なかれ。是我が徒弟法力を以て妖怪を捉ふるなり」と叫び給ひければ、國王愈驚きけり。彼妖精の公主は、行者が手を振放ち、衣服首飾を解去てて、御花園の土地廟の裡に跑入り、一條の短棍を取出し、行者を中眼けて打て罹る。行者同く御花園に追至り、鐵棒を掣出し、兩個叫び詈り合て相爭ひ、俱に神通を現し、空中に飛昇り、少時が間戰ひけるが、行者則ち棒を空中に投揚げ、「變じよ」と呼りければ、忽ち百千の鐵棒と變じ、妖精が上に落蒐る。妖怪驚き慌忙、急に身を閃して一道の清風と化し、正南に向ひて逃去りけり。行者雲を縱つて是を追行きけるが、忽ち一座の大山に到りける時、妖精亦金光と變じ、山を下りて洞に入り、寂然として消失せけり。行者思ふやう、他若潛に隱れて皇宮に還り、師父を害せんと爲るも計り難しと、疑ひ思ひ、立地に雲を轉して飛歸り、皇宮に到りけり。當時、國王君臣妃嬪宮女の輩、始めて公主は眞の公主に非ず妖精の變じたるを悟り、個々怪み怕れて在りける處へ、行者雲を下りて歸り來り、鴉鵲宮外に立ちければ、三藏急ぎ問うて曰く、「假公主の虛實奈何」行者曰く、「彼公主は實に一個の妖邪にて、他一座の山中に逃歸り、

我急に追至りしかども、踪跡を知らず。他亦暗に爰に歸りて師父を害せん事を怕れ、一旦歸り來りたり」國王是を聞いて、「公主既に妖邪ならば、我が眞の公主は那里にか在るらん」と哭き給へば、行者曰く、「我假公主を捉へたらば、眞の公主は自然出來り給ふべし。宮娥妃嬪輩は且内宮に還り給へ。陛下と師父とは殿に歸り、我が師弟八戒沙僧を宣し給へ。我再び去て妖精を拿へ候はん」當下皇后妃嬪輩、都て恐懼の心を忘れ、個々行者が身近く上前來り、「萬望は聖僧、我が眞公主を救ひ給はらば、永く大恩を忘れ候はじ」とて幾番行者を拜し、遂に内宮に退きけり。國王は三藏を導引ひ亦殿上に到り、急ぎ官員們に命じ、驛館に使はし、兩個の徒弟們を宣し給ふ。八戒沙僧是を聞いて、官員等と打列れて急ぎ殿中に來りければ、行者則ち八戒沙僧に有りし事ども仔細語り、「爾們兩個師父を保守りて爰に在れ。我亦去つて妖怪を捉へ來るべし」と、忽ち觔斗雲を放つて正南に飛行きけり。斯て行者少時が間に彼山上に飛到り、雲を下りて尋ねけるに、妖精が巢穴更に知れず。遂に唵字眞言を念へて當方の土地神山神を喚出し、「我今一個の妖精を追ひて這山に來りぬれど、他が像を看失ひ、奈何尋ぬれども踪跡を知らず。爾們其巢穴を知らずや」と問ひければ、二神答へて曰く、「此山は毛頭山と號し、山間に唯三個の兎穴あるのみ。往古より曾て妖精なし。大聖今妖精を失ひ給ひしならば、彼兎

穴を打探ひ給へ」とて、行者を引いて山下に到り、坡下の兩個の窟を看るに、許多の兎兒裡に在り、人音に驚きて四方に散て逃去りけり。二神亦行者を領れて頂上の窟に到れは、果而彼妖怪這裏に在り、行者が來るを看るより、乍ち短棍を取て跳り出で、大に詈つて曰く、「爾は五百年前大いに天宮を鬧がせし弼馬溫ならずや。怎生大胆にも皇宮に入り、我が親事を破りたるぞ。此恨世々忘れ難し。我決して爾を饒さじ」行者怒つて曰く、「爾已に我が手段を知らば、怎麼敢て敵するや。快く一棒を領して爾が本相を現せ」とて兩個亦山頭に在つて相爭ひ、鐵棒と短棍と互に術を顯して、且戰ひ且走り、遂に空中に昇りける處に、忽ち碧漢の間より太陰皇君現れ給ひ、後邊に嫦娥を隨從來り、「大聖少時手を住めよ」と嚆り給ふ。行者是を聞いて頭を廻し、急ぎ棒を收めて禮を做せば、太陰曰く、「今爾と對敵する妖精は、我が廣寒宮にて仙藥を搗く玉兎なり。他が持ちたる短棍は則ち其藥を搗く處の杵なり。他私に金鎖を開きて宮を走り出て、下界に下りて既に一年を經たり。我今他が傷命の災あるを知りて、特に來りて性命を救んとす。萬望は大聖、老身の面に愛て他が命を饒し給へ」行者曰く、「老太陰の尊言、誰か是を許容せざらんや。然れども、他天竺國王の公主を攝去り、却て其像に變じ、我が師父を哄きて配偶し、元陽を破らんとす。其罪亦輕からず」太陰の曰く、「爾未だ仔細を知らず。

抑〻彼天竺國王の公主は凡人ならず。原蟾宮中の素娥なりしが、二十年前、他曾て玉兎を拿へて一拳を打ちたり。其罪に依て遂に下界に下され、天竺國王の正宮皇后の腹を借りて、因て公主と生るゝ事を得たり。這玉兎も亦、其時一拳を打たれし仇を含み、前年私に宮を出で、素娥を攝て山中に弃て仇を報じたり。唯他が唐僧に配偶せんと做しし、其罪實に饒し難し。併ながら爾の師父未だ其害を受けざれば、唯一發に他を饒し給へ」行者曰く、「既に這般の因果あらば、我那ぞ異議候はんや。急ぎ他を收め給へ」太陰皇君是を聞いて大いに懽喜び、妖精に向ひて一喝し給へば、他直に原身を現し、一個の白玉兎と成りにけり。嫦娥則ち索を取て他を繫ぎ住め、太陰皇君行者に謝し、遂に月宮に向ひて還り給ふ。行者太陰を見送り、頓て轉廻して皇居に飛歸り、國王首め三藏們に、事の動靜を仔細語りければ、個々驚き且懽び、只管賞贊したりけり。行者亦國王に對ひ、眞公主は布金寺に在して、彼寺の老僧が養育し置りる事を告げければ、國王滿心懽喜び、明旦急ぎ許多の內宮官女們に命じ、若干の官員輩を差添へて布金寺に使し、彼の老僧に遇ひて事の動靜を具に說話り、眞公主を請得て遂に皇宮に迎還しければ、國王君臣三宮六院の皇后妃嬪、都て神僧の恩を思ひ、感謝する事際りなし。國王懽喜の餘りに堪へず、俄に丹青匠を宣して師徒四個の像を畫かしめ、鎭花閣の裡に收めて供養し、大いに筵

宴を安排けて師徒四衆を管待し、强て五六日を住め、遂に鑾駕を備へて三藏を坐せしめ、君臣士民都て城外へ送り出で、遙に遠く送り來り、只管に餘波を惜みて別れけり。

四編　卷之八

○寇員外喜待高僧　唐長老不貪富貴

斯て三藏師徒の輩、亦半月餘を經て、一座の城地に入り、大路に添て急ぎ往く處に、路の一邊に一個の樓門有り、門の上に一面の大牌を掛けて、「萬僧不阻」と寫したり。三藏是を看て點頭き、嘆じて曰く、「西方の佛地果而這般の善因あり」とて、師徒四個少時門前に彷徨み居ける處に、忽ち裡より一個の蒼頭門を出で、四個を看て大いに驚き慌得、闇しく跑り入り、「主公、門前に異形なる僧四個來れり」と報じければ、是を聞いて一個の老者、口に念佛を唱へて、杖を携へて門外へ立出で、三藏師徒を見て禮を施し、却て他們が異形を怕れず、「萬望は長老輩我家に入りて少時休息し給へ」と云ひけるにぞ、三藏師徒答禮し、老者と俱に門裡へ前み入りければ、老者曰く、「我が家は佛堂も齋堂も有れども、且經堂に請じ候はん」とて遂に四個を經堂に導引入れ、大家座定まりて後、老者三藏が來歷を訪問ねける。三藏答へて、東土大唐より西方靈山に到りて、佛を拜し經を求むるの由を說話りければ、老者大いに懽喜びて曰く、

寂員外
三藏師徒を

「這地は銅臺府中にて地靈縣と號す處なり。弟子は、姓は寇、名は供、字は大寛、齡今六十四歳、這地の人都て弟子を呼んで寇員外と稱す。弟子四十歳の時より、萬僧に齋を施さん事を誓ひ、今年に到りて二十四年、遂に九千九百九十六僧の齋を供へ、今四僧を得て滿願を做す處に、今日僥倖天より四位の老師を降し給ひ、萬僧の數に圓滿す。萬望は老師輩、爰に幾日を住りて弟子が心願を滿しめ給へ。況や是より靈山までは僅に八百里、圓滿の後に於て、弟子轎馬を備へて老師を送り城を出し奉らん」三藏是を聞て拜謝し給ひける時、員外が老婆堂に出で、師徒四衆に相見ゆ。少時有つて亦兩個の秀才堂に登り、三藏に對ひて拜しければ、三藏も急ぎ答禮し給ふを、員外住めて曰く、「是は我が兩個の小兒にて、寇梁寇棟と號す者なり。他們老師の降臨を聞き、特に來りて拜を做す。那ぞ答禮に及び候はんや」兩個の秀才、當下父に向ひて問うて曰く、「這老長老那國より來り給ふぞ」員外笑つて曰く、「來路甚遠し。南贍部州東土大唐皇帝の旨を領し、靈山に登り佛爺を拜し經を求め給ふ長老なり」二秀才曰く、「我曾て事林廣記を讀むに、天下は唯四大部州あり。我が這地は西牛賀州の中也。思ふに南贍部州より爰に到るに、不知多少の年代を歴給ふならん」三藏曰く、「貧僧路に有つて若干の毒魔狼怪に出遇ひ、千萬の辛苦を嘗む。故に住る日多く去く日少し。十四遍の寒暑を歴、方て這寶國に到れるなり」

寇梁兄弟是を聞いて、「神僧々々」と嘆息し、母子俱に退きけり。員外亦四衆を齋堂に導引き、且一齊に齋を侑め、懇懃に管待し、多日師徒を住めけるにぞ、三藏他が誠心を感じ、沒奈何這家に滯留し、不期五七日を過し給ふ時、員外本處の僧家二十餘個を請ひて三晝夜の佛事を做し、圓滿の道場を修行しける程に、是が爲に三藏亦五六日住められけるが、已に道場畢りて後、三藏遂に員外に辭し、路に出んとし給へば、員外驚きて曰く、「老師怎麽這般に急がせ給ふや。這幾日佛事に因つて闇く、多く長老に謝せん事を怠慢せり。是を怪み給ふに非ずや」三藏曰く、「深く尊府の盛款を蒙る。何を以てか此恩を報ぜんとす。然れば亦那ぞ別に怪む事有らんや。唯前年、貧僧唐王に別るゝ時、悞ちて三年に歸るべしと云へり。今已に十四般の霜雪を經たり。經を來むるも未だ有無を知らず。歸るに及んで亦十二三紀を歴べし。是聖旨に違ふの罪大いなるにあらずや。萬望は員外曲て貧僧を去らしめ給はらば、住むるに增る功德ならん」八戒身邊に在つて是を聞き、堪咤ねて上前出て曰く、「師父も甚人情に疎し。老員外は富饒の大家、萬僧齋の誓を做し、今既に圓滿し、亦況や誠心に住め給ふ。假令半星一紀住るとも、求一向に苦しからじ。這般の好人の齋を食せず、只管路に出で人家の門に立ち、半碗一鉢の冷飯を好み給ふは何事ぞや」三藏怒て曰く、「儞這獣子、唯齋を吃ふ事のみを知つて、却て經を

むるの遲きを顧みず。爾輩都て初て人と成るの畜生、唯安樂にのみ食せん事を要む。爾們既に爰を去る事を願はず。然らば明旦より我一個靈山に登るなり。爾輩何年までも爰に在つて樂むべし」行者師父の怒り給ふを看て、八戒を扯退け、「獸子無益の口を開き、都て我輩まで師父に怪ましむるや」と詈りければ、八戒忿々たる光景にて一邊に身を退き、獨り何をか氣呼的居たり。員外則ち三藏に向ひ、「老師深く煩勞給ふ事勿れ。且强て今一日を住り給へ。我明旦幾個の親隣を請來り、旗鼓を備へて遠く送り候はん」と只管勸め住めける處へ、員外が老婆出來りて曰く、「這幾日師父を住め給ひしは、都て皆員外の功德なり。老身も亦些少の針線錢あり。萬望は老師を幾日供養し、老身が功德と做し候はん」當下亦寇梁兄弟も出來りて、更に幾日を住めんとす。三藏固く辭して敢て住り給はず。寇梁母子大いに色を變じ、「我們好意を以て住め候に、這般に執性に去らんとす。我輩も亦再び無益の口を開かじ」とて遂に身を裏面けて退きけり。三藏甚心裡事憂思ひけれども、沒奈何亦一日を滯留し、翌日遂に辭し別れん事を告げ給ふ。員外果して許多の親隣を集め、盛宴を開いて餞別を做し、彩旗寶蓋を列ね、鼓手樂人を呼び、唐僧四衆を送りて路に出づ。鼓樂天に喧嘈しく、旗旛日を蔽ひ、看的の男女街上に充滿し、都て寇員外が富貴を羨みけり。員外既に城門外に出で、十里に至りて亦一席の素

筵を設け、萬般と管待し、遂に別れて歸りけり。三藏は懇切を拜辭し、員外に引別れ、西に向ひて只管急ぎ給ひけるが、亦四五十里經て天色既に晩れければ、八戒嘴を努著して、「好人の茶飯を吃はず、安樂の家に住まず、只管路に急ぎ出で、日暮に到れども宿るべき家もなし。況や亦雨を降さんとす。這一夜を怎麼せんや」三藏罵つて曰く、「孽畜また我を怨むるや。常言にも、長安好しと雖も久く戀ふの家に非ずと云へり。我們果して經を求め得ば、大唐へ歸りて皇帝に奏し、御厨の酒飯を爾が心の儘に吃はしめ、爾が肚を張破りて十個の飽鬼と做しむべし」八戒是を聞いて、不期吃々と打笑ひ、頭を低れて居たりけり。行者則ち四方を望み、大路の一邊に一個の廟宇有るを看著け、「師父且那里に往きて安歇み給へ」と、個々路を急ぎ、彼古廟に到り見れば正面に「華光禪院」の四字あり。墻壁破れ傾き倒れ、蔓草地に遍く、一個の踪跡も無りければ、急ぎ立出でんと爲る處に、忽ち大雨降下りければ、四個沒奈何彼廟中に一宿したりけり。

○金酬外護遭魔毒　聖顯幽魂救本原

原來這銅臺府地靈縣の間に許多の賊徒あり、今日寇員外が唐僧を送る其富麗比無きを看て、個

個俄に心を搖し、黨類の群偸三十餘個加交合せ、這夜大雨に乘じ、鎗を提げ刀を把り、寇員外が家の大門を打開き、一齊に推入りければ、家裡大小の男女、大いに驚き狼狽襲ぎ、盡く四方に散つて逃隱れ、員外老夫婦は床の下に屈潛り、敢て聲を發る的無りければ、偸賊們許多の火把を揚點し、心の儘に家裡を搜し、金銀衣服寶貝盡く奪取り、既に去らんと爲る處を、員外床の底より跑り出て、「列位の大王、萬望は些の衣服を殘し住め、我輩が形を掩しめ給へ」と呼りけれども、偸賊輩耳にも一向聞容れず、員外を打倒し踢翻し、一齊に門を出でて逃去りけり。隱れ居たる家僕的、偸賊已に退きたるを見て個々出來り、老員外を扶け起すと雖も、致命處を太く踢られたりければ、遂に魂退き息絶たり。老婆及び寇梁兄弟、家裡の蒼頭們、大家聲を發つて咒悲む中にも、老婆は、員外が唐僧を供養し花麗を盡して他を送りし故、遂に偸賊們に窺著まれ、這難に遇たるを悟り、只嘗唐僧を恨み、忽ち妬害の心を生じ、寇梁兄弟を呼んで曰く、「爾們歎く事を止めよ。爾が父を殺せしは別人ならず、都て彼賊僧們四個が處爲なり。兄弟曰く、「母親、賊僧とは那れの賊僧なるや」老婆が曰く、「昨日まで供養したる唐僧輩四個が事なり」兄弟曰く、「唐僧們が爲處なる事麼して知り給ひたるや」老婆が曰く、「我嚮に床の底に潛み居て委く是を打窺ひ得たり。火を點ぜるは唐僧、刀を持ちたるは猪八戒、金銀を搬り

たるは沙僧、爾が父を殺せしは孫行者なり」寇梁兄弟曰く、「母親這樣に彼を親く看住め給ふ上は、些少も疑ひ有らじ。他輩久く我が家に住り居て、家裡の路開は能く知りたり。財寶を看て心を動し、大雨に乘じて這家に押入り、家財を奪ひ父親を殺せるなり。他們怎麼這般の惡事を做すや。我們兄弟明旦急ぎ官府に訴へ、這讐を報ずべし」と一家裡都て忿々然として夜の明るをぞ待居たる。頓て天明に到りければ、兄弟急ぎ一封の告文を認め、俄に府堂に到り、彼告文を呈上りければ、銅臺府の刺史此告文を看畢りて、寇梁兄弟を宣して遂一に仔細を問給ひ、遂に兵士百五十人を點じ出し、西に向はせ、唐僧四衆を追はしめけり。

却說、三藏師徒は是を知らず、彼華光禪院の破屋に一夜を明し、天明に及んで雨も降止みければ、急ぎ破屋を立出でて、路を要めて急ぎける。豈計らんや、彼偸賊ども、夜間這路上まで遁來り、華光院の破屋の邊を跑過ぎ、一堆の山の樹蔭に在て金銀衣服寶貝を配分して在りける處へ、忽ち三藏師徒の來るを看著け、他們尙慾の心火住らず、忽ち謂て曰く、「那處に來る和尙們は、昨日員外が送りたる唐僧四衆にあらずや。他們久く寇家に在つて留往したれば、多少金銀の供養を請けて處持するならん。我輩亦他們を捉へて盤纏を奪はど、增々十分の利を得べし」と、個々兵器を扯提げて一齊に跳り出で、路を攔りて大音揚げ、「爾們唐僧命惜くは買路

錢を殘らず我們に遞與せ、然なくは儞們を鏖に做すべきなり」と同音に呼はりけり。三藏是を聞いて怕れ戰き、地上に轉けて落んと爲るを、行者急に推住め、「師父怕れ給ふ事なかれ。我今定身の法を行ひ、他們を盡く捉へ候はん」と、行者彼偸賊們に向ひ、口裡に咒語を念へ、定身の法を行ひければ、今まで兵器を振ひ詈り居たる偸賊ども、個々睜著眼、直々と站定に成つて動く事成らず、言語ふ事能はず。當下行者一把の毛を拔き、變じて三十餘條の索と做し、沙僧を呼んで盡く偸賊どもを綑縛させ、再び咒話を念へて定身の法を解きければ、偸賊們漸漸本身には歸りたれども、手足を固く縛められたれば、一向に搖く事能はず。行者鐵棒を推把て偸賊們に打向ひ、「儞們幾年か賊業を做し、多少の人家を劫し、幾個の人を殺したるぞ。實々に自首せよ」と詈りければ、偸賊ども驚き怕れて曰く、「我輩は原來久く偸業を做す者にあらず。都て皆好き人家の子弟なり。不才にして先祖の家業を失ひ、黃白を花費盡し、錢使用に迫りし儘に、不期寇員外が富饒なるに思ひ著き、昨宵他が家に推入り、金銀衣服寶貝を偸來り、爰に有つて配分候處に、今亦長老輩の來り給ふを看て、又買路錢を要めん事を欲して、不期神僧の大法力に偶ひ、斯の如く綑縛められ、今一向に後悔するなり。萬望は神僧、慈悲心を以て我輩を饒し給へ」三藏是を聞いて驚いて曰く、「寇員外は一個の善人なるに、怎麼這

災害を得しならん。我輩已に他が厚情の恩を受く。今他們が偸來りし財寶金銀等を取りて員外が家に送り返さば、却て是一件の好事ならずや」行者是を聞いて、理なりと同じ、偸賊們に向ひ、「儞們昨宵偸取つたる金銀衣服を殘りなく返さば、儞們が性命を饒すべし。若是を否まば、遂一に打殺さん」偸賊ども打泣きて曰く、「命だに饒し給はらば、員外が家の財寶は殘りなく返し奉らん」行者頓て八戒沙僧に云ひて、山の樹蔭なる寇員外が財寶金銀等を盡く搬ひ出させ、山の如く馬に馱せ、亦八戒に一担の金銀を擔はせ、沙僧も又一荷を揵ぎ、行者身を搖ひて毛を牧むれば、偸賊們が縛の索忽然として消失せたり。偸賊ども不思議に綑縛を脫れ、且怪み且懽喜び、跡をも看ずして四散りけり。是より三藏師徒は亦東に向ひ轉迴し、員外が家に往かんとして立出給ふ處に、忽ち許多の人音して、百五十個餘の官兵們一齊に撞と跑來り、三藏師徒を取圍み、何の仔細も言はず、八戒沙僧を上首として、三藏行者も諸俱に搦擒、府城を指してぞ歸りける。三藏大いに驚き、「我輩に何等の罪ありて斯綁め給ふや」とて哭き給ふを、行者聲を勵まして曰く、「師父憂ひ給ふ事なかれ。是嚮に逃げたる偸賊を捉ん爲の官兵なり。然れども過ちて我輩を捉ふ。我輩是を拒んで働かば、眞の人間に傷著くべし。不如、是より官府に往きて詳かに說開かんには」と云ひけるにぞ、三藏是を聞いて打點頭き、官兵輩に領れ

て急がれける。

不多時府城に歸り入りければ、銅臺府の刺史堂上に端座して、三藏師徒を廳前に引出ださせ、行李を開かせ見る處に、果而寇家の財寶盡く其裡に有りけるにぞ、刺史大いに罵つて曰く、「爾等和尚は、東土大唐より西方靈山に登りて佛を拜し經を取ると稱して、却て人の財寶を奪ひ、人の性命を傷ちたるは何の理ぞや」三藏曰く、「貧僧が輩一向に是を知らず。原來賊を做したる事も無ければ、人を殺したる事は愈覺え候はず。唯寇員外に別れてより西に向ひて急ぎ候に、不期も員外が家に入りたる偸賊に出過ひたり。原來員外に恩を蒙りし我輩なれば、徒弟們偸賊どもを追散し、財寶を盡く取返し、員外に返し與へんとて轉回し來り候ふ處に、不期も官兵に擒へられ、遂に爰に到り、我們をして其偸賊と爲し給ふ。且東土を出し時より、長路の關文を持來れり。是證首と做すべきの一個なり。乞ふ、萬望は大人詳かに是を察し給へ」刺史是を聞いて、下官們に命じて三藏の關文を出させ點檢し給ふに、果而唐朝よりの關文にて、個々諸國王の寶印あり。刺史看畢りて謂て曰く、「這關文、爾輩が証見と爲すべきに似たり。然れども爾輩已に偸賊を追散し財寶を取返す程の勢有りながら、一個なりとも搦め取つて証見に扯來るべきを、其事なく、財寶のみ持來りしは、分辨奈何とも信じ難し。

且爾們を獄に下し置き、悠々究問すべきなり」と遂に刑部吏役に命じ、三藏師徒を監らせ、頓て獄室に下置きけり。憐むべし三藏、身に一點の過なく、異鄉の獄室に繫がれけるにぞ、泪散々として住まらず、只管啼泣し給ひけり。行者身邊に在つて笑つて曰く、「師父何を然樣に歎き給ふや。明日は管ず爰を出し奉らん。但這牢裡、雞犬の聲もなく幽靜なる處なれば、大家安寐むには大いに好し。何を憂ひ給ふらん」と諫勸めけるにぞ、個々心を安んじて牢裡に在りけるが、已に夜深けて四更の頃に到り、三藏疲出て睡り給ひける程に、行者身邊に在つて是を見て暗に思ふやう、師父已に一夜牽居の災を受け給ふ、今四更の天に到れば災星管ず除きたらん、我快く是を救ふべし、と遂に身を小少變じ、一個の蠓虫兒と成つて簷の瓦の綉裏より飛出で東に向ひて飛去り、員外が門前に一家の燈火の光見えたりければ、這家の簷に飛著きて裡の光景を打探看れば、是豆腐を製る家なり。主の老頭火を燒きて、一個の媽々と俱に豆腐を造りながら、他老頭媽々に語つて曰く、「寇員外は子有り財あれども、却て壽命なし。我他が幼き時同學の友にして書を效ひしが、我は他より長ずる事五年の兄なり。當時他は家產とても甚饒ならず。他運强くして二十歲の時一個の好妻を娶りたり。彼老婆は張旺が女なり。小名を穿針兒と云ひ、父の張旺家最富めり。然るに張旺死して後、家を繼ぐべき子も亦死した

り。遂に張旺が家産皆寇員外が物と成れり。夫より今の如く富榮るの家と成れり。寇大官則ち萬僧に齋を施したるに、不期昨夜偸賊に殺されたり。善を做さば善報を得べきを、却て非命に死したるは抑奈何なる事ならん。不知前世に何等の罪を結びたるや。憐むべし〳〵」と只管語り居たりけり。行者是を遂一に聞濟し、亦翅を展べて員外が家に飛去き、裡に入つて看れば、這家は尙許多の燈光を點じ、老婆と寇梁兄弟三個、棺の前に香花を列ね、兩邊に座して哭居たり。行者則ち棺の上に飛行き、悄々に住り、一聲の咳嚬を做しければ、母子三個大いに驚き、寇梁兄弟は下に打伏し戰兢怕る。老婆は却て大胆にして、「老員外蘇生り給ひたるや。怎麽聲を做し給ふぞ」と云ひければ行者寇員外が聲を似せて曰く、「我曾て活きず。我は閻王の命を受け儞們を責めに來りたり。儞穿針兒、怎生謊を設けて罪なき人を害するや」老婆他が小名を呼びけるを聞き、怕れ驚き跪下きて曰く、「老員外、我輩已に這老年なるに、却て小名を呼び給ふ。我那ぞ謊り人を害し候はんや」行者曰く、「彼唐僧四衆、誰が命を害し誰が財寶を偸みたるぞ。彼偸夫は三十個餘なる事は、儞們も是程の事は窺著めたる成るべし。却て四個の聖僧は、路頭にて偸賊を捉へて財寶を奪ひ返し、我家に送り返さんと來り給ふを、却て儞等府堂に訴へ、聖僧を牢中に困苦ましむ。是謊りて罪なき人を害するにあらずや。這故に閻王大いに怒らせ給ひ、今より儞們三個を冥府に誘引來れよとて、我今閻王の命を受けて儞們を迎へに來れるなり」老婆を首め寇梁兄弟、這事を聞き驚き悲み、一向に言語ふ事能はず、少時搖ひて居たりけり。

四編　卷之九

○前章之下

行者亦曰く、「爾們若冥府に赴く事を悲く思はど、快く官府に解狀を獻げて、唐僧四衆を救ひ出すべし。然らば我閻王に請ひて爾們が一命を救ふべし。若些少にても遲滯らば、忽ち爾們を帶去かん」當下老婆寇梁兄弟、一齊に拜禮して曰く、「唐僧師徒を偸賊と思ひ違へて官府に訴へしは、都て我輩が過罪なり。明旦趂早官府に至り、解狀を獻りて聖僧四衆を救ひ出し候はん。願くは老員外我們が命を饒し給へ」と只管歎きて咤びけるにぞ、行者他們が歸伏せるを看て、「然らば我は歸るべし。一剋も快く聖僧們を救へよ」と云ひて、其後は寂として音もなし。斯て行者は暗に這家を飛出て、夫より地靈縣の府堂に到りて打探看れば、當時正に東方發白、個々官士廳前に列座す。不多時府刺史も堂上に出で給ふ。行者思ふやう、這處人多ければ、蜢蟲兒の形にては好しからじ。一旦手段を變へて他輩をも一嚇し驚かさん、と思ひ、忽ち空中に飛上り本相に歸し、亦變じて空中より大太なる片脚を堂前に差下し、怕氣なる聲音を發し、「爾

們衆官審に聞け。我は玉帝の差來的にて浪蕩游神なり。爾們經を求むる活佛を擒へ置きて牢中に困苦ましむ。若快く是を放ち出さずんば、我這一脚を以て衆官人どもを殘ず蹴殺し、城郭房宇を一時に踏破り、灰燼と做すべきなり」と呼りければ、這聲を聞て、刺史を首として堂上堂下の衆官們、個々身の毛を竪て驚き振ひ、一齊に地上に拜伏して曰く、「上聖且歸り給へ。我們過つて活佛聖僧を擒へて大罪を犯したり。急ぎ活佛を扶け出し奉らん。萬望は尊足を動し給ふ事なかれ」と哀哭して咤びけるにぞ、行者亦曰く、「爾們快く聖僧を助け出せ。若些少にても遲滯らば、我再般來りて這城府を盡く踏破るべし」と云畢りて、頓て法身を收め、亦蜢蟲兒と變じ、牢裡に飛歸りけり。刺史を首め衆位の官士們、這奇怪に心膽を冷し、色を失ひ、嘆息繼いで在りける處に、忽ち寇梁兄弟一葉の解狀を捧げて廳前に來り、今朝父の魂を顯したる事を具に訴へ、「萬望唐僧師徒を饒し給はらん事を願ひける。是を聞いて刺史衆官亦更に恐懼を增し、急ぎ刑部史役を呼び、唐僧們を獄中より放ち出し、四衆を堂上に請じ、再三罪を謝し給ひけり。行者八戒廳前に在つて、「爾們昨日我們を捉へて偸賊の名を負しめたり。我輩這儘にては罷るべからず」とて三個とも同口に詈り嘆ぎける。衆官們萬般と是を咤びけるを看て、三藏三個を諫勸めて、「爾輩嘆ぐ事勿れ。我再び寇家に到り、一個には員外を弔ひ、二個には

行者
壁中より
富人們を
おどす

何故我輩を指して偸賊と做したるや、審に是を問糺すべし」とて遂に廳前を辭し去りて、寇員外が家に到りければ、寇梁兄弟驚き怕れ、再三再四陪禮し、急ぎ四衆を正堂に請じ入れ、只管向の罪を咤びたりけり。行者老婆が無禮に爰に座して在るを看て、大音に呼んで曰く、「儞老賤婦、謊を設け我輩四個を害せんと欲したり。我今員外が魂を請來りて他を打殺せる者を問ひ、這老賤婦を戒むべし」とて乍ち空中に飛上り、消すが如くに見えず成りぬ。老婆を首め寇梁兄弟、是を看て驚き怕れ、戰ひ兢き居たりけり。行者は一旦空中に到り、却て轉回して忽ち冥府に赴き、閻王の廳前に到りて、今般の事を備細語り告て、員外が陽壽を延さん事を央み、他が魂を請求めける。閻王事の動靜を聞き、行者が願に任せ、員外が魂を與へ給へば、行者懽喜び員外が魂を請領し、閻王に辭し別れて急ぎ地靈縣に飛歸り、員外が家に走り入り、八戒を呼んで棺を排かせ、彼魂を員外が身に推入れければ、員外忽ち蘇生り、棺の裡より立出て、一邊に唐僧の座して有るを看て驚き、拜を做し、「我今偸賊に踢られて死し冥途に赴きたりしを、孫老爺來りて閻王に我が魂を請ひ給ふよと覺えしが、今忽ち蘇生する事を得たり。寔に再生の恩人なり」とて身を擲打つて感謝しけり。行者則ち、老婆が謊りて官府に訴へ、師徒四個を牢中に困苦ましめし事を委く語りければ、員外是を聞いて大いに怒り憤り、老婆を官府に訴へて頭を刎んと罵りけるを、老婆只管歎きて是を詫び、寇梁兄弟も我身の過を悔み、父に歎きて詫びにける。三藏も亦一向員外を勸め和め給へば、員外纔に心を定めけり。行者頓て官府に告げて、偸賊が偸みし金銀衣服財寶を、殘りなく員外が家に送り返し與へければ、員外親子大いに懽喜び、夫より亦大いに筵宴を按排し、師徒四衆を管待しけり。翌日亦鼓樂を奏し旗幢を備へ、前の若くに師徒四衆を送り出しければ、府縣の刺史官士們も俱に出來りて、三藏師徒を拜し、諸俱に送りける程に、初に增して賑く、二十里餘送り行きて、遂に別れて歸りけり。

○猿熟馬馴方脫殼　功成行滿見眞如

唐僧四衆は、寇員外に別れてより、大路に上りて只管路を急ぎ給ふに、西方の佛地果而他處と同じからず。花草淸かにして松柏綠深し。家々に僧を供養し、戶々に齋を施し、山下の人皆道を修し、亦看る林間讀經の聲絕えず、誠六根淸淨の境界なり。斯て五六日を過行く處に、果而靈山の麓に到る。行者遙に靈鷲高峰を指差して、「彼半天中に五色の祥光發する處、則ち佛祖の聖境なり」と云ひければ、三藏急ぎ馬より下りて峰山を拜せんと爲給ふを、行者笑つ

悟空前んで
凌雲渡の
獨橋とる

清雲洞

て曰く、「是より頂上まで尚許多の行程あり。且衣服を更め、漫々と拜し給へ」とて四衆個々路傍に休み、一處の澗水を尋ね、水中に入りて沐浴し、三藏毘盧帽子を戴き、錦欄の袈裟を著し、徒弟們馬を牽き行李を擔ひ、山頭に向ひて七八里登り行く處に、忽ち一帶の流水、八九里の寬濶あり。遠近に船も見えず、唯一根の獨木橋あり。橋の一邊に一片の扁を掛けて、「凌雲渡」と寫著けたり。三藏驚いて曰く、「是人の渉るべき處に非ず。我們路を過ちたるならん」行者曰く、「差はず〳〵。我且試に渡りて見ん」とて忽ち橋に飛登り、飛ぶが如くに橋を渡り、向ひの崖に到り、手を揚げて指招くに、三藏手を搖りて怕れを做し、八戒沙僧も、怎麼はせんと後邊へのみぞ退きける。行者沒奈何亦向ひの岸より跑り歸りて、「師父快く我に跟ひて渡り給へ。八戒沙僧も疾く渡れ。此處佛界なり。此橋だに能く渡り得ば成佛すべし。我輩此橋より渡り過ぎて佛と成るなり。八戒儞快く我に跟ひ來れ」といへども、八戒怕れて、「我實に這橋を渡り得ず。但雲に駕りて渡るべし」行者曰く、「雲に駕つて渡りては成佛し難し」八戒曰く、「我は佛と成らずに歸るべし」行者笑つて曰く、「獸子、怠慢の言を叶くべからず。快く我と俱に來つて渡るべし」と、兩個橋の一邊に在つて、扯つ引かれつ迫合ふ處に、忽ち下流より一隻の船を撐べて來る船叟あり。「師父快く此船に乘りて渡り給へ」と呼りけり。三藏是を看て大

いに懼び、「儞們快く是に乘れよ。渡船爰に有り」とて急ぎ岸に臨みて船に下らんと爲る處に、怪むべし這船、一隻の底無舟なり。三藏再般驚き、「這破船奈何して能く人を渡さんや」と逡巡し給ふを、行者身後より、「師父快く船に乘給へ」と船中に推下せば、三藏狼狽へ、撲的水中に落入りて阿と一聲叫び給ふを、船叟快く手を指展して船上に扯上げける。三個の徒弟們も連いて船に飛乘りければ、船叟既に船を撐出しける時、船の一邊に一個の死骸浮み出て流れける。三藏是を見て驚き給ふを、行者笑つて曰く、「師父、驚き給ふ事なかれ。是師父の屍なり。今日肉身を脫し凡胎を弃て給ふなり」八戒沙僧手を拍つて驚き、「寔に然なり。實に是師父の屍なり。今日凡胎を脫れ給へり」とて懽喜びければ、彼船叟も歡喜を做しつゝ船を廻して、不多時西の岸に到り、四衆馬を牽き行李を取り、向ひの岸の上に登りければ、船叟は船を回して中流に到ると見えしが、接引佛祖寶幢光王佛と現れ給ひ、直に綵雲を縱つて飛去り給ふ。三藏是を看て急に虛空を禮拜し、個々身輕く心快々として山上に登り行くに、不多時雷音寺の下に到り著きて、其光景を眺れば、高峰直に聳え、樹木參差と排列し、瑤草琪花徑傍に彩を添へ紫芝香き風を生じ、黃葉森々として上に珊瑚の甍を磨き、金瓦整々として下に瑪瑙の磚を双べ、珠閣金殿雲外に彰れ、山門の一邊には瑞光朗々と立昇り、其光景耳目に觸る類にあらず。

三藏滿心歡喜に堪へず、手の舞ひ足の踏地を忘れて立ち給ふ處に、快許多の比丘比丘尼、優婆夷優婆塞們出來りて、三藏に告げて曰く、「東土の聖僧、快く入つて牟尼尊を拜し給へ」と呼りける。三藏是を聞いて愕しく、手に錫杖を携へ、靜々と上前、雷音寺山門外に至る。當時快二大金剛出迎へて、師徒四衆を導引入れ、二の門上の四大金剛に通じ、二の門より亦連々に報じて、遂に大雄殿下に通達す。佛祖如來大いに懽喜び給ひ、且八菩薩、四大金剛、五百阿羅、三千揭諦、十一大曜、十八伽藍を宣聚め、兩行に排列ばしめ、如來旨を傳へて唐僧を宣し給ふ。三藏則ち三個の徒弟を從へ、徐々として大雄殿前に至り、四衆一齊に地上に拜し、且闕文を出して捧奉りければ、如來是を取りて披き看終り、亦三藏に返し給ふ時、三藏跪下き拜して曰く、「弟子玄奘、東土大唐皇帝の旨を奉じ、寶山に登りて眞經を求め得て衆生を濟度せん事を思ひ候。萬望は佛祖恩を垂れ給ひ、快く經を贈り給ひて貧僧を歸らしめ給へ」當時如來曰く、「儞が東土は南贍部州の一大地にして、天高く地厚く、物廣く人稠く、不忠不孝不仁の輩許多、永世阿鼻地獄に落ちて、生々世々浮み昇る事能はず。偶孔氏なる者在つて仁義禮智の敎を立て、帝王相繼いで徒流絞斬の刑を製すと雖も、愚昧無智の輩を奈何とも僞る事能はず。我今經三藏有り、通計三十五部一萬五千一百四十四卷。全く儞に與へ去らしむべし。是修眞の經

正善の門、痴愚の凡夫を化度して其利益限なし」三藏是を聞いて懽喜に堪へず、幾般拜しける。如來當下阿難迦葉を呼び給ひ、「儞等唐僧們に齋を吃せしめよ」と命じ給ひければ、阿難等兩個、唐僧輩四個を領いて珍樓の下に導引入れ、齋を安排して管待しける。寔に是仙品にして、仙肴仙茶仙果、都て凡世の物に非ず、皆是正壽長生換骨脫胎の珍差なり。四個是を食する毎に、心裡忒だ爽かにして淸々たり。遂に食し畢りければ、如來亦阿難迦葉に命じて經卷を出させ給ふ。二尊者命を受けて、亦三藏を導引き、寶閣を排いて入りければ、霞光瑞氣千重に罩ひ、祥雲彩霧萬道に遮る。閣裡に金銀珠玉を鏤めたる經櫃寶篋若干あり。皆悉く眞紅の籤を貼著け、楷書を以て經卷の名を寫したり。二尊者這經卷を指示して、因て三藏に對して曰く、「聖僧東土より來る。何の人事をか我輩に送るや。快く取出し給へ」三藏曰く、「弟子來路遙にして、漸々に爰に至る。因て曾て人事の准備を致し候はず」二尊者笑つて曰く、「好々好々。我輩白手の人に經を傳へば、後に管ず餓死すべきなり」行者是を聞いて忍住兼ねて呼つて曰く、「師父、我輩快く去つて此由を告げて、如來の手親經を接取るべし」阿難曰く、「悟空、儞爰を何の處と思ひて這樣に襲ぎ叫ぶや。快く來りて經を領せよ」八戒沙僧兩個、急ぎ行者を請勸め、遂に一件に經卷を接り、馬に馱せ肩に挑ひ、再び寶蓮座の前に到りて如來を拜し、幾

般大恩を謝し奉り、頓て寶前を辭し退き、數重の門を出で、諸尊諸菩薩を盡く拜禮し、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷們にも別を告げ、山を下りて急ぎける。

原來彼經卷を納め有りし寶閣の上に、一尊の燃燈古佛在しけるが、當下阿難迦葉輩が唐僧に與へたるは、都て皆無字の經卷なれば、暗に打笑ひ、「東土の衆僧愚昧にして、無字の經卷なる事を識らず、遙々と遠方の地を來りし苦辛を徒に做す事の不便さよ」とて、急ぎ座邊に居在せたる白雄尊者を呼びて、「儞快く唐僧們に追及き、彼無字の經卷を把捨て、他們に再般來りて有字の經卷を取らしめよ」と命じ給へば、白雄尊者領承つて、急ぎ山門を立出で、一陣の狂風に駕し、少時の間に唐僧に趕上き、空中より手を伸し、馬に駄せたる經卷を輕々と扯把り、經包を扯破り、地上に拋捨、風を轉じて雷音寺に飛入り、寶閣に立歸り、燃燈佛に這事を告げて、唐僧の來るを待居たり。三藏師徒は是を見て大いに驚き、行者鐵棒を捉つて空中に飛上りけれども、經卷已に地に落ちければ、且雲を下りて、八戒沙僧と俱に經卷を拾ひ集めける。三藏は泪を流して、「極樂世界にも這樣なる邪心なる者在るよ」とて、漸々徒弟們と卷數を査勘め給ふに、是怎麽、這經卷一字半點の跡もなく、皆白紙の經卷なりければ、四衆大いに驚き、再般打披き打排き點一卯看るに、那個もいづれも皆無字の白本なり。三藏嘆息して曰く、「這經卷都て皆無字白本にて、不要の物なり。斯る物を遙々と東土に持皈りて何にかせん。唯這我身の沒福なり」と只管憂ひ歎き給へば、行者曰く、「師父憂ひ給ふ事なかれ。我這仔細を知れり。彼阿難迦葉の潑禿子們、我輩が人事の贈物なき故に、這白本を與へたるなり。我輩快く還りて如來に這由を奏して、人事を貪るの罪を糺すべし」八戒沙僧嚷いで曰く、「長兄の言差はじ。我輩速く往きて如來に告奉るべし」と四衆乍ちに身を轉じ、亦山上へ跑登り、喘呼呼的山門に跑り入りければ、衆聖者四大金剛們も、疾已に是を悟り、唐僧輩經を換へに來りたりとて、路を開いて避過しける。行者の輩忿氣然々として大雄殿前に到り、呼はつて曰く、「如來聽き給へ。我輩師徒、千萬の苦辛を凌ぎ、遙々と東土より來り、如來を拜して經を求むるに、阿難迦葉、我們が人事無きに因つて、故意無字の白本を與へしめたり。我們是を取歸りて何の要にかせん。如來快く兩個の和尚が罪を糺問し給へ」佛祖笑つて曰く、「儞們嚷ぐ事なかれ。阿難等が人事を要めんと云ひし事も、我能く是を知れり。但是此經、輕く傳ふべからず、亦空く求むべからず。向年、衆比丘等山を下りて、舍衞國趙長者が家に行て、此經を一遍讀誦し、他は家を保ち、生者は安全、亡者は濟度したりと雖も、他們黃金白銀米粒三斗三升を討め得て還りしすら、我尙忒だ賤賣とす。是を以て他們が後代の兒孫、嘗ず沒

錢使用かるべし。爾們白手にて求むる故に白本を與へたらん。然りと雖も、白本は無字の眞經、却て尊と雖も、但爾が東土の衆生、性愚迷にして悟る事能はず。然れば今更めて有字の眞經を與ふべし」とて亦阿難迦葉を呼び、此旨を命じ給へば、二尊者亦三藏四衆を領いて珍樓寶閣に到り、因て亦人事を要むる事初の如し。這時三藏、沙僧に命じて、紫金鉢盂を取出させ、自親双手に捧げて曰く、「弟子實に貧寒にして、且遠路を來り、曾て人事の准備候はず。這鉢盂は唐王より親手賜りたる處の器にして、弟子路上是を以て齋を化したり。今是を奉上して些少寸志を表せんと欲す。萬望は二尊者是を攸め給ひて、有字の經卷を我輩に與へ給はるべし」二尊者是を看て、三藏の經を求むる心の切なるを思ひ、是無上功德の和尚と成るべしと、個々暗に感じつゝ、許多の經卷を取出して與へければ、三藏は行者們と件一に取揚げて卷を披き看るに、正に是有字の經卷にて有りければ、四衆皆大に懽喜び、盡く齊整ねて馬に馱せ、其餘は一擔と做して八戒に挑せ、沙僧行李を擔ひ、行者馬を牽き三藏は錫杖を取り、如來の寶前に到りければ、如來則ち降龍伏虎の二大羅漢に命じ、雲磬を手响せ、諸天諸洞の佛菩薩、大小の尊者輩を呼び給へば、須臾天樂空間に响き、祥光四方に散亂し、遍く諸天の諸菩薩、三千諸佛、揭諦、金剛、五百羅漢、盡く集り來り、個々如來に禮拜し、大雄殿上に排列す。如來

諸佛諸菩薩に對ひ、東土に經卷を送る由を語り給ひ、然して後亦阿難迦葉に對ひ、東土に傳ふる經卷の數を問ひ給へば、二尊者謹敬んで逐一に是を報じて曰く、

涅槃經四百卷
首楞嚴經三十卷
寶藏經二十卷
大般若經六百卷
維摩經三十卷
正法論經二十卷
菩薩戒經六十卷
法華經十卷
西天論經三十卷
起信論經五十卷
本閣經五十六卷
維識論經十卷
菩薩經三百六十卷
恩意經大集四十卷
華嚴經八十一卷
大光明經五十卷
三論別經四十二卷
佛本行經一百一十六卷
大集經三十卷
瑜伽經三十卷
僧祇經一百一十卷
大智度經九十卷
正律文經十卷
俱舍論經十卷
虛空藏經二十卷
決定經四十卷
禮眞如經三十卷
未曾有經五百三十卷
金剛經一卷
五龍經二十卷
摩竭經一百四十卷
寶常經一百七十卷
佛國雜經一千六百三十八卷
寶威經一百四十卷
大孔雀經十四卷

如来
三蔵
有字の
経巻を給ふ

都て是三十五部、通計五千四十八卷を與へたる旨を報じければ、如來則ち三藏を宣して曰く、「這經功德無量なり。凡天下四大部州の天文、地理、人物、鳥獸、花木、器用、人事とも、這經に載せざるなし。爾們南贍部州に到らば、一切衆生に示し、慢に是を輕んずべからず。沐浴齋戒せずんば容易く卷を開くべからず」と示し給ひければ、三藏謹んで領掌し、頭を叩いて佛恩を謝し、幾回如來を禮拜し、徒弟們を從へ、急ぎ山門を立出で給ふ。當下觀世音菩薩、殿上に上前出て佛祖に向ひ、合掌して曰く、「弟子當年金旨を領し、東土に到りて經を取る人を尋ね、今已に功成れり。年を計るに都て是一十四年、日數五千四十日、唯是八日少くして藏數に合はず。今聖僧を東に歸し、東土に經を傳へ畢り、亦四個を西に向ひて歸らしめ、往來八日の間に有つて、一藏の數に合しめ候はん」如來是を聞き給ひ、特に歡喜び給ひけるにぞ、菩薩急ぎ八大金剛を宣して、「爾們快く唐僧に赶上き、唯八日の內に有つて東土に送り、亦這處まで轉廻し領來るべし」と命じ給ひける。金剛是を承諾つて、卽時に唐僧に赶上き、菩薩の命を備細語り、八日の間に有りて亦這處まで還るべき由を告げ、「聖僧我と一齊に來り給へ」とて、雲を縱て飛乘りける。行者が輩三個は原來飛行自在なり、白馬も同く凡胎ならざれば、個々雲に飛駕りける。是を看て三藏、這怎麼と躊躇ひ給ふを、行者師父の手を取つて雲の上に扯上げける。此時三藏既に凡胎を離れ、進退前と同じからず、輕々と雲に飛駕りけるにぞ、滿心歡喜に堪へず、是より個々金剛に從ひ、東に向ひて空中を飛去きける。

四編　卷之十

○九九數完魔剗盡　三三行滿道歸根

觀音菩薩、亦唐僧を守護したる五方揭諦、日値功曹、六甲六丁、護教伽藍の諸神を宣し給ひ、「唐僧今年までの苦辛、路上魔に遭ひ難を受けし事、其數幾個なるぞ」と問ひ給へば、揭諦們の諸神是を件一に奏上す。菩薩筆を採つて逐一に寫し給ふ。首め金蟬長老の下界に貶られしを第一難として、胎を出で江に拋げられしより、或は魔に遇ひ妖に捉れ、火に燒れ水に沈み、小雷音寺、火焰山、亦七情女、松林女子、銅臺府に獄せられ、凌雲河に胎を換るまで、幾個の難有しを盡く寫著し、是を計へ給ふに、都て是八十度の難ありけり。菩薩是を看畢りて曰く、「佛門の中、九九眞に歸すと云へば、唐僧既に八十難を過れども、九九の數全からず、這數を成さんと爲るに、亦更に一難を生ずべし。爾等今より唐僧に赶上き、快く一難を與へて九九の數全からしめよ」と命じ給ひければ、諸神這旨を領承つて、乍ち雲に打駕つて空中を走り、漸漸一晝夜を經て始て唐僧們に追及き、揭諦暗に八大金剛の耳に口を著けて這旨を細語きければ、

金剛打點頭き、忽ち乘りたる雲を刷的扯取つて、三藏四衆白馬も俱に、一齊に拋落したり。四個は凡地に落され、個々大いに驚き、「這抑奈何なる事ぞや。是我輩が走る事快きが故に、八大金剛、少時歇まん爲に、我們を地に下し給ふならん。不知這地は那れの處ならん」と四方を遙に打探看るに、東に一道の大河あり。則ち向年氷の中に陷入し、通天河の西岸なり。四個直に河岸に走り出で、三藏徒弟們に向ひ、「舊年這河の東岸に至りし時は、爾們陳家莊にて妖精を降し、他們が兒女を救ひ、他們船を備へて我們を渡し、亦僥倖に白黿ありて我輩を渡したれども、這西岸は船を求むべき處なし。怎麼して是を渡るべきや」と曰へば、徒弟輩商議を做して曰く、「師父既に凡胎肉眼を離れ給へば、決して前の如く水に陷入り給ふ事なし。我輩個々雲を使ひて、師父を駕せて度るべし。然れども行者が觔斗雲は忒だ快くて、師父未だ雲に駕慣ひ給はざれば、却て危からん。八戒沙僧が雲を一箇に合せて、是に駕りて師父を度すべし」と已に准備を做しける處に、忽ち水中に聲有つて、「唐聖僧這邊に來り給へ」と呼る者あり。四個驚き是を看れば、彼前年の白黿なり。岸の一邊に浮み出て、頭を擡げて曰く、「我這幾年、老師父の回り給ふ日を待詫びたり。今日僥倖に爰に來り給ふ。快く我が背に座して渡り給へ」行者笑つて曰く、「向年已に爾老黿を勞したり。今年亦再會して爾を勞せしむる事よ」とて、四

通天河ふ
船入る
三藏
九九の難
全く滅る

個懽喜び笑ひつゝ、馬を牽き行李を取り、彼が背上に踏著、三藏も徒弟們も皆背上に駕りければ、彼白龍四足を開きて水を踏み、平地を行くが如くにて、少時の間に東岸に近き、忽ち頭を回して曰く、「前年、師父若佛を拜し給はゞ我何の時人身を得べきか是を問ひ給はんと曰へり。今這事を尋ね來り給ひたるや」と問ひければ、原來三藏、西天にて佛を拜せし時唯經を得ん事にのみ心を蕩れ、他が事を問ふべきを不都と忘れ、曾て是を尋ねず。今他に問はるゝに及んで首て心著き、返すべき言もなく、唯頭を低れて在しけり。白龍則ち唐僧の是を問來らざるを悟り、忽ち心裡怒を生じ、撲的水底に沈みけり。這時三藏凡體にあらざれば慢に沈み給はず。徒弟們驚き、急に師父を水面に救ひ揚げ、白馬は原來龍の化身、同く水上に跳り出づ。經と衣服と盡く水に濕ひければ、個々東岸に登り、經包を開き水を乾さんと做す時、亦一陣の狂風颯的發り、雷電天地を動し、石を飛し砂を走らし、大雨車軸を轉す如し。行者鐵棒を輪し、是陰魔這經を奪んと爲るなるべしと、經を廻りて守護しける。八戒は馬を牽住め、三藏沙僧は經を按へ、遂に東岸にて一夜を明し、天明に及んで風定り雨止ければ、一邊なる石崖の上に到り、經包を開きて日に乾し、個々守護して座し居たり。這故に今に到りて、彼處に經を晒したる石尙存せりとかや。當下快幾個の漁人河邊に出來りけるが、都て三藏師徒を認得り、「這老師父は、前年此處の難を救ひ、陳家莊に留住し、西天に赴き給ひたる聖僧なり。我們快く陳家莊官に告知らすべし」とて急ぎ跑り皈り、這由を陳家に報じければ、陳澄兄弟是を聞いて、物も取敢ず、幾個の漁夫佃戸們を隨帶れて河岸に跑り來り、三藏們を看て禮拜し、「老師爺々、怎麼我家に來り給はざるぞ。這に在して何をか做て居給ふ。快く我が家に來て歇み給へ」とて、只管に拜請しけるにぞ、三藏他們が誠心を感じ、遂に經卷を把收め、陳家莊へ赴き給ひけるが、不期佛本行經石上に沾ひ破れ、幾卷を壞ね失ひけり。今に到りて本行經全からず、晒せる石上に殘りけり。三藏は是を看て、「這我輩が不德の致す處なり」と歎き給ひければ、行者笑つて曰く、「天地の間都て全からず。今這經沾ひ壞れて全からざるも妙に應ず。人力の及ばざる處なり」と說話りつゝ行くに、不多時陳家に到りければ、陳澄兄弟家裡の個々出迎へて、正堂に請じ入れ、厚く往時の恩を謝して懽喜びける。當下莊上の人家這由を聞傳へ、盡く來りて拜す。亦萬般の珍味を備へて慇懃に管待しける。三藏師徒は西天にて仙品仙肴を食してより、全く凡世の食を要めずと雖も、他輩が厚意を思ひ、纔に食して止みにけり。八戒も亦碗を把置き、「我怎麼の故を知らず、脾胃一旦に弱りたり」とて遂に齋筵を收めさせけり。莊上の漁夫佃戸們、三藏四衆の經を取歸り給ひし說話を聞き、「我們親く活佛を拜す。那ぞ這上の僥倖有

らんや」とて、個々隨喜感歎し、且這地に長く住り、我們が供養を受け給へ」とて強て住めけるにぞ、三藏他們が深志忍がたく、沒奈何其日は滯留し給ひけり。斯て其夜三更の頃に到り、三藏悄々に行者を呼び、「這地の人家、已に我輩が功業成就せるを知る。古より眞人は相を露さずと云へり。斯る土地に久く在らば、怕らくは大事を過つ事有らん」行者點頭いて曰く、「師父の曰ふ處大いに理なり。我們半夜に悄々に忍出づるに如かじ」とて八戒沙僧を呼醒し、路に出るの准備を令做れば、八戒前と大いに同からず、急ぎ起出で、這由を聞いて是理なりと點頭き、頓て經包を馬に馱せ、行李を擔ひ、經担を取り、行者解鎖の法を行ひ門を開き、一齊に竊出で、東に向ひて急ぐ所に、忽ち空間に聲有つて、「逃去の人、快く我に跟ひ來り給へ」と呼りけり。是則ち八大金剛なり。三藏師徒是を聞いて懽喜び、急ぎ亦祥雲に打駕りて、一陣の香風を發し、東に望んで飛去りけり。

○徑回東土　五聖成眞

話表八大金剛、祥雲を縱ち香風を發し、師徒四衆を送りて、纔一日にして東土に到り、已に長安に近づきける時、金剛指ざして曰く、「此地既に大唐長安城なり。我們像を現す事好しからず。師父雲を下りて行き給へ。徒弟們も從ひ行くに及ばず。唯聖僧一個、經卷を帝に獻りて後來り給へ。我們爰に在て待ち、同く西天に還るべし」行者及び八戒沙僧、聲を齊うして曰く、「師父怎麽して經を挑ひ馬を牽き給ふべき。我們俱に從ひ去くべし。萬望は尊者少時待ち給へ」八大金剛の曰く、「西天に於て、觀世音菩薩、八日の裡に往來し、一藏の數に合すべし、と宣へり。然るに今既に五日を經たり。怕くは八戒富貴を貪り日限を過つ事有らん」八戒笑つて曰く、「師父成佛し給はゞ、我も亦成佛を望まざらん。今慢りに富貴を貪りて何にかせん。尊者心を安んじ、暫く爰に待たせ給へ」とて、八戒經を挑ひ、沙僧馬を牽き、行者師父を扶け、一齊に雲を下りけり。

原來那太宗皇帝、貞觀十三年九月望前三日、帝三藏に經を取來るべき旨を命じ給ひ、城を出して西に送り、其後十六年に、工部官に命じ、長安城の西に望みて一個の經樓を造立し給ひ、年々其地に行幸ありしが、正に這日、復御駕を廻らし這樓上に御在ましける處に、忽ち西方空中より香風颯と發り、祥雲靄々と靉靆き、三藏師徒樓邊に下り來りければ、太宗驚き歡喜び、急ぎ樓を下りて、衆位の群官兩行に排列し、是を迎へ給へば、三藏三個の徒弟を領列れ、雲を下りて地上に跪下きて拜しければ、太宗則ち禮を受け給ひ、頓て近侍の官に勅し、三藏を馬

に上せて、太宗御駕を廻らし、大家朝に還り入り給ふ。斯て朝中に到りければ、三藏三個の徒弟輩を呼び、經卷を運ばせ、盡く皇帝に獻上り、亦關文を取出し奉上し、「臣僧、勅命に因つて西天に到り、佛を拜し經を求め、當下歸朝致し候、則ち經數三十五部、通計五千四十八卷、蓋此數合一藏なり」太宗皇帝大いに懽喜び給ひ、「不期も朕大乘の眞經を得ん事を思ひ、許多爾を勞したり」とて、近侍官に命じて彼經卷を件一に收め給ひ、亦關文を取つて披き看給ひければ、上首寶象國、烏雞國より連々に、車遲國、西梁女國、祭賽國、朱紫國、比丘國、滅法國、亦鳳仙郡、玉華州、金平府等の寶印を盡く列ねたり。太宗曰く、「西方靈山まで行程幾個ありや」三藏曰く、「都て是十萬八千里と承り候」太宗曰く、「路上的極めて難爲多かりつらん」三藏則ち、路上的千萬の艱難に遇ひし事を落もなく說話り、西天大雷音寺にて佛を拜し、首め無字の經卷を要め、後有字の經卷を得し事、亦靈山の光景を演べ、其外行者八戒沙僧們が出生を說き、他輩が助に因りて魔を降し妖を伏し、功業成就し、白馬が原身龍なる由など、備細說話りければ、太宗首め衆位の近士官、聞く事毎に讃嘆し、頓て東閣を開いて素筵を設け、三藏を請じて大いに管待し、亦三個の徒弟輩をも宣し給ひけるを、三藏告げて曰く、「他們三個は原山野の出生、一向に唐朝の禮を知り候はず。萬望は是を赦し給へ」太宗曰く、「苦しからず。快く這へ導引ひ來るべし」とて、衆官に命じて、行者が輩三個をも俱に東閣に請じ入れ、同く宴を賜はりける。斯て天晩に及びければ、遂に宴を收め、師徒四個、君恩を謝し閣を辭し退きて、古の持住の寺洪福寺に入り給ふ。這洪福寺に一樹の松有り。上首三藏西天に赴くの時、衆僧輩に誓つて曰く、「這松枝葉東に向ふ事有らば、我歸り來るべし」と云置きて出給ひけり。其時は貞觀十三年望前三日なり。今年貞觀二十七年、其間十四年を經て、此程這松枝葉盡く東に向ひけるにぞ、偖は師父の歸り給ふならんと、個々怪み在りける處に、一日經を取る僧歸り給ひぬと告來る。衆僧驚き且懽喜び、急ぎ寺中を掃ひ旗幢を飭り、個々法衣を更めて門を出て待ちける處に、太宗皇帝許多の官士を差添て、三藏師徒を洪福寺に送り來る。寺中の衆僧皆出て是を迎へ入れ、個々禮畢りて、頓て齋を備へ來る。三藏師徒纔に是を吃し終りければ、寺中の衆僧、三藏師徒の座前に充滿して、天竺靈鷲山の光景、亦路上妖怪に遇ひ、火に燒かれ水に陷入り、萬般の艱苦の事など聽聞し、深更に及んで、奥室に寐處を設け、安寐せ參らせけり。三個の徒弟、這時既に道果を得たれば、十分穩和にして、一個も亂話ひ嚷ぐ者なく、其夜大家洪福寺に宿しけり。翌烏、三藏亦入朝して太宗を拜しければ、帝曰く、「朕昨宵御弟の功廣大にして酬謝し難きを思ひ、幾句の俚談を綴りて、權に且

謝意を表するなり」とて、頓て中書官に命じて是を寫さしめ、三藏に與へ給ふ。三藏是を頂戴し、讀畢りて大に懽喜び、再三頭を叩いて稱謝しけり。其文は、今の世に傳ふる聖教の序則是なり。故に爰に畧す。太宗亦御弟を鴈塔寺に拉ひ、眞經を演說せしめて聽聞すべしと、俄に鴈塔寺に行幸あり。鼓樂を奏し天蓋を捧げ、三藏は御駕に從ひ、三個の徒弟馬を牽いて師父に續き、遂に鴈塔寺に到り給ふ。斯て三藏太宗に對ひ、「主公眞經を天下に傳流へ給はんと思召さば、當に謄錄副本を以て天下に布散め給ひ、原本は深く珍藏し給ひ、慢に輕褻し給ふべからず」と奏しければ、太宗是を聞いて、「朕能く是を守るべし」と曰ひけり。斯て三藏は、太宗の命に從ひ、高臺に登りて眞經を諷誦せんと爲給ふ處に、忽ち空中に香風を發し、八大金剛全身を現し、高く叫んで曰く、「聖僧、諷誦を止めて我輩に跟ひ、快く西天に皈らせ給へ。正に八日の日を違ふ事を過つべからず」と呼りける。三藏是を聞いて乍ち經卷を放下き、太宗を再拜して曰く、「臣僧、今八日を限りて靈山に歸るべきの誓を做來れり。今より去つて佛祖に見え候なり。御餘波は盡きず候へども、今より御暇を給り候へ」と云ふかと思へば、忽ち半空に飛騰りける。臺下に在りし三個の徒弟輩、白馬も俱に、一齊に虛空に騰り、祥雲を踏んで金剛に跟ひ、大家西方に向ひて飛去りけり。太宗を首め衆官衆僧、是を看て大に驚き、

只管西の空を望んで禮拜し、遂に亦別に高僧を擇んで、鴈塔寺に於て水陸大會を執行し、大乘の眞經を讀誦せしめ、幽冥の業鬼を濟渡し、亦翰林院中書科等の官に命じ、數部の眞經を謄寫さしめ、遍く世界に布散めさせ給ひけり。今世に到るまで、三藏の道德を載き尊敬まざるは無かりけり。

却說三藏師徒は、金剛と俱に雲に駕り、西天に飛去りけるが、果的往來八日の間に在りて雷音寺にぞ到りける。當下如來、諸位の佛祖、諸菩薩、諸神等を盡く宣聚め、大雄殿上に排列せしめ、三藏輩四個を座前に呼出し、個々職を授けしめ給ふ。且三藏を寶蓮座近く宣し給ひて曰ひけるは、「聖僧、爾が前生は我二徒弟金蟬子なり。爾說法を聽かず、慢に大教を輕んずるに依りて、爾が魂を貶て東土に轉生せしむ。今僥倖に我が教に從ひ、經を取つて東土に送りて、其功廣大なり。因て用ひて爾に大職を加へ陞し、旃檀功德佛と爲すべし」と曰ひければ、三藏是を聞きて大いに懽び、再拜して佛恩を謝し、一邊へ退きけり。如來亦行者を座下に呼び給ひ、「悟空、爾は五百年前大いに天宮を鬧し、吾法力を以て五行山下に壓在きたりしが、倖ひに今天災滿畢りて佛敎に歸依し、聖僧を守護し、魔を捉へ怪を降し大功有り。因て用ひて爾に大職を加へ、陞して鬪戰勝佛と爲すべし」と曰ひ、亦八戒沙僧を呼び給ひ、「猪悟能、爾古蟠

桃會上に在つて、酒に醉ひ仙娥に戲れ、其罪に因て下界に貶られ、身を畜類の腹に宿り、福陵山に在つて妖怪となれり。然れども倖僥に、我が沙門聖僧を保守りて、路上妖魔と戰ふの功あり。然れども懶惰にして色情未だ泯めざれども、擔を挑ひ師父を助くるの功亦捨難く、爾に大職を加へ、陞して淨檀使者と爲すべし」八戒是を聞いて口裡に低語いて、「他輩都て佛と成る。怎麼我一個淨檀使者と做すや」と云ひければ如來曰く、「爾原食腸寬大にして大食を求む。今天下四大部州、我が敎に從ふ者數を知らず。凡諸衆の佛事供養の時、爾檀を淨むるの職に在らば、供養の品級を受用し、却て是好しからずや」と。亦沙僧に向ひ曰く、「悟淨、爾蟠桃會上に玻璃盞を碎き、下界に貶られて、流沙河に怪と成りて人を吃す。然れども今我が敎に歸依し、聖僧を保守り馬を牽き、我が山に來りて經を取るの助を做す。其功に因つて爾に大職を加へ、陞して金身羅漢と爲すべし」と。亦白馬を呼んで曰く、「爾原西洋大海廣晋龍王の子にして、父の命に逆ひ不孝の罪ありと雖も、今釋敎に歸依し、聖僧を負ひ、我山に來り、亦經卷を馱ひて東土に還り、亦這に再び來る。這功德に因りて爾に職を加へ、陞して八部天龍長者と爲すべし」是を聞いて師徒四衆大いに懽喜び、再拜して、頭を叩いて佛恩を謝す。如來亦揭諦に命じ、白馬を牽かせ、靈山の後崖なる化龍池の中へ推入れさせ給ひければ、須臾の間に、白馬毛を去り皮を除き、身長く成り、頭上に角を生じ、身中に鱗を發し、看々一條の金龍と成りにけり。揭諦金龍を寶前に領來れば、行者當下三藏に向ひて曰く、「我今已に佛と成て師父と一般なり。這後緊箍咒を念へて我を苦困め給ふ事も有るべからず。萬望は鬆箍咒を念へて、緊箍を脫下して捨て給へ」三藏曰く、「昔觀音菩薩、曾て我に這法を敎へて爾を制せしむ。今已に佛と成れり。那ぞ再び緊箍咒を念へて爾を苦困めんや。且爾快く頭を看よ。緊箍一向に有る事なし」行者手を以て頭を撫て見るに、何の程にか快く緊箍脫去つて痕跡も無りければ、行者懽喜ぶ事限りなし。是よりして四衆皆一齊に正果に歸し、天龍も亦正果を得て、諸佛諸菩薩と諸俱に排列す。當下天華繽紛として降り、音樂四方に响き度り、妙なる事云ふべからず。大衆皆合掌して這佛名を念へて曰く、

南無然燈上古佛　南無藥師琉璃光王佛　南無釋迦牟尼佛
南無過去未來現在佛　南無淸淨喜佛　南無毘盧冐佛
南無寶幢王佛　南無彌勒尊佛　南無阿彌陀佛
南無無量壽佛　南無接引歸眞佛　南無金剛不壞佛
南無寶光佛　南無龍尊王佛　南無精進喜佛

南無寶月光佛　南無現無愚佛　南無婆留那佛
南無那羅延佛　南無功德華佛　南無才功德佛
南無善游步佛　南無旃檀光佛　南無摩尼幢佛
南無惠炬照佛　南無海德光明佛　南無大慈光佛
南無慈力王佛　南無賢善首佛　南無廣莊嚴佛
南無金華光佛　南無才光明佛　南無智慧勝佛
南無世靜光佛　南無日月光佛　南無日月珠光佛
南無慧幢勝王佛　南無妙音聲佛　南無常光幢佛
南無觀世燈佛　南無法勝王佛　南無須彌光佛
南無大慧力王佛　南無金海光佛　南無大通光佛
南無才光佛　○南無旃檀功德佛　○南無鬪戰勝佛
南無觀世音菩薩　南無大勢至菩薩　南無文殊菩薩
南無普賢菩薩　南無清淨大海中菩薩　南無蓮池海會佛菩薩
南無西天極樂諸菩薩　南無三千揭諦大菩薩　南無五百阿羅大菩薩

南無比丘夷塞尼菩薩　南無無邊無量法菩薩　南無金剛大士聖菩薩
○南無淨壇使者菩薩　○南無八寶金身羅漢菩薩　○南無八部天龍廣力菩薩

如是等一切世界諸佛。願以此功德。莊嚴佛淨土。上報四重恩。下濟三途苦。若有見聞者。悉發菩提心。同生極樂國。盡報此。十方三世一切佛　諸尊菩薩摩訶薩　摩訶般若波羅密

繪本西遊記終

大正十五年十一月十三日印刷
大正十五年十一月十六日發行

有朋堂文庫
繪本西遊記
（非賣品）

編輯者　東京府下大久保町西大久保二百三十六番地　塚本哲三

印刷兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

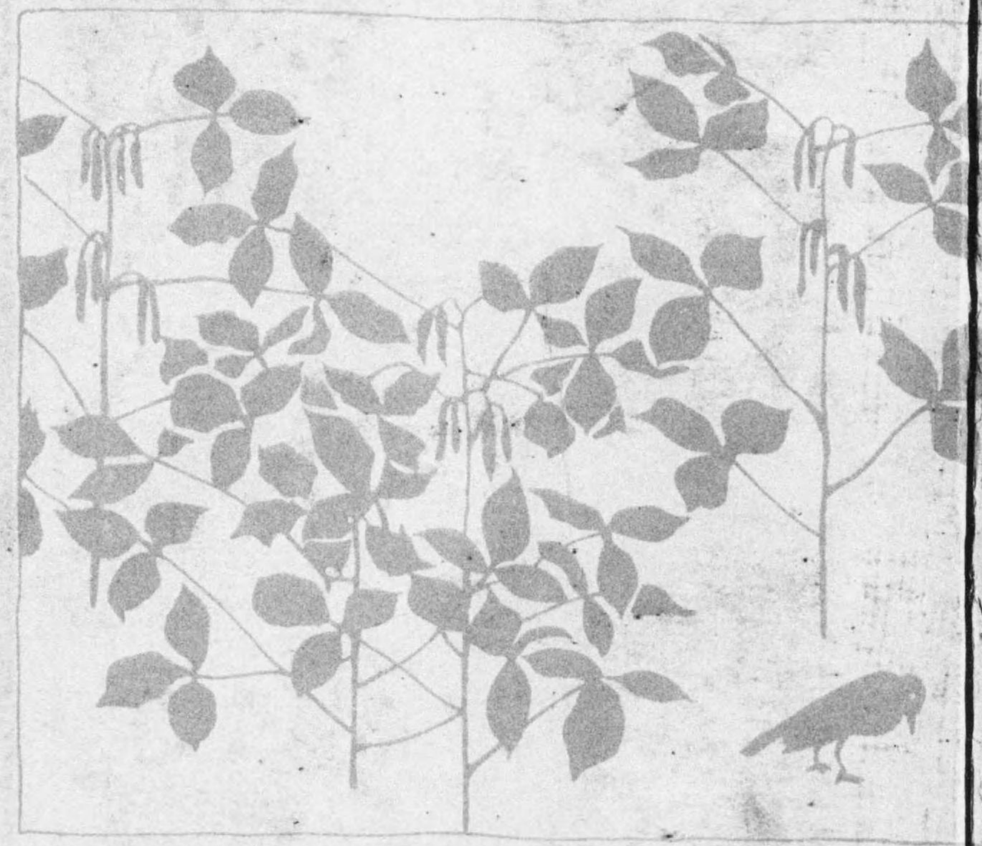
印刷所　東京市神田區錦町三丁目九番地　有朋堂印刷所

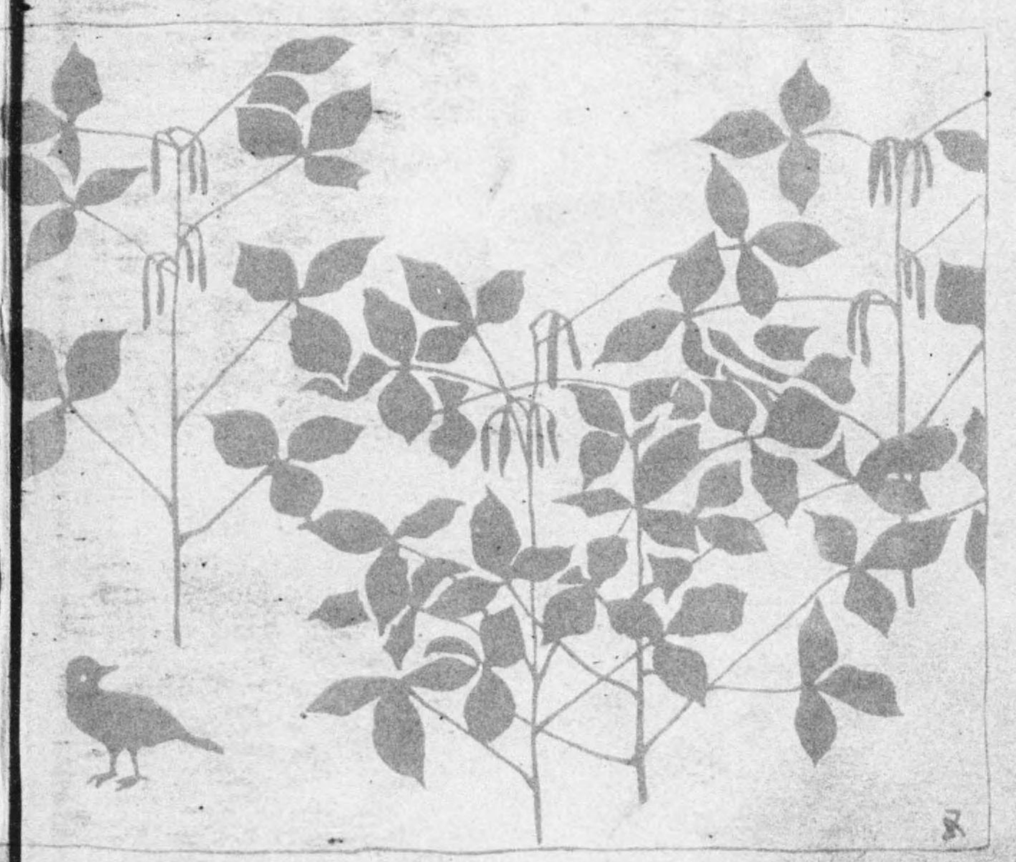
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

不許複製

543
40





終